云く、海晏汝清、瑠璃殿上に知識無し。雪竇云く拈了也。

（講說）唐の玄宗、肅宗、代宗の三皇帝は、共に佛敎に歸依厚く、殊に禪門に心を寄せ、肅宗、代宗の兩帝は親しく參禪までされたと云ふ。そして肅宗は玄宗の第三子にして、代宗の父に當つて居るのであります。忠國師とは光宅寺の慧忠國師のことで、忠國師初め南陽鄧州の白崖山に入つて修養し四十餘年間山門を出ず。現はさんとするものは還へつて隱れ、隱れんとする者却つて現はるゝの道理で、忠國師は四十年間も白崖山に立て籠つて居たが、其道譽帝里に聞え、遂に上元二年勅使來つて國師を宮中に迎へた。扨て吾等は忠國師の樣に、四十年間も山に引き込んで修行は能きぬ。殊に現時文明の度が進み、萬事繁雜多忙の世の中では、こんな馬鹿々々しいことは能きぬ。故に吾々には惜しい哉修行は能きぬなどゝ、捨て鉢に出るものもあらうが、實際當今の世の中では、四十年は扨て置き一年もこんなことは能きまい。然し修行をし、所謂聖體長養するには、必ず山に立て籠つて、十年も二十年も世の中の事を打ち棄てゝ居らねばならぬといふ規則もなれば、道理もない。日々是好日、頭頭卽道場で、其日其日が修養すべき時で、其處々が修養すべき場處であります。目に見る所、耳に聞く所、總て是れ修養の好材料で無いものはない。吾々が毎月同じ樣に、南に北に東奔西走して居るのは、決して師家らしき顏をしやうといふ譯でなくて、共に修養して行きたい心掛けで居ります。故に納は常に行脚と云ふ語を用ひて居ます。古人も敎ふるは學ぶことだといつて居ますが、實際日々修養

させて貰つて居ると思ひ、及ばずながら提唱もすれば說敎もする。今日在家の居士方でも、自分々々の職務を有てば、其本分の職務を執りながら、此聖體長養が能きるし、修養することが能きる。決して此多忙な世の中で、山に立て籠らねばならぬとは言はぬ。妙心寺の關山國師は、美濃の伊深山で、牛飼ひをして、百姓等に驅逐されながら、聖體長養して居られた、難有いことであります。又大燈國師は京都の五條橋下で、乞食を相手にしつゝ修養して居られました。そして此大燈國師も後醍醐天皇の勅命を被つて、參內して法を說いたと云ふが、今本則の忠國師も、肅宗皇帝に迎へられました。肅宗は待遇するに、師の禮を以てし、甚だ敬重せられました。或る時國師が帝の爲めに無上道を演說し、宮中を退出する時、帝自ら國師の乘れる車を押されたと云ふ事すらあつたので、群臣之れを不祥としました。又或る時忠國師帝に奏して、

『吾れ帝釋天の前に立つて見廻した所、栗粒位な國で、王位に卽いたなどゝ、榮華な夢を見て居るが、帝王の夢も閃電光のやうなものぢや、今眞實の福德を積まねば、閃電光の如く消え去つて了ふ。』

と說かれました。人或は之れを以て不敬事件だと云ふが、汗は宗敎を解せざる者の言で、宗敎上より見れば、更に不敬なことはありませぬ。人間同志の事を說くのは所謂人道で、人間以上のものとの交涉を談ずるは宗敎であります。帝愈々國師を敬重し、延いて光宅寺に止まらしむる事十六年。代宗の大曆十年國師遷化す。然るに國師と同學の友に靑銼山和尙と呼ぶ者あつて、靑銼山中に在つて修養接

化して居る。國師帝に奏して、詔して彼を招かしむ。帝三度び詔せられたけれど、固辭して起たず、而かも常に國師を罵倒して、

『名に耽り、利を愛し、人間に戀着す。』

と言つたさうだ。之れは青鉞山和尚の言、自ら其德を傷つくるものであります、其德や忠國師と到底比肩能きませぬ。固辭して自ら起たざる所は、未だ容すべしとするも、人の利他敎化して居るのを罵倒するに至つては恕されない。昔は大聖世尊上求菩提の爲めには、學者を歷訪し、山に入り、苦行を企て、靜坐工夫をも凝らされたが、一朝大覺を得てよりは、下化衆生の爲めに、菩提道場を起つて、一世の間、說法獅子吼に寧日なき有樣でありました。道の爲めには世間を棄て、王位を棄て、妻子を棄て、一切を棄てた釋尊が、下化衆生の時には、王者と交り、世間に入つて說法して居らるゝではないか。若し忠國師の行ひが人間に戀着して、名利を貪るものならば、釋尊の如きは、猶ほ更人間に戀着して名利を貪つたと謂はねばならぬ。然し亦考へれば、一方に於て、恁う云つて罵倒する者のあるものも可いのであらう。本則は垂示を缺いて居る故一言忠國師の事蹟を贊した、圓悟の評唱にも出て居るから、一覽して置くが可からう。『擧す肅宗皇帝、忠國師に問ふ、百年後須むる所何物ぞ』忠國師老年に及んでから、一日肅宗皇帝が國師を見舞ひ、長々說法を聽かれましたが、百年後求むる所があらば、今の中に言つて置かれよ、其望みの如くして參らせんと言はれた。百年後とは死後と云ふ

に同じ、佛敎では人壽百歲と定めてあるから、百年後と云へば死後と云ふことに爲ります。今は人壽平均三十五歲だとか、百二十五までは生きられるとか云ふけれどそんなこともあらう。さて國師はこの問ひに對して何んと答へられたか。普通の坊樣なら、祠堂金の一千兩に、田地の十反も出して貰ひたいと云ふ所だが、忠國師はそんな俗僧でないことで分つて居る。『國師云く、老僧が興めに箇の無縫塔を作れ』此老僧今更何んにも望みは無いが、唯一つ卒塔婆一基建てゝ貰ひたい。それも無縫塔で大工や、石屋の作らぬ塔で、縫ひ目なしの着物が欲しいものだ、それより外に望みはない、さて〳〵難かしい物を望まれた。祠堂金なら千兩や二千兩、肅宗皇帝には何んでもあるまいが、箇の無縫塔を作れと望まれたのには、聊か閉口されたやうであります。『帝曰く、請ふ卒塔樣』肅宗皇帝も國師の敎を受けて居つたものだから、流石に默つては居らぬ。それなら其圖面を出して貰ひませう。設計通りに建立して上げますから、早速圖面を見せて貰ひたいと言はれた。『國師良久して云く會す麼』國師は此處で良久した、良久は默する貌で、默と云へば語に對して面白くないが、良久と云ふと面白い。そして其默然良久も、只瓦石の如く默して居るのでない。此良久を究めるのが一つの調べ事であります。國師の良久は果して何んであつたか、帝に圖面を出せと迫まられて、其處で行き詰つた譯ではない。敢て問ふ、國師の良久其意如何、諸人試に道へ。さて國師は良久して而かも云く、會すや、分りましたか、御求めの圖面は此通りで御座ると云はれた。『帝云く不會』肅宗皇帝には其示された圖

面が見えぬ。依つて正直に不會と答へられたが、此不會が亦面白い。白隱は壯觀々々と著語し、拍手して居られます。帝が正直に不會と云はれたから、今度は國師の方でも、正直に說明せねばならぬ。然し說明するのは最と易いことであるけれど此處で說明してしまつては興味がない、それで之れを宿題とし、而かも其說明を弟子に讓られた所に、言ひ知れぬ難有味があります。『國師云く、吾に付法の弟子耽源と云ふ者あり、却つて此の事を語んず、請ふ詔して之を問へ』然らば其圖面のことは、付法の弟子耽源から聞き取つて下さい、彼れは萬事心得て居りますから、彼れを呼んで命じて下さいと、事を弟子に讓る所、甚深の妙味があります。一と口爰で國師が言つて了へば何んでもないがこれは決して法を惜しむのではなくて、此間に工夫の餘地を與へ、而かも功を弟子に讓る師匠の慈悲の光りも閃いて居るやうに思はれます。『國師遷化の後、帝耽源に詔して此意如何と問ふ』肅宗爰に於てか、忠國師遷化の後、耽源に詔して、朕、忠國師に百年後須むる所何物ぞと問ふた時、國師は老僧が爲めに箇の無縫塔を作れと答へられた。其處で朕が其塔樣を示せと請ふた所、國師良久して會すやと云はれたが、此良久は分らぬ、其塔樣は何んな物であらう、師之れを說けと勅せられました。耽源も此時夫れなら圖面は此の通りでと言はず直ぐに、

『湘之南潭之北、中有二黃金一充二一國一、無影樹下合同船瑠璃殿上無二知識一。』

の一頌を以て答へられた。斯う云ふ場合には、露骨に說明するよりは、詩歌を以て答へると奧床しい

ものであります。太田道灌が京都へ上つた時、正親町の院から、都鳥とは如何なる鳥だと問はれた時

年ふれどわれまだ知らぬ都鳥
すみだ川原に宿はあれども

と奏上しました。ところが此和歌で答へたのが、大いに院の御意に叶つたのでありませう。直ぐさま

武藏野は淺茅が原と思ひしに
かゝる言葉の花も咲きけり

といふ返歌を下賜せられたといふ話もあります。併し今耽源の偈頌は、却々難かしく、雪竇は一句一句に著語を附しました。『湘の南潭の北』湘南潭北は土地に就いたことであるけれども、土地の上などに附き纏つてゐては、到底眞意は得られませぬ。『雪竇著語して云く、獨掌浪りに鳴らず』此語は、白隱和尙の隻手の聲の憑據で、獨掌浪りには鳴らぬが、時に亦大いに鳴ることもある。其隻手の聲を聞き得る人でならば、湘南潭北の位地は分りませぬ。『中に黃金有りて一國に充つ』中に黃金ありといふたのは何んでありませう。中は湘南潭北の中間だなゝ、文字を以て解釋しやうとしたり、文字で當てやうとするものは、邪解に陷る、黃金といふのは心であらう。靈魂であらうなどゝ言ふ輩もある。肅宗もこんなに言はれては、迂濶してはゐられませぬ。『雪竇著語して云く山形の柱杖子』山から切り出して來たばかりで、小刀の刄も入れぬ其儘のステツキか何んだか分りませぬ。『無影樹下の合同船』

影のない樹といふのも珍らしい。恐らく響きのせぬ谷に、植ゑたものもなくして生え、風も吹かぬに枝が哮えてゐる木であらう。合同船は、うつろ船で、佛も鬼も、煩惱も菩提も、有も空も、邪も正も共に一丸とした船であるといふのか。『雪竇著語して云く海晏河清』日本晴れて、一望千里見渡す限り一と目に見えて、洪波浩渺で航海平安だ。『瑠璃殿上に知識無し』瑠璃の殿上であるから、八面玲瓏立派なものだ。此宮殿には、一切の差別を拂ひ盡して一味平等、佛もなければ鬼もない、衆生もなければ智識もないなどゝいふまいぞ。これが其無縫塔の下圖で御座ると擔ぎ出しました。『雪竇着語して云く、拈了也』拈は常に拈起の意で用ひるけれど、今は反對に拈却の意で、見ツとも無い瑠璃殿なんか取り去つて了へと徹退されたのである。扨て此頌に來つては更に分らなくなつたが、此境界卽ち良久の處が分かると、九尺二間の裏長屋の中で、立派に此頌を實現することが能きる。

無縫塔、見還難、澄潭不レ許蒼龍蟠、層落々、影團々、千古萬古與レ人看。

（訓讀）無縫塔見ること還つて難し、澄潭には許さず蒼龍の蟠るを、層落々影團々、千古萬古人に與へて看せしむ。

（講說）『無縫塔見ること還つて難し』雪竇頌して先づ箇の無縫塔を出した。然し此無縫塔に就いては、肅宗皇帝も持て餘して居たので、今雪竇が爰に無縫塔を出したからと云つても、肅宗皇帝に

は見ることは能きぬ。只肅宗皇帝ばかりではない、凡そ眼で見やうと思ふ者あれば、さう云ふ人に到底見難い。又耳で聞かうとして居る時には、決して聞えるものでない。卽ち、此言語を絶した無縫塔であるから、目や耳で聞かうと思つたが、抑も間違ひの基と爲つたのであります。然し雪竇は此二句で、十分忠國師の無縫塔を賞讃して居ます。『澄潭許さず蒼龍の蟠るを』澄潭は澄み渡つた深い淵であります。蒼龍は老龍と同じで、海に千年、山に千年の老龍であります。斯の如き老龍に爲れば、決して澄潭には住まない。大抵の者は忠國師の良久した所に、塔が顯れて居るだらうと思ふけれど、そんな處に老龍は居らぬ。若し澄潭に向つて蒼龍を求めやうとすれば、株を守つて兎を待つの類である。圜悟の師匠の五祖法演禪師は、碧巖百則の頌中で、此『澄潭不レ許蒼龍蟠』の一句を愛すといつて、此句を激賞して居るが、其麼に意に契つたのであらう。『層落々影團々』爰に於て其無縫塔を取り出して見せたが、キヨロツトと目がつぶれる。立派な塔ぢや其の大きさ限りがない。廣大無限の無縫塔で、莊嚴善美を盡して居る。團々落々たる所、亦復言語に絶して居る。之れを無限大と云はうか、實に十方法界に遍滿して居て、僧の如く、佛の如く、男の如く、女の如く、山の如く、水の如く、其儘其處に羅列して、柳は綠花は紅であるのに、あまり廣大である爲めに、キヨロツとしては尙且見えぬ。『千古萬古人に與へて看せしむ』此の大工の手にかゝらぬ、石屋も作らぬ、影團々層落々たる廣大の無縫塔は、無始劫の古へより盡未來際まで、歷然分明に磅礴として現はれてあるにも拘らず、之れを知る

者は尠い。勝手に見られるやうにしてあるのに、三世十方の諸佛方を初めとし、西天東土の列祖方に至るまで、之れを見得ない、況んや吾々凡人をや。然し此見ること還つて難き箇の無縫塔も、一面より言へば、見ること亦易しとも言ひ得られる。

第十九則　俱胝一指頭

垂示云、一塵擧大地收、一花開世界起。只如塵未レ擧、花未レ開時一如何着レ眼。所以道如レ斬二一綟絲一、一斬一切斬。如レ染二一綟絲一、一染一切染。只如今便將二葛藤一截斷、運二出自己家珍一、高低普應、前後無レ差、各各現成。儻或未レ然、看二取下文。

（訓讀）垂示に云く、一塵擧りて、大地收り、一花開いて世界起る。只塵未だ擧らず、花未だ開かざる時の如くんば、如何んが眼を着けん。所以に道ふ、一綟絲を斬るが如く、一斬一切斬、一綟絲を染むるが如く、一染一切染。只如今便ち葛藤を將て截斷して自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無し。各々現成せん儻し或は未だ然らずんば、下文を看取せよ。

（講說）垂示は何時も、本則を的に懸けて置いて、下して居る小序でありますが、殊に此俱胝一指頭の一則は、一指頭を前に引き付けて置いて、この垂示である。『垂示に云く、一塵擧りて大地收り、一花開いて世界起る』此語の出處を求むれば『華嚴經』などには澤山あるが『華嚴經』に限つたことはない、其他にも類同の文は尠くはない。一塵は實に微小なるものである。然るに此一小微塵が擧つ

ても、其一小微塵中に能く大地を收め盡す。路傍の草花が一輪開いても、此花中に能く全世界を起し現はすことが能きる。何んでも其通り一指を立てれば、一指の中に法界現じ、一息すれば須彌をも動かすと云ふ皆同樣の眞理より言ふのであります。之れ唯誇大妄想狂と同日に論ずべきものではない。禪は何んでもなき事と言へば、それで可いなどゝ考へ、心にもなき大言壯語を吐いたりするのは、一種の禪病であつて、精神病學者の所謂誇大妄想狂であります。『只塵未だ擧らず、花未だ開かざる時如何んが眼を着けん』塵も起らず、花も開かざる。其前は如何、卯の毛一本形を作さゞる時如何と究むるのが、凡そ禪學初入門と爲つてゐます。父母未生前の我れに向つて識得せねばならぬ。六祖大師の悟入せられた徑路はこれでありました。眞如隨緣で、緣起した上に就いてなら見易い事であるが、其眞如の隨緣せざる以前は何うかと調べると、却々分らぬ。俱胝和尙は指一本で掃蕩門にも用ふれば、建立門にも用ひて居るが、其堅起せざる時の指は如何と着眼して觀究めねばならぬ。『所以に道ふ、一綟絲を斬るが如く、一斬一切斬、一綟絲を染むるが如く、一染一切染』これは第二段で、絕後に再び甦へる底の有樣を陳ぶ。一綟絲で、一束の絲を斬るが如きもので、一本切れると同時に、一束はザクリ切れて了ふ。一塵を去り、一花を散せばそれと同時に天地も世界も共に無くなつて了ふ。一卽一切であるから、一斬一切斬である。一絲を斬る時卽ち一切を斬る。煩惱菩提、佛魔邪正、一切揃へて置いて、ザツクリ斬つて落す。一染一切染の場合も、一束の絲を藍瓶に入るれば、一絲の染まる時、同

時に一束染まつて了ふ。一絲をザンブリ藍瓶に入れて染める時、生死涅槃、善惡迷悟、同時に染め拔いて了ふ。此自由の働きがなくては駄目だ。只一本の指一つで何んでも遣ると云ふ所に、悟りの有難い所があります。『只如今便ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無く各々現成せん』文字言句で示す所のものは、卽ち葛藤であるが、其葛藤を截斷し、文字言句を離れ、一切道理を捨てゝ、而かも自己の家珍を運出せねばならぬ。自己と云ふて、勿論自我的のものでない。又家珍と云ふことも面白い語で、古人は『門より入る者は家珍に非ず』と言つて居られるが文字言句の門より入れた寶でない、自己自ら造り出した寶こそ家珍である。此自己の家珍を運出すれば、七通八達、自由の働きが能きる。高低普く應じ、前後差ふこと無しで、佛も凡夫も障碍なく、煩惱卽ち菩提と爲り、因果同時差別なき故、生死卽ち涅槃と爲つて、初めて眞理に悟入することが能きのるであります。此煩惱卽菩提、生死卽涅槃と爲るのであります。此境界に立ち至つた時、一塵擧るのも、一花開くのも、さては咳拂ひも、唾吐くも、皆祖師西來意なることを知るのであります。『儻しや未だ然らずんば下文を看取せよ』其境界に至らざる者は此俱胝一指頭の働きを看よ。

擧、俱胝和尙、凡有二所問一只竪二一指一。

（訓讀）擧す俱胝和尙、凡そ所問あれば、只一指を竪つ。

（講說）俱胝和尚の傳は『傳燈』十一卷に出て居ますが、一指頭に就いては、評唱にも出て居ます。俱胝和尚は務州金華の人で、初め住庵の時、實際と名づくる尼僧が來ました。ズツと和尚の庵室に來つて、笠も脫がず、錫杖を持つたまゝ、和尚の禪牀を三度び遶つて曰く、

『道ひ得ば笠を下さん。』

と三度び問ひかけました。何んぞ其態度の傲慢なる。佛敎には比丘と比丘尼とは、互に異る戒法を有つて居て、其間には又禮儀作法があるのにも拘らず、此實際尼の仕振りが、如何にも傲慢無禮、傍若無人の態度でありました。然るに俱胝和尚此時、一言對へることが能きなかつた。嗚呼坊主は寺を有つべきものでない。寺を有つて住持となれば、寺務に驅逐され、讀經葬祭を事とせねばならぬ。殊に現今の有樣が然うであります。亡者の葬祭讀經も大切であるが、葬祭讀經以上に大切なる活きた人に向つて、布敎傳道と云ふことが能きない。甚だしきは坊主自身も、學林でも卒業して、一箇寺を有てばそれでよいと滿足して居るものもあります。然し斯う云ふ坊主ばかりでなくとも、寺持と爲ると、却つて僧侶の本分を盡されない。之れから後々の世の中では、住持と云ふことも大いに攻究すべき問題であらうと思ふ。圖らず話が横徑に走つたが、今俱胝和尚の住庵に就いて、平素の所感を漏らしたに過ぎぬ。之れは別に一說として演べることが能きる。俱胝和尚も住庵して、寺務の爲めに、却つて日々奔走して居つたと見えて、今一尼の爲めに個事を問はれても、其答へに窮すると云ふ意氣地なき

始末。實際尼は俱胝の窮狀を見て、便ち去らうとした、其時和尚は尼を呼び止め、

『待たしやれ、日も西山に沒したれば、一宿して明朝行かしやれ。』

と馬鹿親切に言葉を掛けました。此時尼前の如く、

『道ひ得ば卽ち宿せん。』

と顧みていひました。然し俱胝は玆でも亦答へることが能きませぬ。其處で衣架飯囊の鈍根坊主めと言はぬばかりの態度を示して、尼はサツサと出て行つて了ひました。尼の去つた後、俱胝慨然として嘆じて曰く、

『我れ大丈夫の形を有するも、丈夫の氣なくして、一尼僧に及ばず、慚愧々々。』

と大いに發奮し、此事を明めたいと思ひ、其庵室を棄て、脚袴甲掛で行脚に出かけやうと決心しました。然るに其夜俱胝は夢想を感得した。汗は此庵を棄てゝ去るに及ばぬ、近日中に肉身の菩薩あつて來り、和尚の爲めに說法して呉れるであらうと云ふのでありました。果して翌日、大梅の法嗣なる天龍和尚が來られました。俱胝乃ち之れこそ肉身の菩薩であらうと思惟し、禮を厚うして迎へ入れました。そして天龍和尚に向つて、昨日實際尼と云ふ者が來つて、斯く々々のことを仕て、斯く々々のことを言つたが、私には答へられませんでしたと、一伍始終を物語りました。それで改めて問うた、すると天龍和尚は、默つて一指を堅てた。俱胝和尚は天龍和尚の一指を竪立したのを見て、忽然として

大悟しました。是れも平素よりの修行があつたからで、唯一朝一夕、偶然の悟りでありませぬ。斯う云ふ邊から振り返へつて見れば、前の實際尼は俱胝の爲めには全く大善知識であつたのであります。是れより後『俱胝和尚は、凡そ所問有れば、只一指を竪つ』本則には此處の所を一行出して有るきりであるが、俱胝和尚の一指を竪つるのも、調べて見れば大因緣があるのであります。何か問はれると必ず一指を竪起して示されたと云ふ。此一指頭の禪に就いて、古人も色々と拈弄して居ます。それも評唱に出て居るから見るが宜い。處が俱胝の庵中に一の小僧が居つた。小僧常々和尚の一指を竪起するのを見て居つて、猿の人眞似の如く、矢張一指を立てる。人が『俱胝和尚近日何を爲て居る』と尋ねると、スーと一指を立てる。和尚に一つ法事を賴みたいと云つても、小僧はコレだと一指を立てます。和尚風邪でも引て寢てをられぬか、と問ふても小僧は例に依つてこれだと一指を立てゝ始末に行かぬ。此事が和尚の耳に入ると、和尚大いに怒つて、小僧を呼び付け、

『貴樣近來私の眞似をするさうぢやが、何んと思つてそんな眞似をするぞ。』

と叱り付けると、小僧相も變らず、指一本ズイと立てた。和尚憤然として其指を小刀を以て切り落した。小僧堪らず、アイタ、と叫喚しつゝ逃げ出したから、和尚威を振つて小僧？　と呼び留めた。小僧首を回らす時、和尚却つて指頭を竪起して示しました。此時小僧初めて、豁然として、和尚の一指を領解したと云ふ。小僧とは言ひながら、能く之れから這入つたものだ、是等も悟りに入るの門と爲

ります。人眞似が本物に爲ることは、世間往々あることで、彼の吃りの口眞似をすると、吃りに爲ると云ふことがあるが、今此小僧、和尚の眞似をして、一指頭より禪に入つたのであります。斯くばかり俱胝和尚は其指を遣ひ、能く一本の指を以て、萬事に當つて居ました。然るに其遷化する時に、大衆を呼び寄せて曰く、

『吾れ天龍一指頭の禪を得て、平生用ひ用ひて、未だ用ひ盡さず、會せんと要すや』

と言ふて指頭を竪起して圓寂されたといふことであります。

對揚深愛老俱胝、宇宙空來更有誰、曾向滄溟下浮木、夜濤相共接盲龜。

（訓讀）對揚深く愛す老俱胝、宇宙空じ來るに更に誰れか有る、曾つて滄溟に向つて浮木を下す、夜濤相共に盲龜に接す。

（講說）俱胝和尚の一則は、『碧巖錄』でも有名な則であります。それを雪竇頌し來つて『對揚深く愛す老俱胝』と云ふ。老の字は敬語で、老師など丶同じで。先年夏目漱石と云ふ人が鎌倉へ來て、私に會つて歸つてから、鎌倉の宗演は老師々々と人が言ふけれど、まだ〳〵頭の青い坊樣だと、何かに書いたことがあるが、老師の老は、長老の老と同じく敬語であつて、老耄の意で用ひて居る所は、禪宗では尠いのであります。然し今では衲も五十の坂を越したから、老耄の老に近か寄つて來たかも知

れぬ。今俱胝和尚が何に對しても、必ず一指頭を起つて示された。何が起つても、一本の指で一切の者に指した。『宇宙空じ來るに、更に誰か有る』三世十方を搜し廻はつても、此指使ひは俱胝の外にあるか。只僅に指一本で宗旨を擧揚する者は更にない、實に天下一品であります。俱胝以前に俱胝なく俱胝以後に俱胝なしとでも言ふか、鐘や太鼓で尋ね廻はつたとて其外に見付かりはしない。『曾て滄溟に向つて浮木を下す、夜濤相共に盲龜に接す』盲龜採木の譬喩は『阿含經』に出て居ます、盲目の龜と云へば、實に仕方の無い動物で、岩に取り付くことも能きぬ。然るに滄海渺茫たる中に、一片の浮木が漂ふつて居る。如何に一片の浮木が漂流して居ればとて、盲龜は其浮木の傍に在るをも知らぬ。それを如何なる因緣に因るか、此浮木に取り付くことが能きて、而かもその浮木中の穴に頭を入れ、終に命が助かると云ふことがあります。然し斯う云ふことは、百年に一度か千年に一度あることで、實に希有であります。今凡夫生死海中に漂流して居ても、勝因に遭遇して、救濟され生死を脫出することは、盲龜浮木の如く、或は又優曇華の如く、希有の事であります。況んや自ら眞理に悟入して、生死大海を脫却することをや。但だ夫れ俱胝和尚の如きは、千中無一と言はるゝことを敢てして、確と浮木に取り付き、其生死海を脫せし一人であると、稱揚したのであります。

第二十則　龍牙西來無意

垂示云、堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機、一場苦屈。或有箇漢出來、掀翻大海、踢倒須彌、喝散白雲、打破虛空、直下向一機一境、坐斷天下人舌頭、無爾近傍處。且道從上來、是什麼人、曾恁麼、試擧看。

（訓讀）垂示に云く、堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機せば、一場の苦屈、或は箇の漢有りて出で來つて、大海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虛空を打破するも、直下に一機一境に向つて天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん。且く道へ從上來、是れ什麼人か、曾て恁麼なる、試に擧す看よ。

（講說）本則龍牙西來無意の一則は、此『碧巖錄』中に於ても、有名なるものであります。『堆山積嶽、撞墻磕壁』山に堆く嶽に積みなしてある、山にあたれば、墻にも一杯、壁に磕りと當れば、壁にも一杯、見渡す限り、此事ならざるものなしだ。眼

に一杯、耳に一杯、鼻に一杯、口に一杯、總て此物ならざるはなし。此物とは何んぞや天地宇宙に充塞して居るものは果して何んぞや。人々黑眼を以て見よ。『停思停機せば一場の苦屈』斯くの如く學者の前にズラリ開展されてあるにも拘らず、若し學者が之れに向つて躊躇し、グズ〳〵でも爲やうものなら、それこそ一場の苦屈で、それこそ苦悶の、淵に沈まねばなりませぬ。『或は箇の漢有り出で來つて、大海を掀翻し、須彌を踢倒し白雲を喝散し、虛空を打破するも』然し學者の中に本則の龍牙の如き者があつて出で來るもと云ふので、卽ち出格怜悧の利かん氣の者が出て來て、學海の波瀾を掀翻し、孤危險峻、山の如き禪定を蹴飛ばし、或は無念無想を喝散し、有念有想を喝散し、眞空無相の道場を打破するも『直下に一機一境に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、儞が近傍の處無けん』智解に渡らず、直接に一機一境に向つて、自由自在に處理する所の、翠微或は臨濟の如き師家あつて、天下の人の舌根を引き拔き、ウンともスンとも言はせぬ働きを示したならば、如何に龍牙の如き學者も、傍へも寄り付かれまい。『且く道へ從上來是れ什麼人か曾て恁麼なる』然らば古來の祖師方の中にて、誰れ人が斯くの如き人であるか、『試に擧す看よ』

擧、龍牙問二翠微一、如何是祖師西來意。微云、與レ我過二禪板一來。牙過二禪板一、與二翠微一。微接得、便打。牙云、打卽任レ打、要且無二祖師西來意一。牙又問二臨濟一、如何是

祖師西來意。濟云、與レ我過二蒲團一來。牙取二蒲團一過二與臨濟一。濟接得、便打。牙云、打卽任レ打、要且無二祖師西來意一。

（訓讀）擧す、龍牙翠微に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。微云く我が與めに禪板を過し來れ。牙禪板を過して翠微に與ふ。微接得して便ち打つ。牙云く、打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。牙又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。濟云く我が與めに蒲團を過し來れ。牙蒲團を取りて臨濟に過與す。濟接得して便ち打つ。牙云く、打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。

（講說）本則に出づる所の龍牙禪師は、湖南の龍牙山に居られた居遁禪師のことで、法を洞山の悟本禪師に嗣がれました。又翠微と云ふは、京兆終南山の無學禪師のことで、青、原下三世、丹霞天然禪師の法嗣であります。『龍牙師微に問ふ、如何なるか祖師西來意』翠微は龍牙に對すれば、餘程の先輩でありました。龍牙は祖師西來意に就いては、自ら研鑽する所あつて、多少の自得する所もありました。爰に於てか此祖師西來意の一問題を擔いて、處々の師家を驗問するのであります。元來此祖師西來意とは、達磨が西天印度より、遙々支那まで來た意と云ふので、畢竟禪宗の生粹と云ふこと。禪宗の極意でも可い。さて此公案は、古來研究された公案で、古人の答案も亦却々多いのであります。

今龍牙は自ら多少の得る所あるより、一つ此問題を以て、翠微和尚を試驗して遣らうと考へ、此問題を提起したのであります。『微云く我が興めに禪板を過し來れ』翠微は龍牙が得意の問題を有ち來つた位なことは見拔いて居るから、一と口も祖師西來意などを口にして答へませぬ。そして其禪板を持ち來れと、祖意を我が物顏にして龍牙を遣つて居る所、既に二目も三目も上であります。『牙禪板を過して翠微に與ふ』龍も望まれるまゝに禪板を取つて、ハイと渡しました。禪板と云ふのは、坐禪をして居る時に疲れを慰する爲めに、一寸倚りかゝる所の板であります。『微接得して便ち打つ』翠微は其禪板を受け取つて置いて、却つて其禪板を以て彼れを打ちました。『牙云く打つことは打つに任かす、要且つ祖師來意無し』龍牙は打たれて置いて、打つことは打つに任す、打つなら勝手に打つがよい。然し幾ら打つても、祖師西來の意は無いと力み出したのであります。龍牙には實力は確にあるけれど、一方向きであつて、七通八達とは言へませぬ。祖師西來意に就いては、大いに研鑽して居るとは言ふものゝ、未だ祖師西來意を十分に使ひ廻はす所の、自由自在の力はない。只此祖師西來無意の一本槍を得て居るばかりでありまする。爰に於てか龍牙は此一本槍を擔いて、又臨濟禪師の許に到るのであります。『牙又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意』龍牙當時自負の心あつて、翠微を一本槍で突き止めてやつたから、此上は天下に名ある臨濟禪師を試みて呉れやうと思つて、臨濟の許に到り、相變らず祖師西來意を以て尋ねたのであります。『濟云く我が興めに蒲團を過し來れ』君子は千里同風と

云ふが、實に面白いことでないか。前に翠微は禪枚を持つて來いと命じて、當面の問ひに答へなかつたやうに、今又臨濟禪師は其蒲團を持ち來れと命じたのであります。之れは翠微と臨濟とは、相談をして置いて行つた所の芝居では無いけれど、千里同風、いづこも同じ秋の夕ぐれで、眞實大悟して居る者に爲ると、恁くピタリと能く吻合することがあるものであります。『牙蒲團を取つて臨濟に過與す』龍牙も亦其命令通りに、蒲團を取つて臨濟禪師に渡しました。龍牙が爰で一喝でも吐くかと思ふたら、オメ〳〵蒲團を渡して了つたのであります。此蒲團と云ふのは、禪板と同じく、坐禪するには無くてならぬ道具であります。『濟接得して便ち打つ』臨濟も亦打つた、龍牙も亦打たれて居る。そして龍牙は尙ほ同轍に出て、『牙云く打つことは便ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し』然し龍牙は打たれる位なことは勿論承知であらうが、思ふ壺へ嵌つて來たものであるから、不貞腐つた顏をして、打つなら勝手に打たしやれ、幾ら打つたとて祖師西來無意だと、例の一本槍を正面から突き付けました。其勢ひと云ふものは、上に佛なく下に衆生なく、天上天下唯我獨尊と云ふ有樣であります。爰に於てか古人も大いに之れを拈弄して居ます。圜悟は一々之れを評に載せて、批評を試みて居ますが、潙山の喆禪師は、翠微、臨濟は本分の宗師として仰ぐべきだ。何れも龍牙を接得して、宗風を擧げた所は、眞實後人未得の者には、龜鑑とするに足るのである。白隱禪師なども、之れを拈弄して、龍牙が佛祖の腸胃まで見徹したと云ふけれど、若し翠微、臨濟の二尊宿の慈悲を蒙らずば、死に至るまで

其根底を拔くことが能きなかつたであらう。龍牙其當時の見識は、一見識ではあるが、上に佛を見ざれば、亦下にも衆生を認めない、況んや衆生濟度など以ての外のことであると。今諸子も亦此則に於て、龍牙の意中に參じ、又二尊宿に參ずることを要するのである。雪竇も亦例に依り之れを拈出して、諸人に示して云く、

龍牙山裏龍無眼、死水何曾振古風。禪板蒲團不能用、只應分付與盧公

（訓讀）龍牙山裏龍に眼無し、死水何んぞ曾つて古風を振はん。禪板蒲團用ふること能はず、只だ應に分付して盧公に與ふべし。

（講說）本則に對しては、雪竇は二首を頌出して居ますが、古來大いに評判のある頌であります。先づ此前頌中に出づる所の盧公とは、雪竇自身のことを指すので別號であります。卽ち彼の詩に、

『圖畫當年愛洞庭、波心七十二峰青、而今高臥思前事、添得盧公倚石屏。』

と云ふ、洞庭湖の景色を歌つたのがあります。『龍牙山裏龍に眼無し』古來此頌は、龍牙を梵天の頂上迄托上したものと解するより、色々の誤解を生ずるのであります。白隱禪師も、之れは雪竇の正眼で、龍牙の悟底を見透しての頌であると言つて居られます。如何にも龍牙其當時は、祖師西來には苦心慘

憺たる所はあるけれど、未だ之れに依つて大自在を得たとは謂ひ難い。之れを能く見拔いて頌出したのは、此前頌であります。龍牙山には大龍の居ると云ふ噂であるが、其大龍にも大事な眼目を缺いて居る。大龍と雖も、已に眼目を缺けば盲龍であります。盲龍何をか仕出かさんとは、雪竇の肚であります。『死水何んぞ曾つて古風を振はん』死水と云つて、溜水の中位な所には、何うして大龍が居らうぞ。龍牙力ありと云ふも、死水の中に居るのでは知れたもの、何うして〳〵少林曹溪の古風を振起することが能きやう。看よ彼の翠微、臨濟二尊宿に參じた時の態をと云ふ意で、『禪板蒲團用ふること能はず』と轉句を置いた。翠微に打てと言はんばかりに、禪板を持ち來れと言はれながら、翠微を打たずに其儘渡して了つたでないか。翠微が呆れてビシヤリ打つたのに、祖師西來無意と云ふ。祖師西來意など尋ねるまでもなく、山に川に、草に木に、眼に觸れ耳に聞ゆる所に充ちて居るのに、之れを見る眼がないから、龍牙も愈々盲龍たるを免れずである。臨濟に參じても其通り、未だ蒲團を使ふことすら能きないで、例の祖師西來無意の一本槍ばかりを振り廻はして居る。『只分付して盧公に與ふべし』龍牙も夫れ位の事は能きぬ男ではなかつたが、一枚悟りであつた爲めに、禪板も蒲團も、能う使はずに了つた惜しいことぢや。若し之れを此雪竇老人に渡したなら、禪板を以て、ビシヤリ翠微に見舞つて呉れたであらう。雪竇復拈出して云く、

這老漢也未レ得二勦絶一、復成二一頌。盧公付了亦何憑。坐倚休二將繼一祖燈。堪レ對暮雲歸未レ合、遠山無レ限碧層層。

（訓讀）這の老漢也た未だ勦絶することを得ず、復一頌を成す。盧公に付し了るも亦何んぞ憑らん坐倚將て祖燈を繼ぐを休む。對するに堪へたり、暮雲の歸つて未だ合せざるに、遠山限りなく碧層層。

（講說）此後頌になると、前頌と趣きが全く違つて、其舞臺の場から背景まで一變して了ふ。殊に轉結の二句は無限の味を含んでゐます。之れを單なる詩として見ても、價値あるものであるけれども、其世俗の詩と異りて、宗旨を詠み込んであるから、更に有り難い。白隱禪師拈じて、

『後頌極めて黃絹幼婦、百則中最妙最玄、最第一なり。是の故に明眼の衲僧、天下の老和尙、總て是れ見れども見ず、覷へども破らず。老僧（白隱禪師自身のこと）亦誤つて看過し來ること大凡三十年、今老い去つて前事を憶ふに、慚汗腋に滴り、感涙襟に滿つ』

と述懷して居られます。即ち白隱禪師すら此頌を看誤つて居つたことが三十年と云ふのであるから、學者宜しく注意して看ねばならぬ。そして正見に住して之れを看れば、此頌は實に碧巖百則の頌中、最妙最玄最第一なりと讃歎し、意趣最も宗妙の處を得たる、古今獨歩の作なりと感歎しと居られるのであります。『這の老漢也た未だ勦絶することを得ず、復一頌を成す』此語は記者の話で、老漢は雪竇を指す。勦絶は古い所ではサツパリと云ふ意味であります。雪竇も前頌を以て拈出したが、尙ほ未だサツパリと盡さぬ所があるので、重ねて、復一頌を作つたのであります。『盧公に付し了るも亦何んぞ憑まん』されば云つて、其禪板や蒲團を、此老僧に渡されたとて、何うしやうぞえ。そんな物は入用では御座らぬ、さら〳〵憑みにはしませぬぞ。『坐倚將て祖燈を繼ぐことを休む』坐倚は勿論禪板と蒲團にかけて云ふ。そんな物を用ひて、禪燈を繼がうなどゝは、毛頭思はぬ。イヤ〳〵入用で御座らぬと、前頌で奪はんとした物を、後頌では却つて斷つて居ます。此雪竇の境界は、果して死水か活水か、是等も室內の調べごとになつて居ます。『對するに堪へたり、暮雲の歸つて未だ合せざるに遠山限りなき碧層層』此二句は實によい景色であります。對するに堪へたり碧層々々までかけて見るべし。暮雲がフハリ〳〵と出て來たが、未だ其位置も定まらず、フワ〳〵として居るが、遠山が限り無く續き、山又山と層り合つて居る山々は又碧々として居て、何とも言へない暮色である。詩の文字上より云ふも、其全幅の趣味を解くことが能きぬ。況して宗旨の存在する所を、駄辯を以て言ひ釋くことは能きぬ、宜しく諷誦すべし。對するに堪へたり、暮雲の歸つて未だ合せざるに、遠山限り無く碧層々何うも佳い景色ぢやが、之れを現成と見ると違ふ。眞に歸家穩坐の境界を得て、箇中の消息を知らば、室內に至つて之れを呈せよ、敢て匆々たることなかれ。

第二十一則　智門蓮花荷葉

垂示云、建二法幢一立二宗旨一錦上鋪レ花。脫二籠頭一卸二角馱一、太平時節。或若辨二得格外句一、擧一明三一。其或未レ然依レ舊伏聽二處分一。

（訓讀）垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立す、錦上に花を鋪く。籠頭を脫し、角馱を卸す、太平の時節、或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三。其れ或は未だ然らずんば、舊きに依つて伏して處分を聽け。

（講說）本則は『智門連花荷葉』の一則で、智門禪師、諱は光祚といひ、香林の澄遠禪師の法嗣であります。香林の師匠は雲門文偃禪師で雲門宗の祖であるから、智門は正に雲門の法孫に當り、智門の弟子には、此『碧巖錄』の頌を作つた雪竇重顯禪師を出して居ます。そして此雲門宗は、其家風を異にして居て、却々普通の眼を以て觀ることの能きぬ所があります。本則なども雲門宗の生粹を顯はして居るので、餘程修行を積んだ者でなくば、窺ひ難いのであります。『法幢を建て、宗旨を立す、錦

上に花を鋪く』法幢は寺の門前に建てる幢幡のことで、卽ち大衆の師表と爲つて、大法を說くといふ印の旗であります。釋迦如來が、靈山會上に於て、金波羅華を拈じて、衆に對せられたと云ふ一事も、精神的に法幢を建てられたのであると云ひ得る。其他西天の四七各祖を初めとし、唐土二三の祖師方より今日まで、列祖は皆法幢を建てゝ居ます。宗旨は佛祖正傳の法で、一代五千餘卷の經文を讀破しても、一千七百則の公案を覺えても、一隻眼を以て宗旨を立てねば、未だ人の師たる資格はありませぬ。法幢を建て宗旨を立してこそ、眞實錦上花を鋪くと褒むべく、麗はしいもので『見渡せば、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり』であります。故に宗旨を立することは大切で、畫道に於ても、人物畫を書いて、最後に點眼する時に其繪は活き、點眼を缺けば、其繪も全く死物と爲つて了ひます。此處が卽ち一隻眼を着する所で、單に學解のみでは、宗旨は立てられませぬ。縱令鹿の鳴く山奧に在るも、雨の漏る茅屋に居るも、若し此一隻眼を以て宗旨を立すれば、正に是れ老僧と日々相見、と大燈國師も言はれた。さればこそ法幢を建て、宗旨を立するのは、錦上に花を鋪くが如きものであります。『籠頭を脫し、角馱を卸す、太平の時節』籠頭角馱は前にも出たが、馬の鼻面に被ぶせて、馬を束縛する籠を籠頭と云ひ、馬の背に負はせて、束縛する物を角馱といふ。縱令法幢を建て、宗旨を立すると云ふも、未だ籠頭が附いて居たり、角馱を負うて居たりする間は、眞の師家となるに足らぬ。悟つたと云つても悟りの後に悟りの痕があるやうでは馱目である。調べたと云つても、調べた後に調べ

の癖が貼つて居るやうでは、籠頭も脱れねば、角馱も卸りぬのであります。學解、知解、見解、悟解など皆無明の皮で、斯んな擔ぎ物のある間は、籠頭を脱したものでもなく、角馱を卸したものでもない。若し眞實一切を超絶し、沒蹤跡の處に身を隱せば、籠頭もなく、角馱もなく、眞に太平無事の時であります。此太平無事の時は、之れ歸家穩坐の眞境であります。『或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三』格外は格式以外で、法幢だの宗旨だのと條目を立てぬ。煩惱だの菩提だのと差別を付けぬ。迷悟染淨生死涅槃を超絶したる上根上機の者に至つては、擧一明三で、一隅を擧げて三隅を明らめ、一を聞いて十を知る。斯る利根の者があるならば、別に面倒なことも要らぬけれど『其れ或は未だ然らずんば、舊きに依つて伏して處分を聽け』其格外の句を辨得能きぬ者なら、玆に古人の公案があるから、之れに依つて其消息を聽けと、圜悟禪師は親切なる垂示をして『智門蓮花荷葉』の一則を拈出したのであります。

擧、僧問二智門一、蓮花未レ出レ水時如何。門云、蓮花。僧云、出レ水後如何。門云、荷葉。

（訓讀）擧す僧智門に問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何。門云く、蓮花。僧云く、水を出でて後

如何。門云く、荷葉。

（講說）五家七宗と分れた禪宗の上では、雲門宗の特色は、最も見極め難い所にあります。雲門の家風は舊參の上士でなくば分らぬ。本則なども實に雲門の生粹で、容易には解からぬ。其解からぬ所は、室內に入つて實究するがよい。『擧す僧智門に問ふ』一僧出で來て智門光祚禪師に問ひを呈したが、此問ひは勿論驗主問で、智門を試驗しやうとしてゐる問ひであります。然し驗問する僧、果して智門の答話を聞き、智門の意中を會得したであらうか、开は疑問であるが、其邊も調べて見るがよい。『蓮花未だ水を出でざる時如何』問ひも却々意地の惡い問であります。學校などで斯んな意地惡い問題を出したら、學生は忽ち落第して了ふ。蓮華がまだ水から出ない前は何うであつたと云ふ問であります。若し之れを植物學者に問ふたなら、何んと答へるであらう、恐らく植物學博士でも屁古垂れて了ふであらう、然し之れも敢て蓮花に限らないので牡丹でも菊でもよい。或は生れぬ先きの自分の顏はと問ふてもよい。或は又天地未だ開けざる先きの天地は如何と代へても可い。世界立ち初まらぬ先きの世界はどんなであつたと代へてもよい。何れの國でも、天地世界の創造說を有つて居て、此世界の初めは、火雲のやうなもので、非常な熱度が有つたけれど、未だ固結しなかつたとか、或は天地の初めは、鷄卵のやうなもので、混沌として居たとか說明を附けて居るが、今の問ひに對しては、斯る說明を持つて行つても、間に合はぬ、お尋ね申す、蓮花未だ水を出でざる時如何『智門云く蓮花』智門は此問

ひに對して洵に無造作に、蓮花と答へて了ひました。之れが卽ち雲門宗の解らぬ所であります。普通で云ふなら、蓮根より芽を出し、卷葉と爲り、卷葉開いて次に蕾を生じ、蕾開いて蓮花となるの順序であるから、蓮花未だ水を出でざる時は、荷葉とでも云ふべきが普通であるけれど、今は格外に逸して、爰に蓮花と答へられた。驗問しつゝある此僧も、流石にキョロツとしたであらうと思はれる。圜悟は、我れに蓮花未だ水を出でざる時如何と問ふ者あれば、我れは斯くこそ答ふるであらう、卽ち露柱燈籠と、大黑柱に燈籠掛け、柱は竪に敷居は横に。之れで智門の蓮花と同か別かと言つて居る。之れは圜悟の力で言つたのであるが、卽今大衆諸子は諸子の力で一句を着けて見よ、果して何と言はうとするか。銘々他家の寶を數へるのではない、自己の寶を調べるのであります。宜しく智門に次いで一句を呈せ。『僧云く、水を出でゝ後如何、云く荷葉』然らば蓮花が蓮花が既に水を出た後は何うであらう。此世界が出來上つた後は何うであらう。隣座敷から出て來る前は可いとして出て來た後のことは何うであらうと、飜轉して問ふたのであります。此問ひに對して、智門は又無造作に『荷葉』と答へた。荷は蓮のことで、荷花と云へば蓮花になり、荷葉と云へば蓮の葉に爲ります。問ひも問ひなれば、答へも答へで、兩度共に反對のことを言つて居る。故に世間的俗眼を以て見ては到底解らぬ。解らぬと云ふのみが正しくて、解かつたと云ふのが欺りでありませう。又當時氣早やの連中が見たらば之れは活字の誤植であらう。さもなくば書物を書く時、記者が間違つて、文字を反對に置いたのであ

らうなどと謂ふであらう。宗旨眼の無き者より見ば然うであらう。然し之れはそんな淺薄なるものではなくて深旨あることで古人は調べ事として居る。圜悟は又蓮花水を出で來る時如何と、我れに問はゞ、我れは杖頭日月を挑げ、脚下太だ泥深しと答ふるであらう、是れで可いか惡いかと言つてゐる。之れ亦圜悟の力であるが、若し今諸子ならば、何と答へる積りか、答へて見るがよい。然し智門禪師は荷葉と答へた、其智門となつた考へて見ることも必要である。斯う云ふ所まで、提唱では辯ぜられぬ。縱令辯じ得るとしても、夫れでは諸子の皮肉を肥さぬ。依つて諸君は篤と考へ、靜慮した後に來つて所得底を披陳せよ。白隱は未出ㇾ水に答へてトーフ〳〵出水後に答へてコンニヤク〳〵と嗚呼。

蓮花荷葉報ㇾ君知、出水何如未出時、江北江南問二王老一、一狐疑了一狐疑。

（訓讀）　蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水何如未出の時、江北江南王老に問へ、一狐疑ひ了りて一狐疑はん。

（講說）　凡て詩や偈は、辯を付けても味が出ませぬ、却つて反覆諷誦する方が宜しい。然し文字の上だけは一應辯解せねば、諷誦しても眞味が得られまいと思ふ、之れもまた老婆心切かも知れぬ。『蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水何如未出の時』本則を睨んで居て雪竇の頌である。蓮花と云ふべき

所へ荷葉と云ひ、荷葉と云ふべき所へ却つて蓮花と言はれた御手並は、洵にド豪いもので御座ると讃嘆の辭を盡して居る。出水は未出の時にあるが、水を出たが先きか、出ないが先きかなどゝ前後を爭ひ、或は其前後の一異同別を論ずるも、ソンナ事では及びも付かない。水を出た時の消息と水を出ない時の消息と、果して何うであらうか、水を出た時が、水を出ぬ時で、水を出ぬ時が水を出た時である。斯う云ふ所は、駄辯を付ければ付ける程遠ざかつて了ふ。然し雪竇は智門の法嗣であるだけ、師匠の腹の中は見拔いたものぢや。『江北南王老に問へ、一狐疑ひ了つて一狐疑はん』王老と云ふのは、支那では張氏、王氏、李氏、趙氏と云つて、此四姓が、掃いて捨てる程多い姓である。其多い邊で、王老と王氏の年寄を呼び出したが、今は善知識と云ふ程の意味で用ひたのである。江北江南で支那全國、善知識といふ善知識、尊宿と云ふ尊宿を訪ね廻つて、此蓮花荷葉の公案を問ひ質せ、出水未出が分らねば、廻國行脚で尋ねて見よ、夫れでも大抵分るまい。狐と云ふ奴は、頗る疑ひの深いもので、信州諏訪湖でも、冬季狐が湖上の氷を渡れば、其後は人間も渡られる、其狐が諏訪明神の使ひであるといふ口碑もあるが、狐は疑ひ深い畜生であるから、一尺行つては氷の厚さを計り、耳を付けて水音を聞き、愈々安然であると確信すれば、また一尺行つて試めすと云ふ。廻國行脚に出かけても、丁度狐の氷を計るが如く、一方の師家に就いて一疑を質せば、又他の疑念生じ、他の師家に就いて他疑を質せば、更に又疑念續出すと云ふやうに、江北江南と經巡りても、蓮花荷葉、出水未出は分るまい。

江北江南王老に問へ、一狐疑ひ了つて一狐疑はん。

第二十二則　雪峰鼈鼻蛇

垂示云、大方無外、細若隣虛。擒縱非他、卷舒在我。必欲解粘去縛、直須削迹呑聲。人人坐斷要津、箇箇壁立千仞。且道是什麼人境界、試擧看。

（訓讀）垂示に云く、大方外無く、細きこと隣虛の若し。擒縱他に非ず、卷舒我に在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須く迹を削り、聲を呑むべし。人々要津を坐斷し、箇々壁立千仞ならん。且く道へ是れ什麼人の境界ぞ、試に擧す看よ。

（講說）『大方外無く、細きこと隣虛の若し』或る人は、其最初の一句を、大に包む方外をと改めた方がよいと言ふけれど、敢て改めるにも及ばぬ。之れは大道の本體に就いて述べたので、方圓長短大小輕重と云ふやうな、相對的のものでない。實に絕對的である。此立場から言ふ時は、其大なること無限大であつて、其小なること無限小である。其大なる方面より言へば、宇宙の外に及び、其小なる方面より言へば、隣虛よりも細かなるものである。隣虛とは『俱舍論』などに說いてあつて、極微と

同しいもので、物質を最も細かく割り碎いたのが極微で、之れを更に割れば虛空と等しく、無に歸して了ふと云ふ、極端に細かくなつた所が隣虛であります。卽ち虛空に隣りして居るといふ意味。無限大は無限小に一致すると云ふが、今もさうで、相對超絕の本體であつて、諸佛衆生もなければ、山河大地もない、平等の本體である。此境を得れば『擒縱他に非ず、卷舒我に在り』であります。之れは世の師家に就いて言ふので、眞實大道の本體を獲得したる、師家になると、擒と取り抑えやうと、縱と放ち赦るさうと、自由自在である。又卷と卷き縮めやうと、舒と展べ擴げやうと、之れも自由自在であります。全く其活作用は、傀儡師のやうで、佛出さうと、鬼を出さうと、活殺自在の力を有つのであります。然るに修行する學者や、凡夫に爲ると、我れと自ら我が身を束縛したり、擒り抑えられたりして、我が身すら自由に能きぬ。『必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須く迹を削り、聲を呑むべし』故に修行中の學者は、自己の粘縛より脫して、大道の本體の上に坐つて、自由自在七通八達の境を得ねばならぬ。其妄想の粘縛を解脫するには、迹を削り、聲を呑む必要がある。人が狗子佛性ありと云へば、其迹に付き廻はり、狗子無佛性と云へば、又其有無の無に付き廻はる。隻手の音聲と云へば、早や旣に其音響に取り付き、悟つたと云つても、其悟りに取り纏はれて居る。味噌の味噌臭きは眞の味噌にあらず、悟りの悟り臭きは眞證にあらずぢや。故に斯る悟りの迹形を削り捨て、古人の公案古則の聲に雷同せず、斯る古人の聲など呑み盡して了ふべきぢや。『人々要津を坐斷し箇々壁立

千仞ならん』若し眞實迹を削り聲を呑むことを得たものは、大悟の境に渡る渡場を尻の下に踏み潰して了ふ人ぢや。何事にも要點はあるもので、例へば一冊の書物を讀むにも、讀書眼を以て、其要所を讀まねばならぬ。白隱禪師は看經の眼を開けと言はれる。佛敎にても、生死海を渡りて、涅槃の岸に到るべき要津があるが、其要津をも踏み潰すとは、實に超絶的本體の境を手に入れた者の上のことである。故に斯る達者になれば壁立千仞、千丈も削り立つた岩のやうで、爪もかゝらぬ嶮峻なものである。『且く是れ什麼人の境界ぞ』斯くの如き嶮峻孤危の境に立ち至つた者があるか、澤山は無いが二三はあるぞ『試に擧す看よ』

擧、雪峰示レ衆云、南山有二一條鼈鼻蛇一、汝等諸人、切須二好看一。長慶云、今日堂中、大有レ人喪身失命。僧擧二似玄沙一。玄沙云、須二是稜兄始得一。雖二然如此、我即不恁麼。僧云、和尙作麼生、玄沙云、用二南山作二什麼一。雲門以二拄杖一擯向雪峰面前、作二怕勢一。

（訓讀）擧す、雪峰衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須く好看すべし。長慶云く、今日堂中、大に人有りて喪身失命す。僧玄沙に擧似す。玄沙云く須く是れ稜兄にして

始て得べし。然かも此の如くなりと雖我は即ち不恁麼。僧云く、和尙作麼生。玄沙云く、南山を用ひて什麼とか作さん。雲門拄杖を以て雪峰の面前に擯向して、怕るゝ勢を作す。

（講說）雪峰は雪峰山の義存禪師のことで、初め洞山良价禪師に參じ、後德山の宣鑑禪師の法嗣となり、其法嗣に雲門文偃禪師を出した。そして巖頭の全豁禪師とは、同學の友人でありました。或る時巖頭と共に欽山禪師を訪はうと思つて、鰲山と云ふ所まで來ると、雪に妨げられて、滯在したことがありました。此時巖頭は毎日寢てばかり居たが、雪峰は一心一向に坐禪をして、思索に耽つて居ました。其時巖頭は大喝一聲、

『噇眠し去れ』

喰ふて寢てゐろ。毎日坐禪してゐても、道祖神の人形と同じことだ。殊勝面してゐても、何んの役にも立たぬと罵りました。すると雪峰自ら胸を指して云ふ、

『私には觀らぬことがある。辯疏ではないが、默つてゐてくれ。』

と。其處で巖頭云く、

『汝は已後孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、大敎を播揚するであらう。』

と私が言ふてゐたに、未だそんなことを言ふてゐるのか。すると雪峰答ふ、

『實際解らぬことがある。』

巖頭云く、

『汝は實際然う言ふなら、汝の見所を言ふて見る。私が一つ批判して遣る。』

と。其處で雪峰云く、

『諸佛衆生本來異ることなし。迷ふ時は空を見て色と爲し、了する時は色を見て空と爲す。色空明暗終に差別なしといふことが、少し解りかけて來た。』

爰に於て巖頭評して云く、

『一世一代其樣なことを二度と言ふな。』

雪峰再ひ擧して云く、

『洞山過水の頌を見て、悟りの入口が少し解つて來た。』

巖頭重ねて評して云く、

『馱目ぢや馱目ぢや。』

雪峰又擧して云く、

『我れ德山に到りし時、從上宗乘中のこと、學人却つて分ありや否やと問ひ、德山和尙に一棒を喰つた時、桶底の脫するが如き感じを得たが、什麼であらう。』

巖頭尙ほ評して云く、

『汝は恁ういふことを聞かぬか、門より入るものは家珍に非らずと。』

雪峰云く。

『然らば什麼したら可いか。』

巖頭云く、

『他日若し大敎を播揚し、一々自己の胸襟より流出したものを持ち來りて、蓋天蓋地の珍寶を示せ。』

と。雪峰其言下に大悟し、便ち巖頭を禮拜し、連呼して云く、

『師兄々々、今日始めて鰲山成道、今日始めて鰲山成道。』

と。巖頭も友人の爲めに心を碎いたものであるが、雪峰も又其修行には骨を折つたものだ。此因緣は評唱に出てゐて、其他の因緣談もあるけれども、略して置くとして、恁く雪峰義存禪師が、血の涙で修行したゞけあつて、其門下よりは豪物も多い、先づ雲門大師のやうな人物をも出しました。又雪峰の言行としては、陰德を積むと云ふことに骨を折られました。尤も此陰德は、孔子敎でも、大いに奬勵する所であるが、佛法殊に禪宗に於ては、之れを一つの特徵とする程であります。然し今日では斯う云ふ麗はしい宗風の廢れつゝあるのは、歎はしいことであります。古人は、

『陰德は耳の鳴るが如し、幾ら側に居ても、人には聞こえない。』

と言つたが妙言であります。然し今日とて大いに叢林等に於ては奬勵する所であります。西洋でもプ

ライベート、モーラルと云つて居る德は、之れに類似して居るが、禪宗で云ふ陰德とは、人の厭ひ嫌ふことを歡んで行つて、自分の德を積むので、譬へば、便所を人の知らぬ間に掃除して置くとか、臺所の片付から、拭き掃除と云ふやうなことを人知れず進んで行ふのであります。雪峰も常に恁う云ふ方面の陰德を積む修行をして居られました。何處へ行くにも、杓子一本だけは離したことなく、何處へ行つても、臺所の事だけは受け持ちでされたといふ美談があります。禪宗的教育は恁うでなくてはならぬ。實に禪宗に於ては、ベチヤ〳〵饒舌らなくて、默に於て爲すのであります。默に居て義に勇む德を積ませるのが禪宗的教育であります。故に禪的教育は、當時の流行語を以てすれば、硬教育の方であります。昔の教育は此硬教育の方であつたが、近來は軟教育になりました。軟教育では大人物は出難いので、大人物は硬教育を受けた者の中より出る。近時全世界の人の注意を惹いた乃木將軍の逸話を見ても、少年時代に於て受けた教育は、實に此硬教育中の硬教育でありました。禪宗も硬教育を以て、弟子に接するので、父嚴なれば子孝ありと云ふやうに、師匠の大慈大悲で、弟子に警策を與ふるのであります。故に一般教育界が軟教育に爲つて居る今日では、殊に此乃木式教育、硬教育を必要と認めるのであります。今雪峰禪師の修行が、陰德を積むことに努力したと云ふことを述べるに就いて、聊か平素の所感を漏した次第であります。『擧す、雪峰衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇有り。』本則は雪峰の示衆で、實に此示衆の如きは自由なもので、凡人には測り難い所であります。凡そ

悟りと云へば、直ぐに佛や神を引合ひに出さねばならぬかと云ふに然うではありませぬ。今雪峰禪師は一條の蛇を引合ひに出されました。南山に一條の鼈鼻蛇あり、キヨロ〳〵して居ると喰ひ付かれるぞ。南山は支那南方の山で、鼈鼻蛇は鼈と云ふ龜の樣な頭をした毒蛇で、之れに喰ひ付かれたら命は無い。私の所に一匹の毒蛇が居るから、マゴ〳〵して居ると喰ひ付かれるぞ。『汝等諸人切に須く好看すべし。』汝等諸人篤と見て置け、用心しろよ。若し殺さうと云ふなら、生殺は不可ぬ、徹底的に殺せ。實に妙な示衆をしたものであります。大衆只默然として、師の顏を見守るばかりでありました。『長慶云く、今日堂中大いに人有り、喪身失命す。』處が大衆中に、後に長慶の慧稜禪師と言はれる坊樣が居た。此長慶は、雪峰門下中一方の旗頭で、目の利いた和尙であるから、其鼈鼻蛇を見付け出したと見える。

『居るぞ〳〵師匠の言はつしやる通り、大なる鼈鼻蛇が居るぞ、而かも現に堂中の大衆が、此毒蛇に喰ひ付かれた者が居るぞ。』

と言つて、師匠に答へました。恁く喪身失命した者は、果して誰れであらう。『僧玄沙に擧似す。』或る僧が、此雪峰の示衆と、其時長慶の言つたことゝを、玄沙の師備禪師に語つた者があります。尤も此玄沙は長慶と同じく雪峰の法嗣で、長慶とは法の上では兄弟であります。『玄沙云く、須らく是れ稜兄にして始めて得べし。』流石は長慶ぢや、慧稜法兄でなくば、恁うは言へまい、鼈鼻蛇も法兄にあつて

は、毒氣も吐けまい。『然かも此くの如しと雖も、我は卽ち不恁麼。』然し之れは長慶としては上出來であると、褒めるだけは褒めるが、我れ玄沙なら、そんな、ケチ臭いことは言はぬと、百尺竿頭一歩を進めた。『僧云く、和尙作麼生。』其僧折り返して問ふには、然らば和尙なら、其場合何と答へるか、一つ貴師の見處を聞きたいもので御座ると。『玄沙云く、南山を用ひて什麼とか作さん。』玄沙爰に於て云ふやうには、南山など用ひたとてどうならうか、東山西山、又北山、十方法界、鼈鼻の毒氣で充塞して居る、御用心御用心と言はう。『雲門拄杖を以て、雪峰の面前に擲向し、怕るゝ勢を作す。』雲門文偃禪師も雪峰門下であるが持つて居た拄杖を、雪峰の面前に突き出して、それ蛇が出たと叫び、怕るゝ樣子を示した。斯う云ふことを聞くと、世の人は直ぐ其形に付き纏つて、そんな眞似さえすれば可いかと思ふが、駄目の皮、須らく迹を削り、聲を呑まねば、眞乘は得られぬ。

象骨巖高人不レ到、到者須二是弄レ蛇手一。稜師備師不二奈何一、喪身失命有二多少一。韶陽知、重撥レ草、南北東西無レ處レ討。忽然突出拄杖頭、拋二對雪峰一大張レ口。大張レ口同二閃電一。剔二起眉毛一還不レ見。如今藏在二乳峰前一、來者一々看二方便一。師高聲喝云看二脚下一。

（訓讀）象骨巖高うして人到らず。到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。稜師備師奈何ともせず、喪身失命多少か有る。韶陽知つて、重ねて草を撥ふ、南北東西討ぬるに處なし。忽然として突出す拄杖頭、雪峰に拋對して、大に口を張る。大に口を張る閃電に同じ。眉毛を剔起すれば還つて見えず。如今藏めて乳峰の前に在り。來者一々方便を看よ。師高聲に喝して云く、脚下を看よ。

（講說）象骨巖高うして人到らず』象骨巖は雪峰山中にある巖の名で、之れは雪竇が、雪峰の示衆の餘りに高く、孤危嶮峻壁立千仞なることを讃嘆した一句で、雪峰の手元の窺ひ難きを言ふのであります。『到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし』若し此嶮峻なる象骨巖に向つて上り行く者あらば、汗は恐らく一流の蛇使であらう。故に鼈鼻蛇を弄する底の者は、長慶か玄沙將た雲門か三人位であつて、決して多くはあるまいと、三人を雪峰が暗々裡に賞めたのであります。『稜師備師奈何ともせず、喪身失命多少か有る』稜師は先きに言つた如く長慶のことで、慧稜禪師の略稱で、備師は玄沙のことで、師備禪師の略稱であります。長慶、玄沙は共に蛇を弄する者ではあるが、まだ〳〵自由自在に此の蛇を取扱ふことは能きませぬ。二人共に手に持て餘して居る。喪身失命した堂中の大衆が澤山あると長慶が言つたが、我が眼門を透して見れば、敢へてそればかりでない、其外却々澤山にあると、雪竇は長慶玄沙を抑挫して置いて、雲門の手並を擧揚せんとするのであります。『韶陽知つて、重ねて草を撥ふ

韶陽は雲門大師のことで、流石雲門は其鼈鼻蛇は何處に居るぞと、拄杖を振り廻はして、其草を撥つた。一段と勝れたものであります。普通の者は、南山に一條の鼈鼻蛇ありと言はれた切りで、既にキョロツとするが、雲門は拄杖を以て尋ねた。『南北東西討ぬるに處無し』衆生顚倒して已れに迷ふて物を逐ふの道理で、我れと我が身を粘縛し、迹を追ひ廻はす。白隱和尙が、隻手に何んの音聲かあると片手を出されると、早や其隻手に縛され、隻手の迹に附き纏つてゐるから、終に隻手の音聲も聞かれぬ。南山に一條の鼈鼻蛇ありと云はれると、早や鼈鼻蛇に附き廻はる。最早鼈鼻蛇を尋ね歩るく時分には、鼈鼻蛇は其影を隱くして了つて其處等にノロ〳〵して居るやうな鈍ではない。何れを尋ねたとて居らばこそ、鐘や太鼓で探しても居らぬ。『忽然として突出す拄杖頭』雲門は突然思ひ付いたやうに蛇がと言つて拄杖頭を投げ出した。見よ拄杖頭は大口開いて炎の舌を吐き、毒氣を吹いて居る。『雪峰に拋對して大に口を張る。』其雲門拄杖頭上の鼈鼻蛇は、今や雪峰老漢に對して、盛んに毒氣を吹きかけて居る。『大に口を張る閃電に同じ』其雪峰老漢を一と呑みと、血盆の口を張り開いて、毒氣を吐く鼈鼻蛇の變現出沒する早業は、閃電光の如く、擊石火の如きものである。之れ雪峰は飽くまで雲門の機鋒峻峻なる所を讃嘆して居るのであります。閃電光の如く蛇の出沒早い故に『眉毛を剔起すれば還つて見えず』眉毛をつり上げて、其蛇を見極めやうとしても、此時早く、其時晩して、蛇は何處に行つたことやら、影をも見せぬ。『如今藏めて乳峰の前に在り』乳峰は雪竇山中にある山の名で、畢竟

雪竇の手中を指す。雪竇は今まで與へて置いたが、急遽之れを奪ひ取つて、其鼈鼻蛇ならば、正に我が手中に藏在すと力み返へつたのであります。長慶、玄沙、雲門は、共に奪はれて了つた、初めに與へたのも、此奪ふ爲めに與へられた如き感じがする。凡そ與奪に就いては四句あつて、或る時は人境共に與へ、或る時は人を與へて境を奪ひ、或る時は人を奪つて境を與へ、又或る時は人境共に奪ふのであるが、今雪竇が、其蛇を探すなら、己れの處に居るぞと、人境共奪して了つた。故に白隱禪師は

『如今藏在乳峰前の一句重く、力强くて、南山に一條の鼈鼻蛇ありと云ふよりも、亦雲門の拄杖よりも遙に超絕したものぢや』

と讃嘆された『來者一々方便を看よ。』我が雪竇山に來る者は、注意して來たれ、之れを見屆けやうとするなら、手段が要るぞ、ウツカリするな。『師高聲に喝して云く、脚下を看よ。』之れは記者の附言であるが、記者も却々普通の記者では此處まで書いて呉れぬが、能く書いて呉れたものぢや。雪竇一段と聲を勵まして、其鼈鼻の毒蛇は我が許に居るぞ、迂路々々すると喰ひ付かれるぞ、馬鹿共め、ソレ足許だ、と注意された。禪の扱ひは之れでなくば不可ぬ、理論は迂である。さればと云つて喪身失命の徒輩は、尙ほ蛇の名に取り付いて、馬鹿正直に脚下を探すであらう。

第二十三則　保福妙峰頂

垂示云、玉將レ火試、金將レ石試。劒將レ毛試、水將レ杖試。至二於衲僧門下一、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、要レ見二深淺一、要レ見二向背一。且道將二什麼一試、請擧看。

（訓讀）垂示に云く、玉は火を將つて試み、金は石を將つて試む。劒は毛を將つて試み、水は杖を將つて試む。衲僧が門下に至りては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んと要し、向背を見んと要す。且く道へ什麼を將つてか試みん、請ふ擧す看よ。

（講說）『垂示に云く、玉は火を將つて試み、金は石を將つて試む。』凡そ試すと云ふことも、善意を以てすれば爲になるもので、それも態々試めさずとも、顏々相對した時、能く向ふの心が映射して、見えるものであります。設使初相見の人と雖も、虛心平氣で相對する時は、能く分るものであります。丁度鏡と鏡と相對せしめる時のやうに、兩人が虛心平氣で居れば、所謂兩鏡相對して、中に影像なしで、影も形も寫るものでないが、一方に於て虛心を缺く時は、直ぐに他の一方に其影像を寫すものであります。然し苟も佛に代つて化を擧ぐる底の者に到つては、人を見るの明がなくてはならぬ。即ち宗旨を以て人に接し、敎導する位置に在る者は、殊に此對機を見るの眼力を備へねばならぬ。今玉を試すに火を以てし、金を試すに石を以てすと云ふのも、本則に就いて起つた話である。そして其語の據所は『淮南子』に、

『鑛山の玉は、爐中の猛火に投じ、三日三夜之れを燒くも、更に其色澤を變へない。』

とあるより出たので、眞實の名玉に爲れば、如何なる猛火に燒くも其色が變らぬが、若し僞物であるなら、忽ち熔解して了ふ。又金を試みるには、純黑の石を以て、其金を試磨すれば、之れも眞僞直ちに判明するので其石の事を試金石と云ふと、『楞伽經』に出て居る。『劒は毛を將つて試み、水は杖を將つて試む。』之れにも吹毛の劒と云つて、能く切れる劒は、毛を吹き付ければ、直ぐに其毛が斬れると云ふので、劒の利鈍は毛を以て試すのである。水を渡るには、杖を以て試し、其淺い深いを知ると云ふことがある。』衲僧門下に至りては一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶。我が門下の修行者は、一言一句で試みることが能きる。僅に一言一句でも、口を開けば、其肚のドン底まで見破ることが能きる。『口開いて暘見する通草哉』などいふ古句もある。千七百則の公案を覺えて、彼れは什麼の是れは恁うのと言へば言ふほど、其暘が見透ける。故に『君子は言を苟もせず』と云ふて、一言半

句を言ふにも思慮して後にするのであります。一機一境は應對の時に、足の上げ下しから坐り方、指一本の動し方で、其人の心まで洞寫し、此一機一境で試すことが能きる。又一出一入も同じことで、室の出入り、進退坐作の上である。一挨一拶之れも同じことを重ねたまゝで、互に觸れ合ひ接し合ふ其間に於て、チヤンと試みることが能きる。總て是等の方法を以て『深淺を見んと要し、向背を見んと要す。』其悟りは、どの位深いか淺いかを見究め、果して其道に向つて居るか、背いて居るかを試驗しやうとするのであります。『且く道へ什麼を將つてか試みん』然らば神出鬼沒、十人十色の出入挨拶を、何を以てか試むるか『請ふ擧す看よ』此處に一例ありと示衆して、正に保福妙峰頂の一則を出されたのであります。

擧、保福長慶遊山次、福以レ手指云、只這裏便是妙峰頂。慶云是則是、可惜許。雪竇著語云、今日共二這漢一遊山、圖二箇什麼一。復云、百千年後不レ道レ無、只是少。後擧二似鏡清一。清云、若不二是孫公一便見二髑髏遍レ野。

（訓讀）擧す、保福長慶遊山する次、福手を以て指して云く、只這裏便ち是妙峰頂。慶云く、是は則ち是なり、可惜許。雪竇著語して云く、今日這の漢と共に遊山す、箇の什麼をか圖る。復云く、

千百年後無しとは道はず、只是れ少し。後に鏡清に擧似す。清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きを見ん。

（講說）保福と長慶とは、後に出る鏡清と共に、雪峰門下であつて、三人共同得同證、同見同聞じあつた。保福、長慶の二人が、一日遊山と山に栗拾ひにでも行つた事がある。其時保福は長慶を試さうと思つて、妙峰頂の一事を引き出しました。『擧す　保福長慶遊山する次、福手を以て指して云く、只這裏便ち是れ妙峰頂。』話が横道へ這入るが、爰で少しく妙峰頂のことを話して置かねば分らぬ。尤も無理に妙峰頂を持ち出さなくてもよいのだが、保福は長慶の試金石として妙峰頂を持ち出しました。之れは『華嚴經』入法界品の因緣で、同經に、善財童子が五十三の善知識に參じて修行することがあります。爾の時文殊菩薩が、善財童子に告げ、

『これより南方に於いて勝樂と云ふ國があつて、其國に山あり妙峰と名づくる。其山に德雲比丘と云ふ知識が居られるから、汝彼の山中に往き德雲比丘を尋ねて菩薩行を問へ、德雲比丘は汝の爲めに說くであらう。』

と敎へました。此時善財童子は敎を受けて大に歡喜し、敎の如く南方に向つて進み、勝樂國の妙峰に到着し、東西南北四維上下を尋ねて、德雲比丘を覓め廻はつたけれど、遂に見當らぬ。善財益々比丘を渴仰して尋ぬること七日七夜、遂に德雲比丘が別の山上に徐步經行、卽ち散步して居らるゝのを認

めた。爰に於て善財童子が菩薩行を問ひ、德雲比丘は善財童子の志心堅固なることを讃嘆し、爲めに說法されたことが、『華嚴經』入法界品に出て居る。尤も、此因緣に就いては、世間通途の考へを以ては分らぬ、よろしく一隻眼を以て看るべきであります。古人は妙峰に就いても二義を立て、一に寂靜不動の義、二に高出周覽の義と云ひ、之れは定に依つて慧を起し、寂靜不動、而かも知鑒遺すことなく、果源を徹見し、萬類を下視するに擬し、此心頂に登つて便ち正覺を成ずるを妙峰頂に登り盡したとすると註して居ます。故に善財童子が妙峰頂に登つて、德雲比丘に會はなかつたのは、水却つて水を浸さずで、善財童子が全く德雲比丘と同化した所であります。後一日別峰に在つて、善財却つて德雲に相見す、然らば德雲は下山して、他の山に移つたのであらうか、經には德雲從來曾て山を下らずとあります。此德雲下山不下山に就いて、評唱にも一寸出て居るが、又商量すべきである、諸子銘々に調べて見るが可い。今は只妙峰頂の因緣だけに止めて置く。さて、本則に還つて、保福と長慶と遊山に出た序に、保福が指示して云ふには、這裏便ち是れ妙峰頂、此處が卽ち極樂淨土ぢや。之れ丈けの事は半可通の一枚悟りでも言へることで、婆婆卽寂光淨土ぢやなど常に言つて居るが、今のは眞實の悟りから出た語で、長慶を驗問して居るのであります。遊山で快く遊び廻はつて居る時、突然これが極樂淨土の妙峰頂さと保福が言つた。『慶云く、是は則ち是なり、可惜許』長慶和尙も悟り臭い坊主でない。火を以て試むるも、玉は卽ち玉なり、石を以て磨するも、金は卽ち金なり。長慶の

挨拶は、保福も能く云ふは言うたが惜しいことをした。長慶は驗問に遭ふても、ビクシヤクしないで旨いことを言つたが、保福言ひ損なつたぞ、惜しいことをした、可惜許、飛んでもないことをしたものだ。『雪竇著語して云く、今日這の漢と共に遊山す、箇の什麼をか圖る』雪竇も堪らなくなつて、此公案に對して著語を下した。保福、長慶の兩人が、一體遊山したと云ふに、遊山したなら遊山したでそれで可いのに、何を猪口才な、ヤレ妙峰頂だの、ヤレ可惜許だのと、途方もない馬鹿なことを言ひ合つたものだと評したのも、雪竇の力で、雪竇は又一段と立ち越えて居る所が見える。其口吻は何んとなく冷笑して居るやうであるが、一抑一揚で、抑えてばかりは置かぬ。『復云く、百千年後無しと道はず、只是れ少し。』此著語から見ると、雪竇は此兩人を賞めて讃嘆して居るやうに思はれる。然し百千年の後までも、遊山の次に妙峰頂を鑛究する輩は、絕無とは斷言しないが、恐らく少ないとであらう。能くも保福は妙峰頂を持ち出し、長慶は之れに對して好挨拶をしたと、稱揚して居ることが、明かに見える。『後に鏡淸に擧似す。』扨て保福、長慶が遊山から歸つて來て、今日山上の話を、同參の鏡淸に話した。淸云く、若し是れ孫公にあらずんば便ち髑髏野に遍きを見ん。』爰に於て鏡淸も、長慶を賞めた。孫公は長慶の俗姓であります。流石は長慶だけあつて、出かした出かした。若し長慶が此處で抑えて可惜許と言はなかつたなら、世の學者は、妙峰頂は此山だなど、保福の言に附き纏ふて、髑髏野に遍滿するであらう。已れこそ悟つたなど言ふものは、眞の悟りに至らなくて、悟りに囚はれて

居るのであります。大抵世のお悟り連中は、臭い物に蓋をしたやうに、一寸蓋を外すと、臭氣紛々鼻を突いて至る。悟つたなどゝ言ふ者に限つて、其悟りが臭氣の如く鼻を突いて出て來る。悟りも斯る悟りであるならば、醜且つ拙なるもので、一向に有難くはない。故に今鏡清は、孫公ならざればこそ善く言ふて呉れた。若し公でなかつたなら、妙峰頂も死んで了つて、これに參ずる髑髏累々山野に滿つるであらうと、長慶を褒め揚げたのであります。

妙峰孤頂草離々、拈得分明付二與誰。不三是孫公辨二端的一、髑髏著レ地幾人知。

（訓讀）妙峰孤頂草離々、拈得分明なり誰れにか付與せん。是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば、髑髏地に着く、幾人か知らん。

（講說）雪竇は保福の長慶を勘檢する樣子を評して四句一頌としました。『妙峰孤頂草離々』保福が今持ち出した妙峰頂は、實に嶮峻なる孤頂であります。一味平等絕對的本體を指して孤頂と云ふのであるが、既に絕對平等の本體であるならば、何んのかのと言詮に表して說明能きぬ筈であるのに、保福は此處が妙峰頂だと言つて了つた。恁く保福の言說にかけられた以上は、絕對平等の本體ではなくて、相對差別の現象である。草離々とは、草の生ひ繁つて居るムサ〳〵しき貌で、妙峰頂も草だらけの凡嶽に爲つたことを示して居ます。妙峰頂だなどゝ言ふたは可いが、言ふただけ俗化したとの意で

暗々裡に長慶を賞めて居ます。卽ち妙峰頂と言つたのは、長慶の語を以てすれば、是は卽ち是なりであるが、惜しい哉草離々、可惜許である。『拈得分明なり誰にか付與せん。』拈得と云へば取ることゝ爲り、拈却と云へば捨つることゝ爲る。保福は其ムサ〳〵しい妙峰頂を拈得し來たつて誰れに付與する積りであらう、果して知音があるであらうか。幸に今長慶であつたから可かつたが、若し夫れ盲啞の徒輩であつたなら、折角持ち出した妙峰頂を什麼する積りであつたらうか、妙峰頂と言つたなら草離離であるのに、更に草上に糞土を加へねばならぬことゝ爲つたかも知れぬ。故に圜悟は『乾屎橛』と著語して居ます。乾屎橛は糞拭篦のことで、支那人は大便をして後、篦で拭いたものと見える。圜悟の意では、妙峰頂などと保福の振り廻はすのは、丁度乾屎橛を鼻の先きに振り廻はす樣なもので、臭い臭いと言ふのである。『是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば、髑髏地に著く幾人か知らん。』保福も幸ひ長慶の如き知音底を得たから可かつたが、若し長慶其妙峰頂の端的を辨じ、可惜許と抑えたから可いが、然らずんば、其結果や、果して如何。之れは鏡清の批評した如く、此妙峰頂の爲めに、天下の者が屍悟りの穴に墮ちて此處に往生し、髑髏地に遍く、如何にも慘憺たる光景を呈したであらうと長慶は鏡清にも賞められ、雪竇にも讃められて居ます。全く長慶の一人舞臺で、其功を甚だ多とするのであります。先師洪川老師の言はるゝには、

『妙峰頂に就いて、大燈國師の妙偈がある。』

と。序でだから話さう、大燈國師は再世の雲門ともいふべきで、其偈、

『妙峰孤頂難二人到一、只看白雲飛又歸、松檜蒼々歷二幾歲一、莫教巖畔鳥聲稀。』

妙峰頂これは衆生の腹の中にある山ぢや、それを妙峰孤頂と切り出した所は妙ぢやが、却々到れぬ、到れば卽身成佛。さて其山も遠く遙に見えるだけで、白い雲がモヤ〳〵するのみだ。又其山は深山にて、幾千年といふ昔から、佛祖も通はぬ、誰れも覗いても見ねば、元より斧鉞も入らぬ山だから、茂りに繁つて居る。佛祖も通はねば、鳥も鴉も通はぬ妙峰であるゆゑに、鵠林翁も言はれた、

『我れ昔は、只脚痕下が妙峰頂ぢや、知れたことぢやと誤つて居た。さうでない恐ろしい。』

と、言はれた。其處で此公案は、雪峰門下の諸老相唱拍せられる因緣で、誠に古今獨歩であると、鵠林翁も賞翫して居られるぢやとは、先師の本則を提唱された時の評語であつた。序であるから附けて置く。妙峰孤頂草離々、拈得分明なり誰れにか付與せん、是れ長慶端的を辨ずるにあらずんば、髑髏地に著く幾人か知らん。先づ今日は之れだけ……。

垂示云、高高峰頂立魔外莫二能知一、深深海底行佛眼覷不レ見。直饒眼似二流星一、機如二掣電一、未レ免靈龜曳レ尾。到二這裏一合作麼生。試擧看。

（訓讀）垂示に云く、高高たる峰頂に立つ魔外も、能く知る莫く深深たる海底に行く佛眼覷れども見えず。直饒眼流星に似て、機掣電の如くなるも、未だ免がれず靈龜尾を曳くことを。這裏に到りて合に作麼生、誠に擧す看よ。

（講說）『垂示に云く、高々たる峰頂に立つ魔外も能く知る莫く、深々たる海底に行く、佛眼覷れども見えず。』本則の如きは佛見法見を超出したる境界で、それに就いての商量であります。凡そ何宗を論ぜず、究竟の目的は、轉迷開悟と言つて、今日の迷見を轉じて、悟道に至るのであるが、其悟りと云ふのも、一枚悟りでは不可ぬ。悟りも悟り臭き悟りは、眞の悟りではない。卽ち悟りに入りて悟りを出で、悟りを忘れ切つた悟りでなくば、眞の悟りとは言はれぬ。此眞實の悟りに至らねば、其悟

第二十四則　鐵磨到溈山

りが、却つて身の害となり、障礙と爲るのであります。例へば藥は病を治する爲めには必要であるが其病の治療されて、既に健康體に復つたのに、藥を服用すれば其藥も却つて毒と爲り害と爲つて、身を損ふに至るので、病氣が治れば、最早其時から、藥を忘れねば、眞實の健康に復つたとは云はれぬ。卽ち迷を脫却せんとして、修養するに從ひ、煩悶だとか、懷疑だとかで湧出する。其時更に正見に住して、一刀兩斷に煩悶懷疑を截斷すれば、其處に悟りの光明閃き初めるのであります。然し其悟道の曙光を僅に認めたばかりで、其悟りを振り廻はすと、素人目には如何にも豪く見えるけれど、悟道を超絶した者の眼より見る時は、片腹痛き業であります。先づ禪宗の修宗を少し行ると、直ぐに一喝を吐いたり、棒を振つたりする。又或る時は白眼にして世を睨み付けたりするけれど恁ういふことは禪宗の悟りでも何んでもない。是れは古人の眞似する狶猴であつて、實に我が禪宗の本義に背反する所の所爲で、忌むべきことであります。故に悟りに入ると云ふのも、全く悟りを忘れ果てたる悟りでなくてはならぬ。其境界より云へば、洒々落々で、有りの儘である。古人は之れを無功用とも云ひ無作の妙用とも云はれたが、此功なき活用、作すことなき妙用でなくば、眞實悟りの境界とは言はれぬ。故に修行をすればとて、只修行するのでは不可。修行をし詰め、悟りの上にも悟り盡して、悟りを脫却した曉でこそ、初めて眞實の悟りとも言ひ得る。若し少しでも悟りにコビリ付い一居たならば、未だ悟りにも入らず、迷に執着して居るよりも惡るい。今其眞實悟りを超絶したる境界を示すならば

高々たる峰頂に立ち、雲表に聳ゆる山上に立つのである。さうかと思へば、深々たる海底に行くで、深さ幾尋あるか分らぬ大海原の底を歩行するやうなもので、到底尋常の人の入り得る所でない。斯う云ふ悟りの極點に住するから、天魔外道の類と雖も、之れを伺ふことが能きねば、假令三世を洞觀したまふ佛眼を以て覷ても、明かに見えぬ。恁く悟りの極位に至れば、如何にも高く、又如何にも深く共に常規を逸して居る。此境界を古人は意は毗盧の頂顆を蹈んで、佛と同じき境界を得るのである。恁く毗盧遮那法身佛の頭の上にドン坐るなど云ふと、何んだか高ぶつた樣に聞こえるけれど、其行は童子の足下を拜するで、其修行は低き所に於て、細心なるべきで、卽ち戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くである。悟りの極致を得たる者は、其行も極めて低く小心翌々として居るのである。大乘、殊に禪宗の悟りなるものは、斯うなくてはならぬ。其實行門に於ても、斯うあるべきである。是れを他の語を以て云へば、上求菩提、下化衆生である。又向去去來とか、向上向下とか、往相還相とか、言葉は色々變つて居るけれど、意味は同じことである。其悟りを超絶したる、至高の境を示して、高々たる峰頂に立つ、魔外も能く知るなしと云ひ、又其反面より說いて、深々たる海底に行く、佛眼覷れども見えずと言つたのである。因みに此語の出據に就いて一言すれば、『會元』に出て居るので、唐朝の李翺と云ふ人が、鼎州の刺吏と爲つて赴任した時に、其地に法幢を建てゝ居た藥山和尙を訪ねて、

『如何なるか是れ戒定慧。』

と、問ふた。戒定慧とは、菩薩の三學と云つて、佛法と云ふことの代へ名と見てもよい。今の心理學の情意智にも當てられるが、無理に合せなくともよい。時に藥山和尚、

『貧道が這裡、此閑家具無し。』

と、答へられた。貧道とは沙門自らを指す語で、これにも大いに意味があるが、今日此語の通りに貧道に滿足するや　でなければ、眞實の修行も能きねば、又眞實の布敎も能きませぬ。今藥山和尚は、

『私の所には、そんな不用道具はありませぬ。』

と、言はれた。李翺も未だ修行を積まぬから、和尚の言葉の意味が解らぬ。其處で正直に、

『玄旨測り難し。』

と、陳べられた。時に和尚、

『太守此事を保任し得んと欲せば、直ちに須らく高々たる峰頂に向つて立ち、深々たる海底に行くべし、閨閣中の物捨て得ずんば、便ち滲漏を爲す。』

と、言はれたとあります。此語より出てゐるのであるが、學問とか、見識とかいふものに取り付いてゐる間は、本眞の悟りには到達し難いのであります。思はず初めの句で長く爲りましたが、さて『直饒眼流星に似て、機掣電の如くなるも、未だ免かれず靈龜尾を曳くことを。』以下は學人に就いて云ふ

ので、凡そ學人たる者は、縱令怜悧明眼であつて、能く速に見ること流星の如くであつても、或は又其一念心頭の働きの迅速なること、稻妻の閃く如くでありましても、靈龜尾を曳くの評は免れない。靈龜尾を曳くとは面白い比喩で、悧巧な龜が、人に捕はれまいと思つて、自ら歩行いた足跡を、自分の尾で消して過ぎ去るのであります。成程足跡だけは能く消えるが、其代りに尾の痕跡が付いてゐるから、矢張り龜の過ぎ去つたことを人間に看破され、石穴の中で安心して居る所を捕へらるゝのであります。今も眼流星の如く、機掣電に似た所は、靈龜に相違ないけれど、ヤレ哲學だとか、ヤレ智識だとか言ふ尾を曳いて居るから、まだ〳〵至り盡したとは言れぬ。『這裏に到つて合に作麼生。』爰に於て、學人は果して如何にせんとするか。尾を曳く連中は、什麼しやうといふのか。『試に擧す看よ。』鐵磨、潙山に到るの一則を示しませう。

擧、劉鐵磨到二潙山一。山云、老牸牛、汝來也。磨云、來日臺山大會齋、和尚還去麼。潙山放身臥、磨便出去。

（訓讀）擧す、劉鐵磨潙山に到る。山云く老牸牛汝來る也。磨云く、來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼。潙山身を放つて臥す、磨便ち出で去る。

（講說）本則に出て居る劉鐵磨は、尼僧でありまして、本名もあるけれど、却つて其本名が傳はら

ないで、其綽名の方で名高い。元劉氏の出であるから劃字を冠して居るが、鐵磨は鐵製の臼であります。臼は一切の物を碎破する、而かも鐵磨であるから、萬物一として之に碎かれざるはない。今此尼僧口牙俊利、機鋒峭峻、人能く渠に當り得る者がないので、時人は渠に鐵磨の稱號を與へて、劉鐵磨と稱して居たのである。『擧す劉鐵磨潙山に到る。』潙山靈祐禪師は百丈大智禪師の法嗣で、當時潭洲に法幢を建てゝ、天下求道の士に接して居られました。劉鐵磨は潙山の近傍に草庵を結んで居て、常に潙山禪師に參じ、遂に大悟したと云ふ、並ならぬ尼僧でありました。一日劉鐵磨が潙山禪師の許へ、例の如くやつて來た。『山云く、老牸牛來るや。』牸牛とは子を育てゝ居る所の牝牛のことで、潙山は劉鐵磨の來たのを見て、此老ぼれ牝牛が來たのかと言つて、先づ其機を制せんとしました。然し此劉鐵磨を指して牛と言つたのに因緣があるかと尋ぬれば、圜悟は評唱に、潙山の理想を說いて牛であると示して居ます。卽ち潙山は老僧百年後、山下檀越の家に、一頭の水牯牛と爲つて生れやうと、自ら言はれた。之れは元より異類中行で、やはり衆生濟度の爲めではあるが、牛と爲らうと云ふのが潙山の理想である。面白い理想を立てたものだ。故に今劉鐵磨の來るのを見ても、其理想の牛が腦中を去らず、此世からして異類中行の積りで、老牸牛が來たかと聲を掛けたのであります。『磨云く、來日臺山に大會齋あり、和尙還つて去る麼。』鐵磨固より普通の尼でない、此婆々未だクタバリもしないで來たのか位なことに頓着して、押問答はしない。

『明日天台の五臺山に大會齋があるさうですが、和尙も御出掛けでありますか。』と、相撲ならばウツチヤリに出たのぢや。大會齋とは所謂無遮會のことで、出家でも在家でも、老幼男女を選ばざるは勿論、牛でも馬でも、一切の衆生來る者は之れを遮り拒まず、平等に供養する所の法會であります。故に牡牛でも、牝牛でも、一切行かれるから、牡牛も出かけては何うだ位の意志が含んで居るやうであるが、之れは銘々の商量すべき所であります。何れにしても潙山と臺山とは相隔ること數千里と今ふから、今日のやうに汽軍があつたにしても、明日の間には合ひさうにも思はれぬ。況んや昔時交通不便の支那に於てをやである。然るに明日臺山の大會齋にお出でになるかと反問する所、寔に不可解に見えるが、文字を以て解せんとすれば、遂に不可解に陷り、文字を離るれば、了々解釋することを得。卽ち未到の者には、此消息は得られまい、故に圜悟は、高々たる峰頂に立つ魔外も能く知るなく、深々たる海底に行く、佛眼覷れども見えずと垂示して居ます。兎に角『來たか』との挨拶に『往くか』とは面白いでないか。『潙山身を放つて臥す』潙山は往くとも往かぬとも答へない、コロリ臥て了つた、何んと云ふ事であらう。潙山の身を放つて臥たのは、果して臺山に往つたのであらうか、將た潙山に留まつて居るのであらうか、大いに眞參實究を極めた上に自知すべきことで其處までは、此提唱では釋かれぬ。『磨便ち出て去る。』劉鐵磨も潙山のコロリ臥た姿を見て、何んとも言はずに出て行つて了つた。爰に於てか又鐵磨の心も分らぬ、實に斯う云ふ境界にあると、言語道斷

で、思慮分別を超絶して居る。然し潙山と鐵磨とは、能く分つて居て、互に酬唱して居るのであります。故に氣の早い連中に爲ると、禪は一種の暗號を用ひて居るので、俗人に分らせぬのを得意と心得て居るなど評するけれど、決して然ういふことではない。暗號なら暗號を覺えればよい譯であるが、禪は斯ういふ形式に拘泥したものでなく、大悟徹底の境界に到れば、自由自在七通八達、時に或は疾風土沙を卷くが如くであるかと思へば、時に或は江邊一葉を浮べて銀波を碎くと云ふやうな風で、其超然卓拔たる跡は、到底常人の窺ひ知ることが能きぬので、水火の冷熱は自ら手を入れて自知するより外に道は無いのであります。

曾騎二鐵馬一入二重城一、勅下傳聞六國清。猶握二金鞭一問二歸客一、夜深誰共御街行。

（訓讀）曾て鐵馬に騎つて重城に入る。勅下つて傳へ聞く六國の清きことを。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。夜深くして誰と共にか御街に行かん。

（講說）此雪竇の頌は、諸方の諸師皆俱に褒めて居るが、圜悟も、『碧巖百則中這の一頌最も理路を具す、中に就いて極妙、貼體分明に頌出す。』と、評して居ます。初めの一句『曾て鐵馬に騎つて重城に入る。』とは、劉鐵磨を頌したのであります鐵馬は十分に武裝した馬のことで、將軍を乘せて戰場に向ふ軍馬のこと、重城は敵の城廓が塹溝牆

壁を繞らし、二重三重、堅固に防禦して居る形であります。今劉鐵磨が、潙山禪師の室に乘り込んで來た樣子は、天下の老將が、駿馬に武裝させて、土煙を蹴立てゝ騎り込んだやうである。次に『勅下つて傳へ聞く六國の清きことを。』と云ふ句は、潙山を頌したのであります。六國と云ふは、秦の始皇帝當時支那中國は六大國に分立して居たのをいひます。其所謂六國とは、韓、魏、趙、燕、齊、楚を云ふので、秦の始皇帝十七年に、先づ韓を攻めて韓王を得、十八年に趙を擊つて趙王を虜にし、二十一年に燕を略して太子丹の首を斬り、二十二年に魏を攻め、二十三年に楚、二十六年に齊と云ふ具合に、六國を侵略して天下を一統し、以て秦朝を立て、遂に驕奢に耽ると云ふ有樣であつて、或は此六國を六識に配當し、六識迷見を起さゞるに至つたことであると解する者があるが、あまり敎相的說明に過ぎて居るから採られぬ。今將軍鐵馬に跨つて重城に乘り入れ、天晴功名を立てやうと思へば、何んぞ圖らん天子の勅命下り、早や六國も平定し、天下は泰平に爲つたと拜聞し、今まで張り詰めて居た力も消え失せんとする狀態である。流石の劉鐵磨も、非常の勢を示して來り、潙山を威壓しやうとは爲たものゝ、老悖牛來也とやられ、兵馬倥偬の間に居た鐵磨もポカンとするを得ぬ。『猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。』第三轉句は、又劉鐵磨を頌したので、金鞭は卽ち將軍の持つ鞭であります。折角三軍に將として出馬したのであるから、今日天下泰平の勅語を忝くし、軍を收めて歸らうとして居るけれど、其實果して何うであるかと、金鞭を振り上げて念を押して居る。便ち鐵磨潙山の爲めに、

老悖牛來也と言はれても、折角であるから、オメ〳〵と下がれず、來日臺山大會齋ありと吹つかけた所が、猶ほ金鞭を握つて歸客に問うて居る樣子である。最後の『夜深くして誰と共にか御街に行かん。』と云ふ句は『潙山放レ身便臥、磨便出去。』と本則にある所を頌出したのであります。御街は宮城の在る街道で、卽ち直ぐに宮城と見ても可い。夜深くして往來に人影を留めず、萬籟寂として聲なければ、九重の消息、官府の機密は之れを伺ふに由なし、一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出て去る、卽時の富貴、見後の貧窮、此貧窮が面白い、所謂、高々たる峰頂に立ちて魔外も能く知るなく、深々たる海底に行きて、佛眼覷しども見えずである。『君は瀟湘に向ひ、我は秦に向ふ。』と圜悟も賞玩してゐます。

第二十五則　蓮華峰榔標

垂示云、機不レ離レ位墮二在毒海一、語不レ驚レ群陷二於流俗一。忽若擊石火裏別二緇素一、閃電光中辨二殺活一、可下以坐二斷十方一、壁立千仞上。還知レ有二恁麼時節一麼。試擧看。

（訓讀）垂示に云く、機位を離れざれば毒海に墮在す、語群を驚かさゞれば流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を坐斷し、壁立千仞なる可し、還つて恁麼の時節あることを知る麼、試に擧す看よ。

（講說）『機位を離れざれば毒海に墮在す』此一句は洞山の三滲漏の第一句に出て居つて、一寸解り惡い。機と云ふは心の作用で、未だ寒いとも、暑いとも、語句に現はれざる所、卽ち五感の上で云へば、寒いと感じ、暑いと感じた感覺の發端第一刹那を云ふので、鏡中にチラツと影像が寫つて、美人ともビとも言はぬ前であります。位は卽ち宗門で謂ふ正位のことで、之れも正位を說くには、洞山五位から說明せねばならぬことに爲つて、却つて事を面倒にする恐れがあるから、他日に讓ることとす

る。然し正位とは一言に、悟りの眞たゞ中と云つたら分るであらう。山是山ならず水是水ならず、柳は綠を失ひ、花は紅を失ふが、之れが卽ち正位であります。然し悟つたと云つても、未だ其悟りに取り付いて居て、正位に證を取り、卽ち機位を離れざる樣な境界では、實に斷空の毒海に墮在漂流するの輩であります。機は位を離れ自由自在の活作略がなかつたならば、未だ眞實悟了したとは言はれぬ。『語群を驚かさゞれば流俗に陷る』心中にチラリとした機が、若し口に表はれては、大獅子吼と爲り活波瀾と爲りて群衆を驚かす底の語句でなければ、未だ眞實の悟りとは言はれぬ。徒らに大言壯語を吐いても、一向人か驚かざるのみか、却つて人に輕侮される事があります。眞實悟了すれば、其一言一行は必ず天下を聳動せしむるの語句を發するものであります。故に語群衆を驚かさざれば流俗に陷り、平々凡々の評を免れぬ。以上は第一段『忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を坐斷し、壁立千仞なる可し』若し夫れ機位を離れ、語群を驚かす底の漢ならば、石と石と擊ち合ひ、ピカリと光る其中に、物の黑白を判別し、雷公のゴロ〳〵ピカツとする其刹那に生きて居るか、死んで居るかを辨別することが能きる。斯く怜悧にして而かも機鋒峭峻なる者であるならば、東西南北四維上下の十方を斷ち切り、現象差別の上に超絕し、壁を切り立つたやうな鹽梅で爪でも立たぬ、傍へも寄せ付けぬ。所謂佛祖も近づくこと能はず、天魔外道も覗ふこと能はざる、孤奇嶮峻なる境界を得ることが能きます。之れまでが第二段で。『還つて恁麼の時節有ることを知る麼』本則

を睨んで、大衆此位を離れ、群を驚かす、十方を坐斷し、壁立千仞の境界の到來すべき時節あることを自覺して居るか、此七花八裂擒縱自在底の時なくんば、眞實悟道には入り難しと警告を與へ、而かも『誠に擧す看よ』と本則を揭げたものであります。

擧蓮華峰庵主拈二拄杖一示レ衆云、古人到二這裏一、爲二什麼一、不レ肯住一、衆無語。自代云、爲二他途路不レ得力。復去、畢竟如何。又自代去、椰榔橫擔不レ顧レ人。直入二千峰萬峰一去。

（訓讀）擧す蓮華峰庵主拄杖を拈じて衆に示して云く、古人這裏に到り　什麼と爲てか肯て住せる衆無語。自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲なり。復云く、畢竟如何。又自ら代つて云く、椰榔橫に擔ふて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。

（講說）『擧す蓮華峰庵主柱杖を拈じて衆に示して云く』蓮華峰と云ふのは天台山中に在る一峰で、此蓮華峰に庵を結んで住して居るのが、卽ち蓮華峰庵主であります。これは雲門大師の法嗣で、金陵奉先の道深禪師の弟子に當り、雲門大師の法孫であるが、其法號を詳にしない。總じて庵主と云ふのは、出世して大導師と爲らぬ人を云ふので、修行は全く了畢して居ても、大寺名刹に出でゝ衆に接すると云ふことなく、一生を山間僻地の小庵中に終つた者を庵主といふのであります。斯う云ふ類則

は澤山あるが、此庵主は拄杖使ひの名人であつたと見える。尤も此拄杖は、印度では必ず携へねばならぬ道具の一としてあります。それは印度は熱帶地方で、雨季に入れば毎日宵雨打ち續き、河水漲溢して洪水を生ずることがある。斯る時には拄杖を以て水の深淺を量り、身を護するの具とし、或は之れを突きて蟲類に警戒を與へ、不知不識の間に、殺生罪を犯すを免れたる爲めに用ゐるのであります。然し支那に來たつてからは拄杖も然ういふ道具としては用ひられず、形だけは拄杖であつても、唯此一本の拄杖子が、大いに他の意味を以て、活用せらるゝやうに爲りました。卽ち此拄杖を拈起すれば直ちに乾坤を呑み、又世界を吐き、殺活自在、擒縱無礙の用を爲し、或は此拄杖子、一本を渡せば、龍の雲を得たるが如く、虎の嵎に靠るが如き勢ひと爲るのであります。例へば嚴陽尊者と云ふ人が路に一僧に逢ひ拄杖を拈起して云く『是れ什麼ぞ』僧云く『不識』分りませんと答へた。嚴云く、

『一條の拄杖も識らざるか。』

馬鹿者め。今度は拄杖を以て地上に突き立てゝ云く、

『還つて識るや。』

今度は何うぢや。僧云く、

『不識。』

嚴云く、

『土箒子も亦識らざるか。』

突き跡も分らぬとは呆れ果てゝ了ふ。嚴復拄杖を擔つて云く、

『會すや。』

僧云く、

『不會。』

やつぱり分からぬ。嚴云く、

『榔標橫に擔つて人を顧みず、直ちに千峰萬峰に入り去る。』

此嚴陽尊者のやうに、自由に拄杖を使はれては、未悟の者は亦呆然たらざるを得まい。斯う云ふ風に拄杖を使つた例は、古人に甚だ多い、評唱にも出で居る。扨て今蓮華峰の庵主も、茅茨石室の中に在つて、菜根木實を喫するも、心に道を證得して、拄杖を使つて來者に接する前後二十年、終に一人も答へ得る者がなかつた。或る時復拄杖を拈じて衆に示して云く『古人這裏に到つて、什麼といてか肯て住せず。衆無語』拈には出す意と、入れる意とあるが今は拈出拈起の意味で、グーと拄杖子を突き出して置いて、此拄杖子を見よ、古人は決して此拄杖子一本の境界斗りを悟つた一枚悟りではない。一枚悟りならば、只此拄杖子に取り着いたきり離れぬが、古人の達者は、機位を離れ、決して一枚悟りではない、皆肯へて住せぬ。西天四七、東土の二三、此拄杖頭には居らぬぞ、篤と見よ。大衆も之

れは分らなかつたと見えて、皆默然として居た。『自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲めなり』

『臨濟錄』には、

『一人在二途中一不レ離二家舍一一人離二家舍一不レ在二途中一』

とあつて、途中家舍の名目を出して居るが、途中は建化門で、一法を捨てぬ境界で、家舍は實際理致で一塵を立せぬ處ぢや。今他の途路と云ふは、卽ち途中と云ふ方で、古人は早や十分に悟り盡して、而かも其拄杖一本に固執せず、皆下化衆生と活動して居るのであります。最早杖などを賴みとして居る者ではないと、自ら代つて庵主が答へた所、聊か說明的であるけれど、後の句に依つて、益々活用するのであります『復云く畢竟如何』自ら答へて置きながら、復問ふて結局何うであると云ふ所庵主の慈悲廣大にして量り難い。『又自ら代つて云く、櫛標橫に擔ふて人を顧みず、直ちに千峰萬峰に入り去る』庵主が畢竟如何と重ねて問ふたが、前同樣大衆默然として居つたと見える。爰に於てか庵主自ら復代つて答へられた。櫛標は言ふまでもなく拄杖のことであります。古人は實に機位を離し、語群を黏かすので、今まで拄杖を拈起して、商量研究して居る中に、早や其拄杖を橫に引つ擔ぎサツサと千峰、萬峰の山奧へ這入つて了ふ。山奧とは何處だと思ふ、此處は一枚悟りでは分からぬ故に白隱禪師は、

『龍の水を得たるが如く、虎の山に靠る勢がある』

と言つて居られます。然し之れも愚衲の蛇足であります。蛇足は却つて人を惑はす處れがある、言はざるに如かず、語は意を現はし盡さぬ、櫛標橫に擔ふて人を顧みず、直ぢに千峰萬峰に入り去る、之れでて可い。

眼裏塵沙耳裏土、千峰萬峰不二肯住一、落花流水太茫茫、剔二起眉毛一何處去。

（訓讀）眼裏の塵沙耳裏の土、千峰萬峰肯て住せず、落花流水太だ茫々、眉毛を剔起すれば、何れの處にか去る。

（講說）第一句は先づ庵主の諸方に超絕した境界を讃嘆して『眼裏の塵沙、耳裏の土』と頌した。卽ち庵主の境界は超絕して居るから、塵だらけの目で能く見る、土塗れの耳で能く聞くのぢや、これでなければ度衆生は契はぬ。『千峰萬峰肯て住せず』然し櫛標を橫に擔ふて、千峰萬峰の山奧に這入つたと云ふから、樹下石上で、兀々修行でもして居るかと思へば、肯へて住せず、全く沒縱跡で、影も形も見えぬ。此處かと思へば、又彼處と云ふ風で、決して一處に定住して居らぬ。遂に庵主も行衞不明と爲つた。此期に及んで、鐘や太鼓で搜し廻はつても、居らばこそ、影をも止めぬ。『落花流水太だ茫々、眉毛を剔起すれば何れの處にか去る』之れは轉結二句を顚倒して見れば、分り易い。眼を見張つて熟視すれば、何れの處にか去られやう。此處を悟つても、彼處に現はるゝ所が、分明に判る。假

令望遠鏡でも見えなかつたのが、宛ながら掌紋を見るが如く明かである。落花流水太だ茫々で、繽紛たる落花にも、渾々たる流水にも、皆能く現はれて居る。東坡居士は、

『溪聲是れ廣長舌、山色豈清淨身ならざらんや。』

と言はれた。山の端の月の影、野末の庵室に音づるゝ秋の風時に斷雲と現はれ、時に霜雪と現はる。皆これ拄杖子の化身で、具眼の者は之れに依りて悟りに入ることが能るのであります。恁く際限なく萬象の上に現はれ來たつて、轉々變々太だ茫々たるものではあるが、若し一隻眼を具すれば、又見られないでもない。落花流水太だ茫々、眉毛を剔起すれば何れの處にか悟らん。

第二十六則　百丈奇特事

舉僧問百丈、如何是等特事。丈云、獨坐大雄峰、僧禮拜、丈便打。

（訓讀）舉す僧百丈に問ふ、如何なるか是れ奇特事。丈云く、獨坐大雄峰。僧禮拜す、丈便ち打つ。

（講說）本則も垂示を缺いて居ます、百丈は百丈山の懷海禪師のことで、大智禪師と云ふ勅號まで賜つて居る所の高僧であります。其傳記に就て委しく述ぶるとよいが、それは略すとして、この百丈禪師は、吾が宗門に於ては、忘れることの能きぬ功績を貽して居る祖師であること丈けは、一言して置かねばならぬ、百丈禪師は馬祖道一禪師の門下に於て、八十餘人の善知識を出して居たが、大機大用を得た者は、唯此百丈禪師一人きりであつたとまで言はれて居るお方であります、嘗に宗旨の上で勝れて居つたばかりでなく、佛陀の戒法に準據して、叢林の規則を制定なされたお方であります。即ち禪宗は五家七宗に分れて居るけれど、其後今日まで一絲亂れず、叢林の規定の能く行はれて居る

のは、偏に百丈禪師の賜であります、故に此規定は百丈清規と言ふて、宗門では誰れ一人知らぬ者もなく、又志れてはならぬ百丈禪師の偉勳であります。そして百丈禪師は、斯く立法家であるのみならず、又實行家であつた所が、此人の德として尊敬せらるゝ所以であります。禪師晩年に及んで、尙ほ一日をも空しくせず、常に力作して、

『一日作さゞれば、一日食はず』

と云はれたことは、實に今日の僧家をして能く蹶起せしむる所の興奮劑となつて居るのであります。

『擧す僧百丈に問ふ』一日或る僧が百丈禪師に問ひを提出しました。此僧並々ならぬ僧で、餘程立派な腕前を以て居つたと見える。定めし尋常一樣平凡の僧ではなくて、百丈會下に於ても、久參の遣り手であつたであらう。左なくば斯くの如き奇拔な問ひは出來ぬ。大抵の者ならば『如何なるか是れ佛』『如何なるか是れ法』『如何なるか是れ祖師西來意』位が關の山で、之れ以上の問ひは却々出し難い。併し此僧は斯る平々凡々たる問ひは出さぬ、實に此質問振りは見上げた者であります。『如何なるか是れ奇特事。』何が一番有り難い事で御座りませう、伺ひたいものでござります。佛法中一番玄妙な所は何んであらう。教理上大小顯密、自力他力、聖道淨土を問ふのではなくて、實行上、修行上、一番有り難い所は何んであらうと、問ひを出したのであります。すると百丈禪師は、此響に應じて、直ちに答へられた。『丈云く、獨坐大雄峰』大雄峰は百丈山中の一つの峰であつて、百丈山は既に其高さ百丈

ありと云ふのであるが、其中又奇峰があつて、谷に面し、岩根の上に突ツ立つて居る。故に獨坐百丈山でも、獨坐大雄峰でもよい。文字の上では之れきりであるが、眞意は文字上に在らず。されど之れを辯ずれば、既に言語に遷されて人を誤らしむるの基。間違ひは常に文字言句より出づる故、人々自己の力を以て參究せねばならぬ。オー己は玆にドン坐つてゐる、若し之れを得れば、保福と問じく、妙峰頂への遊山である。或は其儘西方彌陀の淨土、極樂世界への大往生である。『僧禮拜す、』此僧果して只者ではない。品位あるは殿樣に似たり、臭氣ある所は穢多かと疑はしむ。之れが此僧の勝れて居る所で、白隱禪師は、

『憎い奴ぢやぞ、百丈和尙を宛るで尻の下に敷いて居るわい、怎ういふ奴は、其儘遁すな。』

と評して居られます。打つなら鐵鎚を以て打つべく、縛するなら麻繩を以てすべし。凡そ禮拜するには、有り難く感じて、合掌稽首するのであるが、さうばかり思つて居ると、師匠たる者も鼻毛を拔かれる。何んの之れ位のことか、詰らぬことだと思ふ時にも、矢張り禮拜する。今は果して前者の意か後者の意か、之れ等も調べ事である、白隱尙和などの評で見れば、此禮拜を賞めて居る。圜悟禪師も怜悧の衲僧と著語された。『丈便ち打つ。』百丈禪師も此漢と言つて一棒を下した。併し棒にも、賞棒と罰棒とがある、師匠の手の內に在つて、使ひ分けをするのであるから、外見より推測し難い。今百丈の打つたのは、賞棒か、將た罰棒か、此僧由來怜悧の漢、突如『如何なるか是れ奇特事』と問うた

は癖者だ。百丈が『獨坐大雄峰』と答へると、直ぐに立つて禮拜した。百丈の心髓を抉づて居るやうな心地がする。斯う云ふ所で、ゴテ〳〵した事を言ふと不可ぬ。蛇足は添へぬ方がよい。此僧も却々俊秀の球ではあるが、僧の禮拜するや、突如一棒を與へた百丈の機鋒の鋭さは又格別なもので、馬祖禪師の大機大用を全然生き寫しにして居る樣であります。或る時僧あり、馬祖大師に問ふ、

『如何なるか是れ佛法の大意』

すると馬祖が先づ打つて置いて、

『貴樣の樣な奴を折たいで何うするか、若し其儘許してもして見ろ、此老僧が天下の笑ひ者と爲るわい』

と言はれたことがあります。又或る時僧あつて、

『如何なるか是れ祖師西來意』

と問ふて來た。祖師西來意とは、達磨大師が天竺から、遙々と支那へ來られたのは何う云ふ譯かと云ふことで、如何なるか是れ佛法的々の大意と云ふのも主意は同じ事であります。すると馬大師が、

『近前來』

近う參れ、此處へ來いと言はれた。此僧も何か有り難いことでも聞かして貰へるかと思つて、心中竊に喜び、ツカ〳〵ツと進んで行くと、馬大師が其僧の耳の邊から頬へかけてピシヤリ。深切なもの

であります。支那の俚諺に『六耳不同謀』と云ふことがある。之れは三人二腹と云ふ位のこと、十人十色と云ふも同意である。何んでも自分で決斷せねば不可ぬ。世の多くの人は、耳を尊んで眼を卑むる癖があるが善くない。人の言說に付いて廻はらずに、自ら一隻眼を具して、自分の眼で鑑識せねばならぬと云ふ程の教訓であります。斯う云ふ馬祖大師の機鋒をスツカリ呑み込んで居るから、此百丈禪師の大機大用は、實に美事なものであります。扨て雪竇は之れを頌して、

祖域交馳天馬駒、化門舒卷不同途、電光石火存機變、堪笑人來捋虎鬚。

（訓讀）祖域交馳す天馬駒、化門の舒卷途を同じうせず、電光石火機變を存す、笑ふに堪へたり人來つて虎鬚を捋づるを。

（講說）『祖域交馳す天馬駒』先づ天馬駒から說かうか、此天馬駒とは千里の名馬と云ふ程の意味であります、馬の種類にも種々あつて、或は騏といひ、或は騮と云ひ、或は又駿と云ふ。そして馬の二才なるを駒と云ふのであるが、天馬と云ふに就いては故事がある。『西域傳』に依れば、大宛國に高山あつて、其絕頂に天馬が居るが、如何しても捕獲することが能きぬ。乃で五色の母馬を連れて來て其山麓に放つて置くと、山頂の天馬が降りて來て、交尾して子を產んだのが汗血と云ふので、之れが卽ち天馬の種であるから、千里の駿足であることは勿論である。其天馬の子を指して天馬駒と謂つた

のであるが、爰でた馬祖大師を天馬に比し、其門下の汗血たる百丈禪師を駒に擬したのであります。扨て天馬の駒たる百丈禪師の交馳する樣子は、實に豪いもので、凡夫界を超絶して、法身域中に機略縱横の働きを爲して居る。祖域と云ふは、宗門の法戰場であります。或は祖域を馬祖の門域と解する一說があつて、馬祖の會下實に八十餘名の善知識俊傑を出して居るが、其中に於て、而かも能く天馬の如く交馳し、縱横無碍の活機あるは唯百丈禪師一人であると頌出したのであるとの說であります。何れの說にしても、主意は同一で、百丈禪師を稱讃し盡し、十分法界を縱横に駈け廻はる勢のある者は、馬祖門下中唯百丈禪師あるのみと須彌の頂上まで卓上したのであります。『化門の舒卷途を同じうせず』化門は建化門と云つて、建立門のことであります。建立門の反對が掃蕩門であるが、此二つは常に着いて廻るもので、決して離れるものではない、若し之れを建立門の方面から言へば、日月星辰森羅萬象、瓦一枚でも、木の葉一つでも、蚊一匹でも、蚤一匹でも、悉く大光明を放たしめると云ふ方であるから、衆生濟度の上には、是非とも此門戶を開いて、成佛得道せしめると云ふのである。然し掃蕩門の方面から言へば、日月星辰も光りを失ひ、森羅萬象も形を隱し、佛も無く道もなく、一切の建立を許さゞる境界である、舒卷は字の通り舒べたり卷いたりすることで、其化門に於て下化衆生の有樣は卷舒自由なものである。故に卷舒は言ひ換へると、興奪と同じく、又把住放行とも云ふ。卽ち百丈禪師の化導振りは、古人の途を迎るやうな間の拔けた行り方ではなくて、殺活自在、興奪縱横

の働きを示し、所謂世の碌々たる宗匠輩と其撰を異にして居ると、飽くまで百丈禪師を稱揚して居る。『電光石火機變を存す。』如何なるか是れ奇特事と問ふ僧に對して、獨坐大雄峰と答ふるや、僧禮拜す此時に於て電光石火ピカ〳〵と云ふ間の働きは、間髮を容れずと言はうか、實に驚いたもので、ピシヤリと其僧の頰邊を見舞はれた。其時百丈禪師の働きは電光石火の如く速かで、而かも何等の手跡を留めない、實に勝れたものであると嘆じたのであります。『笑ふに堪へたり、人の來つて虎鬚を捋づるを。』泣くのに悲しんで泣くのと、喜んで泣くのとある如く、笑ふにも輕侮した時の笑ひと稱讃した時の笑ひとがある。人の感情と云ふものは、兩極端に爲れば、同じ方法で表はれる、泣くのや、涙を流すのや、或は笑ふのは兩極端に於て同一である。固より百丈が彼の僧を打つたのも、賞棒であつて肯つて居るのであります。故に此僧は虎の如き百丈をも恐れずして、一問を提出した折は、恰も虎の鬚を捋でゝ居るやうなものであります。虎穴に入らざれば虎兒を得ずと云ふ諺があるが、彼の僧は此危險を犯して、虎穴に入つた勇氣や實に愛すべしであります。此勇氣を褒めて、笑ふに堪へたりと雪竇が頌出したのであるが、此處でも又百丈は、反面から卓上して居るのであります。故に此頌四句は徹尾頭徹百丈の機鋒峭峻なる所を讃美したのであります。祖域交馳す天馬の駒、化門の舒卷途を同じうせず、電光石火機變を存す、笑ふに堪へたり人來つて虎鬚を捋づるを。

第二十七則　雲門體露金風

垂示云、問一答十、擧一明三。見兎放鷹、因風吹火。不惜眉毛、則且置。只如入虎穴時如何、試擧看。

（訓讀）垂示に云く、一を問へば十を答へ、一を擧ぐれば三を明らむ。兎を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く。眉毛を惜まざることは、卽ち且く置く。只虎穴に入る時の如くんば如何、試に擧す看よ。

（講說）此垂示が、先づ四段に分けて見ることが能きます。『一を問へば十を答へ、一を擧ぐれば三を明らむ。』之れが第一段で、怜悧の學人に就いて說いたのであります。卽ち一を言へば十を知り、一隅を擧ぐれば、他の三隅を會得すると云ふやうな修行者は、普通の學人ではなくて、怜悧な者であります。山と云へば川、西と云へば東と直ぐ樣答へることの能きる修行者ならば、所謂頓機なもので、當時謂ふ所の天才であります。天才と云ふ者も、終極の成功を收むるとは限らぬ。『十で神童、十五で

才子、二十過ぐればただの人』と云ふ諺の有る位で。然し釋迦、基督など云ふ人を天才と云ふならば寧ろ天才と謂つて、普通の天才と區別した方が宜からうと思ふ。扨て禪門に於ける悟りの道ばかりはいくら天才でも、天才なら必ず得られるかと云ふに然うは行かぬ。古人も、

『道は、知にも屬せず、不知にも屬せず』

と云つて、實に大道は公平無私である。卽ち其學人の怜悧不怜悧よりも、寧ろ修行の深い淺いに關係する。平素骨を折つて修行してゐたものなら、何處かに違ふ所があつて、其力が自然と現はれて來るのであります。『兎を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く。』これが第二段で、師家が學人を接する時の活作略がある。兎と云ふ者は、獵犬などの及ばぬ早い足を有つて居て、脫兎の勢などとすら言はれて居ます。其兎を見付けた時は、獵犬では駄目であるから、早速鷹を放てば、鷹は直ちに彼れを捕獲する。又風に逆つて火を吹いたならば、火能く燃えざれども、風の方向を見て、其方向に隨つて火を吹けば、甚だ能く燃えるものであります。諺に『追風に帆を揚ぐ』と云ふことがあるが、之れが卽ち風に因つて火を吹くと同意に爲るのであります。順風に隨つて走れば、勞少くして功多い。之れが卽ち師家が學者を操縱する活作略であります。『眉毛を惜まざるは則ち且く置く。』これは第三段方便門に下つて、人の爲めにする所で、所謂下化衆生の樣子であります。凡そ上求菩提は、學者自からの爲めにする修行で、此修行成就すれば、自然爰に下化衆生の門開けて、身命を惜まず、衆生濟度の爲めに力

を盡すのであります。故に今の不惜眉毛とは不惜身命と同じことで、不惜眉毛、不惜手足で、瓦礫を變じて黄金と爲し、蚯蚓に光明を放たしむると云ふ働きは且く置く。『只虎穴に入る時の如くんば如何。』第四段危險を顧みず、師家の手中に投ずる一段で、虎穴に入らずんば、虎兒を得ずと云ふ語より出て居る。危險を冒さゞれば、實際金玉の寶は得られぬものである。今學人たる者も、其學問修行上に於ては、大勇猛心、大精進力、不惜身命の勇敢なる精神を起し、虎穴の如き危險場に飛び込む時は果して何うであらうと、本則を前に置ての垂示。『試に擧す看よ。』師家も不惜眉毛なれば、學人も不惜身命の一例ありと、此處に本則を揭出されたのであります。

擧僧問雲門、樹凋葉落時如何。雲門云、體露金風。

（訓讀）擧す僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。雲門云く、體露金風。

（講說）凡そ禪門に於ては、或は不立文字と云ひ、或は以心傳心と唱へて、禪の本領は、固より言葉ではかゝぐり當てることが能きぬ。然し或る程度までは言葉を借りねばならぬけれども言葉を用ふれば直ちに言葉を捉へやうとする。恰も月を示すに、月を見ずして指を見ると一般、故に禪門にては文字言句を用ひぬのであります。就中雲門宗は其說く所、不可解であつて、容易に其眞意を獲得することが能きぬ。嶮峻なる孤峯頂上に於て、鬱鬱たる森陰より翩翩たる錦の旗が、見えて居る樣な風で

とても其旗の何たるやも見定め難ければ、又壁立萬仞の孤峯、爪も立たねば寄り付きもならぬ。故に古來雲門の宗風を評して、『天子雲門』と云ひ、臨濟宗を『將軍臨濟』と云つて、各々其特徵の存する所を示して居ます。臨濟は實に百萬の兵を將ゐて戰列を正し、威容堂々駿馬に跨りし將軍が、大軍を其指麾の下に、進退起伏自由ならしむるやうな働き振りがあります。然し雲門は九重の奥に在りて、天下の主權を掌握し給ふ天子の如く、其表より之れを親ふも、更に分らぬやうな樣子である。故に本則の如きも、單に文字を以て、其表面より雲門の境界を明めやうとしても、其は不可能事に屬す。他の宗旨家ならば文字上より、或は其影位は認得することも能きやうけれど、雲門大師に於ては到底能きぬことであります。又禪宗に於ける術語として、合頭語と云ふことがあります。追々、餘り說明的に爲つて、提唱に似合はぬと評する者あらば、自由に評させて置く。素より提唱に形式の有る譯のものでなければ、古風を是非守らねばならぬと云ふこともない。依つて拙衲の提唱は、自ら拙衲の流儀で遣る只大雜派な言を云ふのを提唱とのみ心得てはならぬ。さて其合頭語と云ふは所謂死語と云はうか、宗旨家は大いに之れを嫌ふ。時に依つては合頭語を語弊があると云ふ位の意味で使ふこともあるが、禪宗特有の術語である。例へば、砂糖を甘しと云ひ、藥を苦がしと答ふるが如きは、所謂合頭語で、實に平凡かる死語として居る。故に古人も、

『一句合頭語は萬劫の繫盧橛』

など丶すら販黜して居る。『之れだけ豫備講義をして置けば、本則に入つても多少樂な所があつて、便利であらう。』『擧す僧雲門に問ふ。』一僧出で來つて、雲門禪師に問ひを呈しました。此僧も並の僧でありませぬ。時々は雲門の垂示をも受けて居たと見えて、其問ひも常規を逸して居ます。『樹凋み葉落つる時如何』一刀には切り兼ねるやうな問ひを持ち出した。『如何なるか是れ佛』『如何なるか是れ祖師西來意』『如來なるか是れ宗門第一事』と云ふやうな問ひならまだしもであるが、其問ひが既に難かしい、樹凋み葉落つる時如何、之れを文字上より見れば、合頭語の如く見えるが、實は意志外に在りで、合頭語ではありませぬ。所謂眼東南を眺めて、意西北に在りと云ふ樣子であります。斯う云ふ問ひを立てる位であるから、此僧も、雲門に參じて居つたに相違ない。左れば此問ひは、彼の十八問中辨主問と云ふに當るので、師家を勘辨しやうとして居る所の、意地の惡るい問ひ方であります。或は物に事寄せて問ふから、借事問とも云ふ。此辨主問、或は借事問でも、スリ上げた師家に爲れば、直ぐに問者の意を奪つて了ふことが能きる。故に問者に力のあるなしは、其問ひの上に現はれて居て、其現はれた力を自由にするのが師家の力であります。又如何に難問であつても、問ひは當に答所に在り、答へは既に問所にありと言つて居るから、一家をなした師匠に爲れば、何んでもないことであります。今此僧の勢は、雲門を取つて押し伏せてやらうと云ふ勢ひを示して居るが、雲門の眼から見れは、其問ひに思つた程の力が現はれて居ない。樹凋み葉落つる時とは、是れ卽ち借事で晩秋田園の景

色であります。桐一葉落ちて天下の秋を報ずれば、啣々くの蟲聲玉露の中に在りなど云ふ初秋はまだ好いが、落葉地に布きて萬木枯死せんとし、秋風蕭條として、もの寂しき時は何うぢやとの問ひであります。夏木立の時は、青々として、綠陰風涼しと喜ばれたのであるが、今や煩惱菩提の葉も落ち盡し生死涅槃の樹も凋み、さては見惑思想、煩惱障や所知障や、萬の木の葉散り布きて、拂ひはてたるうわの空、拂ひ拂うて拂ひ盡した脫落の境界は抑も如何と問うた。『雲門云く、體露金風』問ひが問ひであるから、答へも答へで、武藏野を秋風が颯々と吹いて居る言葉、是れ丈けで如何にも合頭語の如く見えるが、合頭語ではない。卽ち語句の上をスーツと見た丈けでは分らぬが、實に百錬千鍛を經た工夫の力が遺憾なく現はれて居る。一望千里、見渡す限り全體丸裸で、而かも尙ほ金風颯々の聲を聞く。いや〳〵之れを秋景色と答へたなど丶見て居ては、雲門下の飯は一杯も食はれぬ。故に鵲林翁白隱曰く、

『已れならば斯うは言はぬ。宇治は茶所、よい茶の出所、娘やりたや茶をつみに』

と言つてやらう。斯ういふ消息に爲れば、縱令博士でも學者でも、世俗の人には解らぬ所である。

問既有宗、答亦攸同、三句可辨、一鏃遼空、大野兮凉飈颯颯長天兮疎雨濛濛。君不見、少林久坐未歸客。靜依熊耳之一叢叢。

（訓讀）問既に宗あり、答も亦同じき攸、三句辨すべし、一鏃空に遼る、大野凉颯颯、長天疎雨濛濛、君見ずや少林久坐未歸の客、靜に熊耳の一叢叢に依る。

（講說）『問既に宗有り』と、先づ此質問に出かけた僧を讃嘆しました。此僧が、樹凋み葉落つる時如何と、借事的に、又檢主的に問ひかけて來たのは、既に雲門禪師の手中を見て居るからであつて尋常一樣の問ひではありませぬ。『問中立派に宗旨を具足して居る。『答も亦同じき攸』問ひも問ひなれば、答へも亦答へで決して合頭語などの答へでない。雲門は問者の心の底まで見ぬいて居るから、へマな答へはなさぬ。其時義經些しも騷がずと云つた樣子があり〳〵と見える。故に此雲門と問者たる僧と相對したる有樣は、丁度明かな鏡が、二面相對し、互に能く照し合つて居る樣だと言つて見たいものである。『三句辨す可し』今雲門禪師か、此僧の問ひに對して答へた所は、實に立派なもので、鐘に鐘木が輕く當つた樣なもので、ボーンと響いただけであるが、之れ果して雲門の三句中、何れに相當する所が、大いに辨じ究めなくてはならぬ。そして雲門の三句とは、一に『函蓋乾坤』の句と、二に『隨波逐浪』の句と、三に『截斷衆流』の句とで、今の所は、抑も、第一句か、第二句か、將た第三句であるか、それとも一句に三句を具足した二句であるか、能く辨別して見ねばならぬ。『函蓋乾坤』は、函と蓋とピタリ能く合ふ如く、師家と學者、或は煩惱と菩提、其他何んでもよいが、ペタツと能く合つた所を云ふ。『隨波逐浪』とは、或る時は人に據すること、恰も濱邊へ寄せては返へす小波

の如く、女波男波能く相應じ、能かも其間に、少しの亂れもないと云ふこと。『截斷衆流』は一切諸の流れで、悟りの流れも迷の流れも、佛流も、凡夫流も總て相對的一切の流類を截斷した境界であります。之れが雲門の三句であるが、今の如く、體露金風と、合頭語のやうで、而かも然うでないのがあるから、三句何れに當るかを辨別して見ねばならぬ。『一鏃空に遼る』雲門禪師が體露金風と放つた箭は方に何れに飛び去つたか、只空を遼つたと云ふことだけは分るけれど、門外漢には其落所が見えぬ。樹凋み葉落つる時如何、體露金風、鎭西八郎爲朝が、腕に寄りをかけて、剛弓を射放つたやうに、其の箭が何處まで飛んで行つたか目にも見えぬ、唯其風を切る唸りを聞くばかりである。『大野兮、凉颯颯々』之れは雲門の境界を雪竇の見識を以て頌しにもので、大野と云ふのは、日本の武藏野の如き大平原を云ふのであるが、日本のやうな國では、未だ眞實大野の味を知ることが能きぬ。卽ち支那の如き、阿弗利加の如き大陸に在つて、初めて大野渺茫たる所を見ることが能きる。見果も付かぬ大野には、凉颯颯々で、秋風が野末に吹き荒んでゐる、若し之れを日本的に云へば、眞葛が原に風騷ぐ位の所であるが、實は偉大なる雲門の境界を我が身に引き受けて述べたのである。『長天兮疎雨濛々』俯して大地を見れば、秋草地に靡きて颯々の聲を聞くが、今仰げば長天無際の所には、疎雨濛々、秋の雨がシト〳〵と除つて居る、之れを秋色蕭條と云ふが、靜寂なる意味も見える。之れ實に雪竇自己の宗旨を頌出したので、此處は前句と同じく雲門を讃じたのでなくて、雪竇自ら雲門に代つて答へて

居るので、雪竇已れならば、斯う答へてやらうと力を入れた。『君見ずや少林久坐未歸の客靜に熊耳の一叢々に依る』扨て雪竇は又此處へ證據人として、達磨大士を引合に出して來た。勿論達磨と言つて居らぬけれど、少林久坐と云ひ、熊耳と云ふので分る。少林は嵩山中に在る少林寺で、爰に於て達磨大士が九年の久しき間坐禪面壁して居られた。そして嗣法の二祖を得た後西天に歸へられたとの說があるが、實は歸られない。然し大士滅後熊耳山に葬つた所、隻履を遣して印度に歸へられたと云ふ奇蹟も傳には見えて居る。斯る高德になれば奇蹟もあるであらうが、入滅したのは、慥に支那である。然し歷史上の達磨其人は印度に歸へられたと云ふことを許しても、少林久坐の達磨は、永く支那に留まつて今日尙ほ未歸の客で、靜かに熊耳の一叢〳〵に依つて居る。扨て雪竇は何んの爲に達磨を引合に出して來たか、實に此二句は餘りに妙過ぎて分らぬ、全く唐人の寢言に類して居る。然し能く〻〻見れば、寒毛卓竪、身の毛もよ立つと古人が言つて居る。全く大野長天の餘裕であるが、古人は此二句の爲めには、大いに力を用ひて研鑽して居られる。先師洪川老師は、

『此七言二句、僧の問ひと、門の答へと丸出しだ。これは却々辯ぜられない。三句の外の境界だ、花も、紅葉も、野も、山も引きからげて、人天衆の前へ投げ出した。』

と評唱し、更に、

はら〳〵と落葉散り敷く夕暮に、降るる時雨の音をこそ聞け。

湘瀟の夜半に落葉を拾ひ來て、今朝の衣に雨をこそ聞け

と二首の和歌を添へて置かれました。恁く種々と說けば、說くだけ却つて遠ざかつて行くやうな氣がします。依つて之れ以上のことは、人々の力に任せます。篤と商量して見るが可からう。

第二十八則　涅槃不說底法

舉南泉參百丈涅槃和尙。丈問、從上諸聖、還有不爲人說底法麼、泉云有。丈云、作麼生是不爲人說底法。泉云、不是心不是拂、不是物。丈云、說了也。泉云。某甲只恁麼、和尙作麼生。丈云、我又不是大善知識、爭知有說不說。泉云、某甲不會。丈云、我太煞爲儞說了也。

（訓讀）舉す、南泉百丈の涅槃和尙に參ず。丈問ふ、從上の諸聖還つて人の爲に說かざる底の法有り麼、泉云く有り。丈云く、作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法、泉云く、不是心、不是拂、不是物。丈云く、說了也、泉云く、某甲は只恁麼、和尙作麼生。丈云く、我又是れ大善智識ならず、爭か說不說あることを知らんや。泉云く某甲不會、丈云く我太煞儞が爲に說き了れり。

（講說）本則も垂示を缺いて居ます。扨て本則に出て居る。百丈の涅槃和尙と云ふは恐らく百丈の惟政和尙のことであらうと、古人が調べて、史實を明かにして置かれました。只本則の宗旨を參考する上に就いては、涅槃和尙であらうが、惟政和尙であらうが、更に差閒無い話でありますが、斯う云ふ所まで調査考證して置かれた古人の親切を無にしては濟まぬ。何故惟政和尙としなくては事實が合はぬかと云ふに、南泉の普願禪師は馬祖下で百丈の惟政和尙も亦馬祖下であつた。南泉と惟政とは同じく馬大師の化を蒙つた兄弟であつて同時代であります。そして涅槃和尙は惟政和尙の次に、百丈に住した人である。故に今爰に涅槃和尙とあるは誤りで、惟政和尙とする方が正しい。然し此公案を以て自己修養の材とし、宗旨を研究する上に就いては何れでもよい。扨て此涅槃和尙と云ふ人は、常に『涅槃經』ばかり讀誦して居たので、時人は其本名を呼ばず、涅槃和尙と呼び習はしたといふ。卽ち大智禪師の高弟であつた。抑も我が大法は、說の時默にして、默の時說である。嘗に說と云ふは不可。語默動靜體安然と云ふ境界に進まねばならぬが、此境界に於ては、說の時は默で、默の時は說で、說にも眞意を現はせば、默にも亦眞意を現はすことが能きる。說けば語に捉えられ、默すれば又默に囚はれるやうでは、語も不可、默も不可。月は指頭にあらずして、高穹に在り、眞理は語默の形式上に在らずして、而かも形式を持つて現はれるのであります。今本則に入つて。古人の辨道の迹を尋ぬるに就いても、亦其形式に囚はれぬやうに注意し實地に修行して居る人の心底まで洞察せねばならぬ。自ら骨を折つた力なくして、文字句言上より、直ちに得んとするも开は不可得である。『擧す南泉百丈の涅槃和尙に參ず』南泉は普願禪師で、涅槃和尙は惟政禪師の誤りであること序辯の如くでありま

す。一日南泉は法弟の惟政禪師を勘檢しやうと思つて出かけた。百丈の惟政も同穴の狐だけあつた、南泉の面を見るより早く問ひを呈しました。『丈云く、從上の諸聖還て人の爲に說かざる底の法有りや。』白隱和尙を此問を評して、

『獅子の乳の如く、象王の鼻の如く、揚由基の箭の如し。』

と言はれた。從上の諸聖、三世三千の諸佛を初めとして、天竺震旦の諸祖に至るまで、人の爲めに說かざる底の法問がありませうか。鎭西八郎爲朝の射放つた白羽の箭のやうなものであります。宗旨は此第一句で旣に十分であります。第二、第三句は、此矢の唸り聲であります。旣に釋迦は五千餘卷と云ふ廣大なる說經を貯して居るでないか。四七、二三の祖師方も、千七百則と云ふ公案を示して居るでないか。之れを委しく言へば、溪聲是廣長舌で、天地に說法は充ち滿ちて居る。然るに從上の諸聖、人の爲めに說かぬ法があるかと問ひかけた樣子は、淮南王の百二十斤の鐵鎚を眞向に振り翳したやうなもので、狼毒を有つてゐる。然し從上の諸聖に於ても亦不說の法を示して居る。例へば釋迦の如きは、五十年の其間、說き詰めに說いて置きながら『楞伽經』や『大般若經』には四十九年間未だ曾て一字を說かずと、自ら證明されて居る。然し不說の法を說かうと思つて、舌の上に移せば、又不可。されば云つて殊更に默するも不可。サア宗旨は斯ういふ所に在るのぢや。今百丈が、從上の諸聖人の爲めに說かざる底の法ありやと問起した所に於て、亦語か默かを調ぶべく着眼することを要す。圓悟も評唱の中に、

『山僧ならば、耳を掩うて出でば、這の老漢の一場の慚懼を看ん』

と言はれたが、之れも一見識であるが、南泉もフテ〳〵しく殊更に有りと答へた、『泉云く有り』此答へは素人ならば、餘り合頭に過ぎて居て不可ぬけれど、今南泉の胸中には、百萬の軍馬を貯へて居ての答へで、而かも機に應じて直ちに現はれ來つた答へであるから至極可い。强いて形に依つたのでもなく、又期待して居た答へではない。爰に於てか百丈重ねて問ふ。『丈云く、作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法』然らば其人の爲めに說かざる底の法とは如何なる法であるか、どうぞお示し下さい。『泉云く、不是心、不是佛、不是物』恁く一切を否定するのが、卽ち不說法底だと言ふ者があるが、さう云ふ曲解邪解をしてゐては、宗旨は見られぬ。尤も此不是心不是佛不是物と云ふ語は馬祖大師が用ひられた語で、殆んど馬大師の常套語と爲つてゐた。卽ち人來つて『如何なるか是れ佛』と尋ねると『卽心卽佛』と答へるに極まつて居た。乃で或る時僧出で來つて、馬大師に問ふて云く、

『和尙は如何なるか佛と問へば、必ず卽心卽佛の一本槍で答へられるには、何か譯のあることでありますか。』

其中堅を衝いて見ると、馬大師答へて云く、

『小兒の泣くを止めんが爲なり。』

小兒の泣くを止め得たる時如何。

『非心非佛』宗旨の扱ひが斯くの如くなければ、本物では無い。丁度錦旗を飜す如く、表裏同じく花模樣で、表裏を辨じ難い。爰に於てか此僧、

『二種に屬せざる人來る時如何』

と反問すれば、

『彼に向つては不是物と道はん』

『然らば、其中の一を會せる者、來らば如何』

『彼をして大道を體得せしめむ』

馬大師の說法振りは方に斯くの如くであつた。今南泉は、馬大師の一手販賣を受賣りして居るが、唯の受賣りではない。依つて馬大師の說法振りをも思ひ合せて、本則を調べるのは有益のことである。さて今南泉和尙が、馬祖禪師專賣の、不是心、不是佛、不是物と言つて、不說法底の說法としたが、果して是れが說法であるか不說法であるか調べて見るがよい。夫れにしても、能く切つて放つたものだ、此前面に立たれるかどうぢや。『丈云く說了也』百丈は、不說法底を說法したと讃嘆して居る、知音同志の出會である。但し宗旨に主賓の感がある、臨濟禪師の商量にも能く斯ういふのがある。『泉云く、某甲は只恁麼、和尙作麼生』南泉爰に於ては、百尺竿頭一步を進めて、拙衲なら斯う云ふが、和

尙貴方なら、何んとなさいます。一度は收め、一度は放つ、把住放行、與奪自在、恰も、盤上玉を轉がすやうである。『丈云く、我又是れ大善知識にあらず、爭てか說不說であることを知らんや』我れは然る大善知識では無い。何うして、說法底不說法底の法を知らう。之れは一寸トボケたやうな貌であるけれど、そんなことではない。そんなケチ臭いことは知らぬわいと、嚴しく跳ね付けたのであります。『泉云く、某甲不會』解せないことを仰有る、貴方にこそ、不說法底の法がありませう。何れ劣らぬ手取の名人、無暗に組ませはせぬ。『丈云く、我太煞儞が爲に說き了れり』百丈も遂に手嚴しいシツペ反しを打つた。拙衲はお主の爲に說き過ぎたわいと、先きには南泉を讃じて說了也と云ひ、今又說了也と云つて、一步先きに在らんとする雪上霜を加ふと評すべきか、流石の百丈見上げたものだ。南泉百丈の商量は之れで終を告げた。然し此言句に着き廻はれば、直ちに說法底に墮す、注意して眞參すべきであります。

祖佛從來不爲人、衲僧古今競頭走。明鏡當臺列像殊、一一面南看北斗。斗柄垂、無處討、拈得鼻孔失却口。

（訓讀）祖佛從來人の爲にせず、衲僧古今頭を競うて走る。明鏡臺に當つて列像殊なり、一一南に面して北斗を看る。斗柄垂る、討ぬるに處無し、鼻孔を拈得して口を失却す。

（講說）『祖佛從來人の爲にせず、』此第一句中に、南泉、百丈の商量を頌出し、殊に從上の諸聖還つて人の爲に說かざる底の法有りやと問ふた問ひ、既に恐ろしいのに南泉が又有りと答へたフテ〳〵しい此味を歌ひ出したのであります。佛祖從來人の爲めにせず、本來凡聖能所なしで、能化の佛祖もなければ所化の學者もない。故に釋迦は最初鹿野苑の會座より、最後跋提河の『涅槃經』の會座まで前後四十九年間、橫說縱說しながら、而かも四十九年間未だ曾つて一字を說かずと云つて居られる。達磨態々西來しながら、少林に默坐して來意を語らない。故に無行禪師は、

『諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふる無し』

と言はれた。祖佛從來、人の爲めに說きはせぬ。『衲僧今古頭を競うて走る』恁く祖佛從來、人の爲めに說かぬのに、天下の修行者たる者は、古も今も同じことで、狼狽へ廻はつて佛を求め、法を求めやうとし、古人の說を聞かうと耳を澄ます。古則公案は千七百もあるから、之れを一々明めねばならぬと言つて、公案の研究を初めるが、扨て公案を離れた平生の身の上は如何、盲龜水に漂ふ如く、猿が木から落ちたやうな態ではないか。然らばと云つて坐禪をしても正念工夫の眞境に入らばこそ、邪念妄想紛起するか、さては枯木の死禪に墮して了ふ。默照禪默目、看話禪默目、口耳禪默目、總て其形式や言句に附いて廻はるやうでは、幾ら焦つても飛んで火に入る夏の蟲たるを免れない。『明鏡臺に當つて列像殊なり』明鏡臺の文字は神秀大師の、

『身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃』

と云ふ一偈より出て居る。明鏡、臺に在れば、胡來れば胡を寫し、漢來れば漢を寫し、室內に在りては室內のものを、室外に在りては室外のものを映出する。而かも萬境を能く寫して些の痕を留めないのが明鏡の德である。卽ち明鏡には平等の德があるから、一切森羅の萬象を映出して差別を現じ、而かも其差別に執着せず、萬象の本體去れば鏡面は依然として明皎々として居る。今南泉、百丈の二師は、恰も此の明鏡の如きものであつて、祖佛從來人の爲めにせざることを、十分徹見し拔いて居りながら、云くありだとか、云く、不是心、不是佛、不是物だとか、相互に自在交通の働きをして居る。之れを賓主互換と云ふ、卽ち主人と客人とが互に代り合ふことが能きて、主客一體と爲ることを得るのである。主客一體でありながら、主人は主人、客人は客人と其列像を異にして居る。斯く南泉、百丈の二人相寄つて、宗旨を現はして居る樣子を、今明鏡臺に當つて、列像殊なりと圖じたのであります。『一々南に面して北斗を見る』北斗は北斗七星で、北方の天に當つて現はるゝ星で、旅行者は此星に依つて方角を定める。前の句の明鏡と同じく、北斗と言つても星には用はないぞ。北に向つて北斗を見るなら、世間普通なこと、今南に向つて北斗星を見ると云ふのぢや、こりや何うしたもの。人の爲めにせざる法だとか、不說法底の法だとか、ゴテゴテ言ふに及ばぬ。長崎の方へ向いて北海道が見えればよい。白隱禪師は煙管の雁首から、江戸八百八町を見よと言はれたのと同じこと、斯う云ふこ

とは、宗旨を明めて居れば何んでもない、朝飯前のお茶の子である。『斗柄垂る、訪ぬるに處無し』前句を承けて直ちに斗柄と云ふ、之れは北斗七星中、第五星の名であるが、星の名であらうと、何んであらうと、そんな事に用はない。夜は明け白らんだが斗柄星は山の端にかゝるぞ、いや鼻の先きへブラ下つたぞ。星とさえ言へば直ちに空を見上げる、空ではない、脚根下を見よ。斗柄は脚下に在りぢや。マゴ〳〵して居れば、夜は明け離れ、東天曙光輝けば、斗柄も何にも見ることは能きぬ。尋ね所は無いぞ。南泉百丈二師の働きは東雲の斗柄の比にあらずぢや、忽然として其蹤跡を沒し、尋ぬる處なき有様である。『鼻孔を拈得して口を失却す』鼻を押し立てやうとすれば口が無くなる、口で言はうとすれば鼻を失ふ。文字言句に依つて當てやうとするも駄目、さればと言つて、只默しても不可ぬ。說と云ふも不可、不說と云ふも不可、說と云ふも、不說と云ふも、共に片方ぎりに偏して居る。斯う云ふやうに、一得一失では、宗旨は得られぬと古人が見られた。文字上の說明はこれ位であるがさて之れが實際問題で、私が口にかけた說を賴りとすれば、直ちに鼻孔を拈得し、還つて口を失却すと罵られて了ふ。

垂示云、魚行水濁、鳥飛毛落、明辨主賓、洞分緇素。直似當臺明鏡、掌內明珠。漢現胡來、聲彰色顯。且道爲什麼如此、試擧看。

（訓讀）垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ、明に主賓を辨じ、洞に緇素を分つ。直に當臺の明鏡、掌內の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る。且く道へ、什麼としてか此の如くなる、試に擧す看よ。

（講說）此則を講ずる時、印度の居士ダンマパーラ氏が、法席に列せられました故、同氏を紹介し且つ前辯として一言申して置きたい。ダンマパーラ、譯して護法と云ふ。此護法居士は印度の或る富豪の家に生れた方であるが、深く佛敎を信じ、且つ佛敎外護の任に當りたいと云ふ本願を以て、其家を弟君に讓り、自ら殆んど出家同樣の生活を爲し、吾國へも前後四回程來朝し、日本佛敎の狀況を觀察されました、今回は布哇に於ける、或る阿米利加婦人の篤志家の招聘に應じて參られた歸途、吾國に立ち寄られたので、先日來諸方で講話をしたり、所感を述だたりして居られます。衲も入竺して

第二十九則　大隋刼火洞然

以來懇意にして居りますが。丁度只今訪問を受けましたから、此法席へも列つて貰ひました。尤も新聞紙等では、同氏を誤つて、何んだか山師的の人物のやうに傳へた向きも有るさうですが、決して然う云ふ人では無くて、至極眞面目な人物で佛敎の爲めに、實際外護の役をして居られます。例へば佛陀の聖跡佛陀迦耶が異敎徒の手に歸して、佛敎者が此地に參拜しやうと思つても、參拜することも能きねば、供養しやうと思つても、供養することさへ能きぬ。佛敎の外護者を以て任ずる同氏は、是れを以て佛敎の恥辱とし、第一此聖地を佛敎者の手に取り戻し、十分供養も能き、參拜も能きるやうにしたいと思ひ立ち、此事を英國政府まで出願し、運動されたけれど、遺憾ながら、此目的は達せられませぬ。不幸此事は目的を達せられなかつたけれど、其考への眞摯なことは感ずるに餘りあります。由來吾國の佛敎信者は、印度に對する考へが疎遠であります。印度は我が佛敎の母國で、爰には大聖釋迦如來が降誕遊ばすや、其他祖師方もあれば、又聖跡も多いのであります。故に外敎徒がゼルサレムを思ふ如く、佛敎徒が佛陀迦耶などを思つたならば、佛陀迦耶の聖地が、外敎徒の手に在ると聞いては、默過することが能きぬ筈であります。今日でこそ印度は英領であるけれど、日本の佛敎徒が、印度を思ふこと深くして、眞摯に研究もし、聖跡巡拜などを企てたなら、定めし、歷史的に、宗敎的に且つ美術的に、大いに發見する所があるであらうと思ふ。尤も現今日印協會などの設立はあるけれど、實際的事業は少しも擧げられて居らぬやうに思ふ。尙ほ是等の問題に就いては、卑見も無いでは

ないが、今は然う云ふことを陳べる場合ではない。只護法居士を紹介するに止めて置く。さて『垂示に云く魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。』此垂示は、師家たる者が、學者修行者を勘察する樣子を示したので、修行者は、如何に其心中の醜態を隱さうとしても、物言へば其言葉に顯はれ、行けば其動作に顯はれ、何んとしても明眼の師家に見透かされて了ふ。魚が水中を泳いで過ぎ去れば、水が濁るから、魚の居ることを知られ、鳥が空中を飛べば、羽毛を舞はせるから、直ぐに鳥の飛び去つたことを察知される、內に臭氣を收めて居れば、何時の間にか外面に向つて漏らして了ふ。故に未悟の者はいくら悟つたらしいことを言つても、自動車の通り過ぎた跡のやうに、砂塵を立て臭氣を殘す、已むを得ぬことだ。『明かに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ。』既に修行者が、靈龜尾を曳く底の所作を爲す故に、自然と主賓明かに辨別され、緇素洞然として分れたのである。此主賓に就いても、臨濟禪師は四賓主を分別して、主中の主、賓中の主、主中の賓、賓中の賓と立てられました。卽ち賓主互換的に働くのであります。今は緇素と對句にしたゞけで、眞僞曲直、善惡邪正と同じ位のことと思つてよい卽ち眞實の悟りでないから、相對的臭氣を紛々として放つのであります。いや早や何んとしても、其醜體を穩すことは能きぬ。『直ちに當臺の明鏡、掌內の明珠に似たり、漢現じ胡來り、聲に彰れ、色に顯る。』先づ其心的作用の明かに見え透く樣子を、鏡臺上に在る明鏡の萬境を寫す如く、又掌中に在る明珠に、萬象を映ずるに似て居る。卽ち明鏡明珠は、本來明皎々たる體を有して居るから、漢現

じ胡來たるである。漢現じ胡來たる、漢來り漢現じ、胡來り胡現ずの影略互顯である。漢人來れば漢人現じ、胡人來れば胡人現ずる。之れは敢て漢胡に限つたことではない。山でも川でも、美人でも醜婦でも何んでもよい。エヘンと云つた咳拂ひでも分れば、眉を動かし口を開く顏付でも分る。之れは全く心と心との照合であるから、其心の働き出した言語行爲の上で、悉く見極められるもので、而かも之れは師家たる者の心中に能く映ずるのであります。併し斯う云ふことは、一般世俗日常の上にもあることで、假令初見の人でも、其應對の間に於て、先方の言語動作、起居進退の上で、直ちに其心の底まで讀み盡して了ふことが能きる。『且く道へ什麼としてか此の如くなる、試に擧す看よ。』然らば其師家たる者は、如何にして、斯くの如く、修行者を勘檢する眼を有し、修行者は師家に勘察されるのであるが、先づ『大隋劫火洞然』の公案に就いて看るがよろしい。

擧、僧問二大隋一、劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞、不壞。隋云、壞。僧云、恁麼則隨他去也。隋云隨他去。

（訓讀）擧す僧大隋に問ふ、却火洞然大千俱に壞す、未審這箇壞か、不壞か。隋云く、壞。僧云く、恁麼ならば卽ち他に隨つて去るや、隋云く、他に隨つて去る。

（講說）『大隋劫火洞然』の一則、大隋は益州の法眞禪師のことで、初め藥山禪師に參じ、次に道吾

洞山に參じ、後に溈山の法を嗣いだ。其傳中には後學を激勵することが多いが、今は一々陳べて居られぬ。其一端を示せば、常に食腹に充つるなく、座臥暖を求めず、淸苦練行、以て修行して居つたと云ふやうなこともあります。『擧す僧大隋に問ふ、劫火洞然として大千俱に壞す、須彌巨海磨滅して餘なく、梵釋天龍諸々の有情も尙ほ皆殄滅す、何か。』或る僧が大隋の法眞禪師の前へ出で質問しました。卽ち『仁王經』の中に

『劫火洞然として大千俱に壞す、須彌巨海磨滅して餘なく、梵釋天龍諸々の有情も尙ほ皆殄滅す、何んぞ況んや此の身をや。』

と云ふ偈文があります。『仁王經』とは具に『仁王護國般若波羅密經』と云ひ、此偈文は、其護國品第五に出て居ます。此偈文を讀んだ今の僧忽ち不審を懷いて、大隋禪師に問ひを呈したのであります。さて之れを辯ずるには、敎相的說明を加へなくては分らぬ。故に文中の劫火と大千とを說明して後に辯じやうと思ふ。先づ大千とは、大千世界の略で、大千世界は中千世界、小千世界に對して居て、これを總稱して三千大千世界と云ひ、略して三千世界とも云ふ。全宇宙は、此三千大千世界に盡きて居ます。故に三千世界に唯一人など云ふ言葉が、近松などの文學の上に能く使はれて居ます、卽ち『長阿含經』等に說いてある天文說に依れば、日月を中心として、組織されて居る所のものを一世界と名づけ、此一世界を千倍したものを小世界と云ひ、此小世界を千倍したものを中千世と云ひ、此中千世界を、更に千倍したものを大千世界と云ひ、これを總稱して三千大千世界と云ふのであります。現

時西洋より傳はつた學說でも、一太陽系ばかりでなくて、尙ほ此他に太陽系が澤山あると云ふが、古く印度に行はれたやうな大なる說は聞かぬ。又『長阿含經』に說く一世界と云ふのを、一太陽系に屬する諸星を合した世界と見て差閒はない。次に劫火のことを說明するに當り、最初に劫と云ふことから說くを順序とする。劫は劫波と云ふ梵語を略したので、譯して分別時節と云ふ、卽ち長時のことであります。此劫にも大中小の別があつて、人壽八萬四千歲の時より、百年目に人壽一年づゝ減じて、人壽百歲に至り、夫れより又百年目に人壽一年づゝ增して人壽八萬四千歲に復る一減一增の閒を一小劫と云ふのであります。さて其一增減の二十倍したる二十增減の閒を一中劫と云ひ、更に四倍した八十增減の閒を大劫と云ふのであるが、何んと驚くべき長時閒ではないか、洵に吾々の思慮を絕し、算數を越えて居る。扨て其八十增減の中に世界の成住壞空の四期があつて各々二十增減、卽ち中劫時を要する故に、成劫、住劫、壞劫、空劫とも云ふ。成劫とは世界の成立し、出來上る閒を云ひ、之れに二十增減時を要するのであります。世界が旣に成立すれば、其儘止住して頓に變化せざること二十增減時、之れを住劫と云ふ。住劫の時代過ぎれば、世界破壞し、三災等のこと起りて、二十增減時の閒に全く破滅して了ふ。次に世界が空無に歸して居る閒が二十增減、此成住壞劫八十增減の閒が大劫で一大劫が過ぎれば、又世界の成住壞空と云ふことがあつて、際限もなく同じことが繰り返されるのであります。そして其壞劫の中に於て、火水風の三災あつて、火災の爲めに世界は燒盡して、灰燼となり、水災、風災に依つて世界は全く壞滅するのであります。此火災を稱して劫火と云ひ、其火災中風災起つて、猛燄を吹き、梵天まで悉く燒盡する樣物凄く、三千大千世界も依正俱に壞滅して了ふ。斯う云ふ天文說は『俱舍論』の世閒品等にも說いてあるが、敢て釋迦如來の發見說ではなくて、印度一般の通說であります。

『僧大隋に問ふ劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。』劫火洞然として、三千大千世界の燒盡すると云ふことを聞いた一僧、扨て心配をし出しました。三千大千世界依正俱に壞するならば、這箇は壞しますか、壞しませぬか。然らば其這箇と指したは何んぞ心か、靈か、そんな當て推量しても不可ぬ。眞如だの佛性だのと云つて、不可ぬ。涅槃常住だの、靈魂不滅だのと云ふことに囚はれて居る者は、劫火洞然大千俱に壞すなど言はれると惑ひ出すので、此僧も其一人であります。然し今這箇と指したは何んぞと靜かに調べて見ることも此公案では大切なことであります。『隋云く壞』此僧劫火を借り來つて閒うて這箇は壞するか壞せぬかと言ふけれど、魚行いて水濁る如く、旣に濁して居る所があります。大隋は其濁水を認めて居る故に、今壞すと答へた、此僧定めて驚いたであらう。此僧は常見に墮して居るから、不壞を豫想して、而かも壞か不壞かを問ふた。然るに大隋は明かに壞すと答へた。壞すと云ふことを無くなることゝ思へば大閒違ひ、それでは又斷見に墮して了ふ。常見も眞にあらず、斷見も亦眞實でない。學閒や理窟を委しく知つて居ても、斯う云ふ閒題に爲れば、更

に動かない。然し大隋は此僧の肚の底まで見抜いて居るから壞すと答へて、此僧の問ひを活現しやうとして居る。『僧云く恁麼ならば則ち他に隨つて去るや。』イヤハヤ此僧は、益々惡水を掻き濁すばかりで、其臭氣は衣を襲ふて來る、然らば心も世界の壞すると共に壞し去りますか、何處に向つて去りますか、これが又第二の躓であつて、如何に學者でも、眞實修行をして居らねば見えぬ所であります。扨て今と反對の例が、圜悟の評唱に出て居る。『僧あり、修山主に問ふ劫火洞然として大千俱に壞す、未密這箇壞か不壞か。主云く不壞。僧云く什麼として か不壞。主云く大千と同じきが爲めなり。』『隋云く他に隨つ去る。』其通り、心は萬物と俱に生ずる故、又萬物と俱に壞し去る。然し此僧、未だ大隋の眞意を會すること能はず、爰に於てか、更に同問を提げて、舒州の投子禪師の許に往つた。投子時に、貴公は近頃何處に居て修行したと問ひ、僧は西蜀の大隋の許に居りましたと答へた。然らば大隋は何んと言ひしぞと重ねて問はれた時、此僧前話を擧げて、自己の不會なるをいひ、三拜教を請ふた時に投子香を炷き禮拜して云ふ樣には。

『西蜀に古佛ありて出世す、汝速に回れ。』

と、其僧爰に於てか、復回つて大隋に至つた。然し其時は既に大隋禪師は遷化して居られた、此僧も殘念に思つたであらう。只此僧が大隋の意を會せず、投子の意をも亦了せざる樣子のあるは、不便に思ふけれど、道を求めて修行することの眞面目なのは、同情を以て、賞讃するに値ひする、後に唐の

僧景遵と不ふ者あつて、大隋に題して偈を作り。

『了然無別法、誰道印南能、一句隨他語、千山走衲僧、蟄寒鳴砌葉、鬼夜禮龕燈、吟罷孤窻外、徘徊恨不勝』

と。雪竇も此偈の兩句を用ひて、頌を作りました。

劫火光中立問端、衲僧猶滯兩重關、可憐一句隨他語、萬里區區獨往還。

（訓讀）劫火光中問端を立す、衲僧猶ほ兩重の關に滯る、憐む可し一句他に隨ふの語、萬里區區として獨往還す。

（講說）『劫火光中問端を立す』成住壞空の四相は、八十增減の一大劫間に於ける世界の四相ばかりでなく、之れを短縮しては、卽今目前一刹那の上にも亦此四相あつて、生滅し、前滅後生、前滅後生と無限に相續するのであります。故に吾々は朝夕劫火光中に在るのであるが、今の劫火光中を斯う云ふ風に理窟的に解釋しては、面白味も薄らぐやうな心地がある。然し吾々は現に劫火猛燄熾盛の裡に立つて。壞すの壞せぬのと迷惑して居る、看よ今蒲團上に打坐してゐる時、又三災面前に起つて、頭から火の粉が降つてゐるぞ、去りながら、此僧は劫火光中に立つて、問ひを立て、壞か不壞かと問ふ。『衲僧猶ほ兩重の關に滯る』此修行者は、足の下から、毒龍が紅蓮の舌を吐くやうな火焰が燃え立

つて居るのに壞か不壞かなどゝ二又かけての問ひを爲すやうでは、地獄は一定である。若し證得底の人ならば、假令壞と云ふも、不壞と云ふも、一向驚くに當らぬのに『憐む可し一句他に隨ふの語』壞と言はれたので、心配は消えぬ。氣の毒と云はうか、殊勝と云はうか、可愛想と云はうか、兩重の關に滯つて、出身の道なく、西や東と其出場を求めて居る樣子は、氣の毒千萬である。『萬里區々として獨り往還す』彼方へ行き此方へ行き、投子の許に往つたり、大隋の許に還つたりして、出身の道を求めて居るのは、殊勝と云へば殊勝である。即ち「隨他去」の三字は、堂々たる衲僧を動かして、萬里を遠しとせず、尋ね回らせたのである。憐むべし一句他に隨ふの語萬里區々として獨り往還す。

第三十則　趙州大蘿蔔

舉、僧問趙州、承聞和尚親見南泉、是否。州云、鎭州出大蘿蔔頭。

（訓讀）舉す、僧趙州に問ふ、承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや否や。州云く、鎭州は大蘿蔔頭を出す。

（講說）本則も垂示を缺いて居ます。即ち本則は一僧出で來つて問ひを呈し、趙州之れに對して大蘿蔔頭を以て答へた。其問ひたるや所謂十八問中の驗主問であるが、趙州老漢の如き大宗匠に爲つては、驗主問も何にも用を爲さぬ。固より趙州は齡八十まで行脚を續け、眞實修行を卒へて居るから、七縱八橫自由自在なものであります。趙州は臨濟の如く嚴めしき喝をも用ひぬ、又德山の如く恐しき棒をも揮はぬ。然し其棒喝を用ひない所に於て、棒喝よりも恐ろしい所があります。世間の者は禪宗と云へば、棒喝でも用ひねばならぬやうに心得て居るが誤りも甚だしい。禪宗と云ふものは元來そんな造り付けのものではない、實に圓融自在、足に蹈み手に觸るゝ所のもの、悉く禪三昧と一致して、禪三昧に爲り切つて了ふ所に在る。若し此究竟地に到達せざれば、縱令悟つたと云ふも未だ悟り臭い

所がある。味噌の味噌臭きに上味噌にあらずと云ふ俚諺があるが、悟りも悟り臭い悟りは眞の悟りではない。今此趙州の如きは其悟りが立派なもので、悟り臭い臭味などは兎の毛の先程もない。古人の中でも、趙州老漢と云へば又勝れた方として尊崇されて居ます。禪門に來つて修行した者なら、未だ青い小僧でも天地と我れと一體、萬物と我れと同根だなどゝ言ふけれど、天地と眞實一體と爲り得る者は尠い。又萬物と同根に爲り得る時、初めて禪を悟り得たのであるが、言ふことは易くして悟ることは至難であります。今趙州は、其身全く天地と一體に爲り切つて居る故、又大根とも一致し茄子とも一致することが能きるので、本則でも果然大蘿蔔頭と爲つて了つた。斯ういふことは東西洋を隔て居ても同じことゝ見える。彼のカーライルと云ふ文豪は、

今隻手を擧げて、熱と光りとを放散する太陽を掴むと云はゞ、世人必ず驚愕の眼を注いて視るであらうが、紙上にペンを走らせて、スラ〳〵書くことに驚く者は無いが、實際に於ては此紙上に書き現はされた文字上に大なる神秘があるのであるが、世人は之れに氣付かない』

と言つて居ます。丁度白隱禪師の、千里も遠方に在る燈火を吹き消せとか、富士山を燈心で縛つて持つて來いとか、或は川向ふの喧嘩を止めよとか云ふのは同じ趣きであります。禪宗でも畢竟此事を明め盡せば、其他尋常のことは朝飯前のお茶の子であります。故に西洋の學者哲學者でも、其卓絶なる者は、到れる所までは到つて居ると謂はれる。然し今趙州老漢の云ふ如く、世界中唯大根一本にして

了ひ、而かも日用上に着々として之れを現實にし、大根と我れと不二一體の妙境に到ることは難かしいことであります。

『擧す、僧趙州に問ふ、承り聞く和尙親しく、南泉に見ゆと、是なりや否や』趙州に固より南泉の普願禪師の弟子で而かも嫡嗣であることは天下に隱れも無い事で、誰れ知らぬ者も無い。又凡そ趙州老漢を崇仰して、其門下に加はりて修行をする程の者ならば、況して趙州が南泉に見えた位の事は、百も承知で、知らないと云ふ道理が無い筈である。それを今此僧が、勿體らしく、承り聞く、和尙親しく南泉に見ゆと是なりや否やと問ふ。之れ必定胸に一物あつての問ひである。若し見ゆと言はゞ三十棒、見えずと言はゞ三十棒、何れ逃がしはせぬとの氣配が見える。然し趙州は海に千年、山に千年修行を重ねた老漢だけあつて斯る問ひに囚はれはせぬ。『州云く、鎭州に大蘿蔔頭を出す』蘿蔔とは先づ我が國の大根のことであるが、鎭州は此大根の產地である。日本でも、尾張の國から宮茂大根が出るし、東京近在では練馬村から練馬大根が出る。又此答は敢て大根に限つたことはない。蕪でも茄子でも何んでもよいのであるが、今趙州は代表的に大根を持ち出したのであります。和尙貴僧は南泉に參じましたが如何で御座いますかとの問ひに對して、ハイ鐘州は大根の名所、立派な大根が出ますと答へたは、南に向つて北斗星を見ると云つたやうな鹽梅、之れは何うしたことであらう。斯う云ふ所に爲れば、敎相的說明や、哲學的解釋は付かぬ。若し强いて付ければ趙州老漢を殺すも同樣、天下の

大宗匠を殺しては濟まぬ。修行者にしても、一歩を誤まれば直ちに越州を殺して了ふ、注意すべきことである。故に斯う云ふ所は、室内に在つて篤と調べるがよろしい。然し參考として其類則を尋ぬれば、評中にも一例を擧げてある。僧あり出で來つて九峯和尚に問ふ。

『承り聞く、和尚親しく延壽に見え來ると、是なりや否や』

と、問ひの形は全く同じであります。峯云く、

『山前麥熟すや也た未だしや』

鎭州大蘿蔔と同一般でないか。向ふの畑の麥が實つたか何うぢやとの答。時に僧問ふ。

『九峯山下、還つて佛法有りや也た無きや』

峯云く、

『有り』

僧問ふ、

『如何なるか是れ九峯山下の佛法』

峯云く、

『石頭大底は大、小底は小』

大きな石は、大きいなりにゴロ〳〵して居る、小さな石は、小さいなりにゴロ〳〵して居る、之れ

が卽ち九峯山下の佛法であります。益々〳〵迷路に引き込まれるやうに感ずる。斯う云ふことは論理的に解決を付けやうと思つても、議論を盡し去つて、既に論理界より一頭地を拔いて居る。又日本俳道の祖ともいふべき芭蕉翁は、最初佛頂禪師に就いて禪要を受けられた。或る時、佛頂和尚が、芭蕉を訪ふて云く、

『如何なるか是れ閑庭草木裏の佛法』

と、芭蕉答へて云く、

「葉々大底は大、小底は小」

と、前の九峯和尚の、石頭大底は大、小底は小といふに同じであります。佛頂云く、

『今日何んのことがある』

芭蕉云く、

『雨過ぎて青苔濕ふ』

と、佛頂云く、

『青苔未だ生せず、春雨未だ來らざる時如何』

と、芭蕉云く、

『蛙飛び込む水の音』

併しこれでは未だ俳句に爲つて居らぬ。其處で芭蕉は、其頭上五文字を付けよ、門弟どもに命じました。門人其角等が種々と付けて見た。或る者は『淋しさや』と附け、或る者は『宵暗や』と附け、其角は『山吹や』と付けたが、何れも芭蕉の氣に入らぬ。爰に於てか芭蕉自身が『古池や』と附けた。『古池や蛙飛び込む水の音』之れで立派な俳句に爲つた。此俳句は人口に膾炙して居るが、其本は斯う云ふ風にして出來たのであるから、禪意を含畜して居ることは勿論である。扨て此句が又佛頂禪師の意に契つたので、禪師は直ちに印可證明を與へたと云ふことであります。之れ等も類則として見ることが能きる。さて一僧來つて趙州に向ふ、

『和尙親しく南泉に見ゆと、是なりや否や』

州云く、

『鎭州に大蘿蔔頭を出す』

名古屋名物は大根ぢやさうな。之れを解して、尾張名物は大根である。私も南泉門下の名物男で、尾張に於ける大根の如く、天下第一位を占めて居るなど解する輩もあるさうだが、邪解も甚だしい。斯う云ふ所は口頭に於ても筆端に於ても辯ぜらるべき所ではない。能く能く注意して邪解に墮せぬやうにしなくてはならぬ。之れ寔に千生萬劫、浮沈の決定する所である。

鎭州出二大蘿蔔一、天下衲僧取レ則、只知自古自今、爭辯、鵠白烏黑。賊賊、衲僧鼻孔會拈得。

（訓讀）鎭州に大蘿蔔を出す、天下の納僧則を取る、只知る自古自今、爭か辯ぜん。鵠は白く烏は黑きを、賊賊、衲僧の鼻孔曾て拈得す。

（講說）是より雪竇の頌『鎭州に大蘿蔔を出す』冒頭の一句に趙州の宗旨を頌し盡す、之れ又雪竇特獨の妙技で、世界中丸で大根一本になり切つて了つたやうな氣がする。世の猾い犬に向つて石を投ずれば、彼れは其石に向つて喰ひ付く。人間も愚人に爲れば月を指示するに、月を認めずして却つて指頭を見て居る。公案も千七百則一々明めればそれで萬事了する事と心得て居る。然しさう云ふ事では、却々趙州の大蘿蔔も分るまい、況してや世界中大根一本にして了ふなど、思ひも寄らぬ事であらう。『天下の衲僧則を取る』天下の衲僧、卽ち修行者たる者も、鎭州大蘿蔔の一公案を以て手本とし、鑄型を捉えて其眞似に及ぼうとして居る。漸く之れに對して邪解曲解を加へて、曲つたなり型に箝めて了はうとして居る。『只知る自古自今、爭か辯ぜん鵠は白く烏は黑きことを』公案に就き廻はつて居るやうな者には、到底古は斯く〳〵今は斯樣々々と道理を立てゝも分るものでない。分つたやうで分らぬ。鵠は昔も白く今も白い、烏は昔も黑く今も黑い。之れだけの事ならば、誰れ一人として知らぬ

者はないが、さて道理を付けて何故鵠は古今に亘つて白いか、何故烏は古今に渡つて黑いかと討ねると、此簡單な白黑さへも辯ぜられぬ。古人は、

『未だ悟らざる時は山は是れ山、水は是れ水、既に悟つた時は、山は是れ山に非ず、水は是れ水に非ず、又全く悟り盡した時は、山は自づから山にして、水は自ら水なり』

と言つて居るが、公案のみを便として居る者には、黑白山水も辯ぜられぬのであります。趙州も田舍者の、ウツカリ者かと思ひきや、豈圖らん、油斷もならぬ癖者であると、思ふ存分讃嘆して『賊々』と呼び、重ねて『衲僧の鼻孔曾て拈得す』と雪竇が讃嘆したのであります。鎭州に大蘿蔔頭を出すありとの一言で、天下の衲價悉くスツカリ、其鼻柱を捻り上げ、捻ぢ上げられて居る。それをも氣付かずに、尙ほ鎭州大蘿蔔を口にするといつて、一方に趙州を讃嘆し、他方には又雪竇自らの力量ある所を示して居ます。

第三十一則　麻谷兩處振錫

垂示云、動則影現、覺則冰生。其或不動不覺、不免入野狐窟裏。透得徹信得及、無絲毫障翳、如龍得水、似虎靠山。放行也瓦礫生光、把定也眞金失色。古人公案、未免周遮。且道評論什麼邊事、試擧看。

（訓讀）垂示に云く動する時は則ち影現じ、覺する時は則ち冰生ず。其れ或は不動不覺野狐窟裏に入ることを免れず、透得徹し信得及して、絲毫の障翳無くんば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫光を生じ、把定するや眞金色を失す。古人の公案未だ周遮を免れず。且く道へ什麼邊の事を評論する、試に擧す看よ。

（講說）例に依つて、本則に對して圜悟禪師の『垂示に云く、動ずる時は則ち影現じ、覺する時は則ち氷生ず。』此垂示の初二句は、僧肇法師の所謂『肇論』に出て居る語で、水源和尙が、或る僧の、『如何なるか是れ沙門行』

と問ひし時、此語を應用して答へられたといふが、今又圜悟禪師も、此語を取り來つて、此垂示の冒頭に置かれたのであります。先づ修行者たる者は、其心が如何に動じ、如何に覺するかと、其心の作用を能く現はす所の語であります。其心の作用に就いては動あり覺ありて、動と動けば、明鏡の影を現ずるが如く、玆に忽ち森羅萬象を生じ、現象差別の相狀を羅列する。六祖八師が、曾て二僧の爭論するを見て、

『幡の動くにあらず、風の動くにあらず、仁者が心動く』

と鐵鎚を加へられたことがあるが、全く此處である。チラリ心が動けば、直ぐに其前に物影を映出すること、死水の能く物を映ずるが如くである。覺する時とは、其チラツと心の動いた時に影現した物を覺知した時を云ふので、只見たのではなくて、正しく認識した時に、花あり、月ありと、確に知るのである。然し其覺する時に、既に早や十分形を成すこと水の變動して固形の氷となつた所である。若し之れを敎相的に解釋すれば、『起信論』の眞如緣起のやうなもので、忽然たる無明の風に依つて、一心動き、此處に三細六麁等の現象し來る樣子である。卽ちチラリとした心の動覺から、此處に天地を生じ、山河を生じ、煩惱を生じ。又菩提をも生ずるのである。迷と云ひ悟りと云ひ、染と云ひ、淨と云ふも、畢竟するに心の動覺に過ぎぬ。然らば動覺は宜しからざるかと云ふに『其れ或は不動不覺なる時は野狐の窟裏に入ることを免れず。』不動不覺でも宜しくない。如何なる緣に會ふも、心不動に

して水面影を宿さぬと云ひ、水性變化しても更に凝結して氷ともならぬと云へば、之れ又野狐窟裏に墮した者で、眞實の禪境に達した者と言ふことは能きぬ。狐と云ふ動物は頗る疑り深いから疑惑多くして、未だ禪境に達せざる者を野狐禪と云ふのである。乃ち自由自在に其働きを示すことが能きぬから、野狐窟と貶したのである。故に動覺も盡さず、不動不覺も全きものでない。『透得徹し、信得及して、絲毫の障翳無くんば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。』此一段からは、眞實學者が自由自在の妙境に居る有樣で、若し何んの滯る所もなく徹底し盡し、一切の疑ひを破り棄てゝ、全く自由に爲り、一絲一毫の障翳もなく、心天朗々として萬里片雲を止めざれば。其心の働きも亦偉大なものである、譬へば龍の水を得るが如く、虎の山に靠るが如く。絕世の働きを示すことを得る。流石の龍も水を得ざれば哀なもので、蠢々たる一介の昆虫にも劣り、猛虎も山に依らねば、家畜の猫兒にも等しい、故に眞個透得徹し信得及したる學者の活動振りは、自由自在七縱八橫、右かと思へば左、左かと思へば右で又驚くより外なし。『放行するや瓦礫光を生じ、把定するや眞金色を失す。』放行把定は與奪の換え言葉で、或る時は奪ひ或る時は與ふ。放行すれば瓦礫光りを生ずとは。與へた所で、草木國土も金光明を放つ佛である。一切衆生悉有佛性は愚なこと、有情非情其儘光明を放つ佛體である、成る程眞如法性の眞理から云ふ時は、一切平等であるけれど、若し一と度奪ひ取つて、把定すれば、眞金色を失す、今まで光明を放つた毘盧遮那如來も、其頂を履まれ、釋迦何人ぞ、達磨何人ぞ

と佛を呵責し祖を罵倒す。實に修行者、學者の見識に此二方面があるから、或る時は奪ひ、或る時は與へてゐる。『古人の公案も未だ周遮を免れず。』古人の公案千七百則もあるけれど、眞實修行する底の者に取りては、周遮たることを免れぬ。周遮は委曲で、迂り遠いこと。古人の公案など賴りとしてゐては、何時の代にか悟道に達せられるであらう。固より古人が悟りに入つた道は直截であつても、若し之れを言句に表はし來れば、其言句に拘りて、眞意を直ちに顯はし難い。『且く道へ什麼邊の事をか評論する』先づ古人の公案を持ち來りて點檢して見るが可い、其所謂公案なるものは、何事をか評論し、何事をか表顯してゐる、皆これ周遮たるを免れぬ『試に擧す看よ。』

擧、麻谷持レ錫到二章敬一、遶二禪床三匝一、振レ錫一下、卓然而立。敬云、是是。雪竇著語云、錯。麻谷又到南泉、遶二禪床三匝一、振レ錫一下、卓然而立。泉云不是不是、雪竇著語云、錯。麻谷當時云、章敬道是、和尚爲二什麼道不是一。泉云、章敬即是是汝不是、此是風力所轉、終成敗壞。

（訓讀）擧す、麻谷錫を持して章敬に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下卓然として立つ。敬云く、是是と、雪竇著語して云く錯、麻谷又南泉に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこ

と一下、卓然として立つ。泉云く、不是不是と。雪竇著語して云く錯。麻谷當時云く、章敬は是と道ふ、和尚什麼として不是と道ふ、泉云く章敬は即ち是是汝は不是此は是れ風力の所轉、終に敗壞を成ず。

（講說）本則の主人公たる麻谷は、蒲州麻谷山の寶徹禪師の事で、章敬は即ち章敬寺の懷惲禪師の事であります。又南泉は池州南泉の普願禪師のことで、此三師は何れも馬祖山の道一禪師の法を嗣いだ所の。同參であります。『擧す麻谷錫を持して章敬に到る。』之れは只文字通りでも能く分る。錫は具に錫杖と云つて、印度沙門の旅行には必ず携帶した佛家の道具であります。之れあるが爲めに、路傍の蟲類を殺し去ると云ふことも無く、又河水の漲溢してゐる時など。水の淺深を測つて渡り過ぐることが能きる。尤も後世に至つては、さる意味を忘れられて、只僧家の道具とのみされてゐる。今麻谷が其錫を持つて同學の友たる章敬の許に到り、『禪床を遶ること三匝、錫を振ること一下、卓然として立つ。』即ち其錫杖を持つたなりで、章敬の禪床を三度グルグルと廻はり、其錫杖をガラ〳〵と打ち振つて、卓然として立つた、此麻谷の面を看よ、佛祖も倒退三千里ぢや『敬云く是々』好し〳〵と言つて、所謂放行したのである。然し章敬は何んの見る所あつて肯つたか、其邊も調べて見ねばならぬ『雪竇著語して云く錯』、雪竇禪師も、章敬が是と肯づたのを見て、堪り兼ね着語して、錯、失敗つたと言つた。扨て修行者は爰に於て、大いに工夫せねばならぬ。先づ章敬はどの邊を肯つて是と言つた

か、又雪竇は何故章敬の肯つたのを失敗つたと把住したか、果して錯處は何れに存するか、此兩邊に就いて調べねば、未だ此則を透過することが能きぬ。『麻谷又南泉に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ること一下卓然として立つ。』今度は法兄の南泉普願禪師の許に往つて、章敬でやつたのと同じ手段を用ひて、宗旨を顯はさうとしてゐる。然し其形式は固より前と同一であるけれど、其意志は果して同であるか、異であるか、其處は人々の力で見るがよい。『泉云く不是不是。』前に章敬は是々と謂つて肯定したのに對して、今南泉は不是不是と否定した、南泉什麼の見る所ありてか不是と云ふか、是も不是も法柄手裡にありぢや。是と云ふも、本分の宗旨を顯はし、不是と云ふも亦然りぢや。『雪竇著語して云く錯』雪竇は此處でも堪らないで失敗つたと口走つたが、前の章敬の時に、是と云ふを錯處ありとするならば、今南泉が不是と云ふに對して錯と云ふは分らぬ。故に斯う云ふ事は、其形や言句ばかり見て居たのでは、到底眞意を領得することが能きぬ。親しく室内に參じて實究すべき所である。『麻谷云く、章敬は是と道ふ和尙什麼としてか不是と道ふ。』斯う出なければ先方の力を見ることが能きぬぞ。前に章敬の所へ行きました時は、好し好しと肯諾されたのに、今法兄は不是と跳ね付けられた、之れには、何んぞ譯の有ることでありますか、譯があるなら、承りたいと衝き込んだ。『泉云く章敬は卽ち是是、汝は不是』魚心あれば水心ありとは、卽ち此の事であります。問ひが親切だから答へも親切だ。卽ち章敬は許すが汝は許さぬぞと、是れが南泉の殺人刀活人劍であります、殺活の權は

一に南泉老漢の手に在りぢや。南泉更に語を繼ぎ『此は是れ風力の所轉のみ、終に敗壞を成さん』と註釋した。此南泉の面を見よ恐ろしいぞ。『圓覺經』に云く、

『我今此身四大和合、所謂髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色、皆歸二於地一唾涕膿血、皆歸二於水一暖氣歸レ火動轉歸レ風、四大各離、今者妄身、當在二何所一』

と、斯くの如く、吾々の身體は、終に地水火風の四大に歸へり去つて敗壞するに至る、印度に於ける古い學說は、全く斯うで、四大和合に依つて身體も生ずるけれど、四大分散に依つて身體敗壞する。今麻谷が非常の威風を示し、錫を振つたり、禪床を遶つたりするけれど、之れ畢竟は風大の力に過ぎず、故に風力の所轉も、四大分散の時には敗壞して了ふものぞ、斯る有爲轉變の動作を以て。何すれば是と言はんと云ふ意味で、今南泉は、此れは是れ風力の所轉のみ、終に敗壞を成さんと語を結んだのであります。併し是れは文字の解釋ぞよ、南泉の肚を篤と見よ、頌に云く。

此錯彼錯、切忌拈却、四海浪平、百川潮落、古策風高十二門、門門有レ路空蕭索、非二蕭索一、作者好求二無病藥一。

（訓讀）此錯彼錯、切に忌む拈却することを。四海浪平にして百川潮落つ。古策風高し十二門、門々路有り空しく蕭索、蕭索に非ず、作者好し無病の藥を求むるに。

（講說）此頌は雪竇自ら著語した錯の一字を以て頌出し而かも初め二句を以て頌は終つてゐる、後は只餘音であります。『此錯彼錯』で、一切錯ぢや。麻谷の禪床三匝、振錫一下、卓然而立も錯なれば、章敬の是々も錯、南泉の不是も錯と。一切を否定し盡して了つた故、此上是不是を論ずる餘地を留めない。迷ひも悟りも。ありとあらゆる一切を抑えて錯と言つた。錯の一字其重さ千斤と云ふべきぢや。『切に忌む拈却することを』其上に更に注意して、此錯の一字を拈却し、取り除いてはならぬと言ふ、此一語力重く、感歎に價する。若し誤つて此一字を拈却せんか、明けて悔しき玉手函で、有象無象、見るに堪へない醜態を露出するであらう。若し此此錯彼錯の境界が分つたならば『四海浪平にして百川潮落つ』で、天下泰平、國家安穩、漁は遠浦に歌ふて、皆富貴と稱し、樵は雲樹を唱へて、共に太平を樂む有樣であります。『古策風高し十二門。』古策とは錫杖のことで、前にも一寸言つたけれど、之れは佛祖傳持の道具で、鐶が十二付いて之れを振ればリン〳〵と良い音がする。十二門の說は種々あるが、今は此十二鐶を指して十二門と云つたのである。又圜悟の評にも出て居るが、昔永嘉大師が、曹漢六祖に參じた時、麻谷と同じやうに六祖の禪床を遶ること三匝し、錫を振ること一下、卓然として立ち、六祖は、

『夫れ沙門は三千の威儀八萬の細行を具す、大德何れの方より來つて大我慢を生ず』

と問答商量あつて、遂に六祖の法を正傳し得たと云ふ故事があります。今雪竇はこれ等の故事を聯想

して、古策の風格甚だ高尙であるが、扨て今は如何にと云ふ意がある。『門々路有り空しく蕭索』十二の鐶門々各々通路ありて、至極平和である。四面開放と云ふが、今は十二門開放である其樣子は廣々として障りもなければ、空しく蕭索と云つて、其平等一切の武藏野の原を形容したが。俄然一變して『蕭索に非ず』と轉じた。無爲平等も、皮相をのみ見ては不可ぬ。四海浪平かと思へば、又時あつて大浪小波を起すは海水である。『作者好し無病の藥を求むるに』、無病の病の一種だなど言へば詭辯に墮するが、無病に尻を据ゑて居るのは確に病である。悟りも悟りに腰を下して居ると、悟り臭くて眞實の悟りに至らぬ。味噌の味噌臭きは上味噌にあらずと云ふ俚諺の通りぢや。汝等大衆は既に悟りに入つたと思つて居るけれど若し是と揚げられ不是と抑えられたら其悟りが動き出はせぬか。こんな是不是位で動く樣では無病の大病ぢや、須らく速に藥を求めずんば生命危し。藥は他に向つて求むるに及ばず、雪竇自ら與へん、錯の一服、此錯彼錯、切に忌む拈却することをと、起句に振り返つて眺むるのぢや。寔に自由な偈頌である。

第三十二則　定上座問臨濟

垂示云、十方坐斷、千眼頓開、一句截流、萬機寢削。還有同死同生底麼。見成公案、打疊不下。古人葛藤、試請擧看。

（訓讀）垂示に云く、十方坐斷して、千眼頓に開け一句截流萬機寢削す。還て同死同生底の者有り麼。見成公案、打疊不下。古人の葛藤、試に請ふ擧す看よ。

（講說）此『定上座問臨濟』の一則は、寔に臨濟宗の生粹丸出しであります。昔より五家七宗には各々其特色とする家風のあることで、臨濟には又自ら臨濟の家風あつて、古人は臨濟の家風を將軍の如しと、謂つて居ます。卽ち大將が三軍を率ゐて戰場に往來し、馬上號令指揮して居る概があると言つた。固より禪宗の極意に至つては、五家七宗異りはないけれど、其家風には悉く特色がある。臨濟の家風は機鋒峻峻であるが、其家風を其儘、さらげ出したのが、本則でそれに對して圜悟の垂示である。『十方坐斷して千眼頓に開け一句截流萬機寢削す。』十方は東西南北、維上下であるが、今はそんな方角など指して居るのでない。此十方中には佛界も、魔界も、迷境も、悟境も、世間も、出世間も、

佛も、凡夫も一切籠つて居て、それを一刀の下に切り落して了ふのぢや。或は之れを吾が尻の下に引敷いて、其上にドン坐わつて了ふ。之れを十方を坐斷すと云ふ、佛だの、凡夫だの迷悟染淨を論じて居る間は、第二義第三義で、第一義諦とする所は、此十方坐斷にあつて、之れが所謂臨濟の生粹であります。千眼頓に開けと云ふも、其眼は、普通の肉眼でないことは勿論で吾々の心眼を開くのである。尤も佛法では眼を五通りに分けて五眼とし、天眼、肉眼、法眼、慧眼、佛眼とすと『大智度論』などにあるけれど、要するに、一隻の靈眼である。若し此一隻靈眼を得れば、千眼頓に開け、一隻卽千眼千眼卽一隻眼であります。白隱禪師は此一隻眼を指して黑眼と言つて居られます。大慈悲の化現である所の觀音菩薩にも、千手千眼觀世音菩薩と云ふがあるが、之れ又大慈悲の極みを顯はして居ます。今の千眼も敢て千眼と限られたものでなく、彼の隻眼の頓開する時、卽時に千眼萬眼無量眼頓開し、時間を絕し、空間を超えて居る。故に又時間上空間上到らぬ所が無い。又世人は此頓開と云ふことを誤解する者が多い。頓に開け頓に悟ると云へど決して棚から牡丹餅的に今まで何等の準備もなく、修行もしなかつた者が、忽ちにして豁然大悟するのではない、成る程開ける時、悟る時は頓に開け頓に悟るのであるけれど。其開ける迄で悟れるまでにはどの位修行するか分らぬのである。扨て今學者が十方坐斷し、千眼頓に開けたなら云うであらう。其働きは一句截流萬機寢削ぢや、一句と何ふも、言語文字に顯はれた一句ばかりでない。エヘンと、咳をするのも、一寸立ち上つたのも總て是

れ、一句中で其一句に依つて衆流を截斷して了ふ。煩惱の流も生死の流も、忽ちにして截斷される。萬機は一切の働きで、一切の活動も直ちに休んで了ふ。寢は息也と注して休息停止すること、削はケヅルと訓じ、削り棄てられること、雪に指一本動かしたばかりで、十界百界の流類を截斷し、萬機の働きも針の頭で突き止めて了ふと。世の師家たる者の働きを述べ。次に『還つて同死、同生底の有りや。』と師家と學者と同道の様子を示して、斯の如き師家と、同生同死底の者ありやと謂つて、臨濟と同生同死する定上座の事を言はうと伏線を張つたのであります。若し師匠と同生同死底の者ありと言はゞ、之れ實に恐るべきの漢で、其機鋒嶮峻傍へも寄れまい。『見成公案打疊不下』見は現の字に同じで見成は現成である。即ち目前に現はれ來り、展開されて有る其儘が公案で、公案とて外に求むべきものにあらず。男は男のまゝ、女は女のまゝ、天は高く覆ひ、地は低く載せて居る、柳は綠、花は紅現成即公案である、此頃は自明の理など云ふ語が流行するが、眞理を遠くに求めなくとも、現象界の其上に、各々自明かに見せて居るのである。然し現成が公案であつても打疊不下ぢや。打疊も打成と同じて、打つて一團と成し一纏めにし一攫にすること。處がどうして〳〵打成するに不下で、手も下されぬ、口も塞がる、實に手も付けられぬとは此事、愚圖々々謂つて居るより、玆に『古人の葛藤公案』がある、之れが何より好い例ぢや。『試に請ふ擧す看よ。』試に擧す請ふ看よと云ふが宜いなどとも言ふが、何れでもよい。

擧、定上座問臨濟、如何是佛法大意。濟下禪床擒住、與一掌便托開。定佇立。傍僧云、定上座何不禮拜。定方禮拜、忽然大悟。

（訓讀）擧す定上座臨濟に問ふ如何なるか是れ佛法の大意。濟禪床を下つて擒住して、一掌を與へ便ち托開す、定佇立す、傍僧云く定上座何んぞ禮拜せざる、定禮拜するに方りて忽然として大悟す。

（講說）『定上座臨濟に問ふ』臨濟は言ふまでもなく鎭州臨濟の義玄禪師の事で、即ち臨濟宗の太祖であります。定上座は臨濟門下で、能く臨濟の機鋒を受け、臨濟の再來とまで言はれ臨濟の活機を受用して居る。然し後に大寺名藍に出世することなく、其一生涯を雲水生活に終り、一生修行ばかりして居た。一日途に巖頭、雪峯、欽山の三人に逢ふた。巖頭と雪峯は後に德山禪師の法を嗣いだが欽山は洞山良介禪師の法を嗣いだ人であります。此三人を江湖で雪岩欽の三行と稱して居た。皆歷々の修行者であるが、因みに三人相携へて、臨濟を訪はんとすると、其途で臨濟の高弟定上座に逢ふたのであります三人は之れを好機とし、先づ巖頭問ふて云く。

『何れの所より來るや。』

と。定云く。

『臨濟より來たる』

頭云く。

『和尙萬福なりや。』

臨濟禪師は御機嫌宜しいか。定答へて云く。

『已に順世し了れり。』

和尙は遷化されましたと。頭云く。

『某等三人特に來たつて和尙を禮拜し、敎へを乞はんとしたが、福緣淺薄にして歸寂に値ふ。嗟御遷化に爲りましたか、併し折角此處まで來たから御尋ねするが、和尙日頃何んと言ふて垂示されましたか、願はくば一兩則を擧示せよ。』

と定上座に乞ふたのであります。すると定上座は、三人の求道の切なるに感じ、路傍の小高い所へ登つて、自ら臨濟禪師に爲りすまして云ふに。

『臨濟一日衆に示して云く、赤肉團上一無位の眞人ある。常に汝諸人の面門より出入す。未だ證據せざる者は看よ看よ。時に僧あり、出でゝ問ふ。如何なるか是れ無位の眞人、濟便ち擒住して云く道へ道へ。僧擬議す。濟便ち托開して云く無位の眞人是れ什麼の乾屎橛ぞと云ふて、便ち方丈に歸へる。』

と。此無位の眞人の一則は、『臨濟錄』でも、難透の一則であるが定上座は之れを擧して示しました赤肉團上これは、五臟や六腑を言ふのではありませぬ。五臟以外の赤肉團上に、一無位の眞人がゐるぞ。恁く現實的に眞人といふが、其眞人は何んぞといへば、佛にあらず、眞如にあらず、法性にあらず、さて何にか、此眞人こそ、朝から晩まで、絕えず汝等諸人の面門より出入してゐる。然らば其面門とは何にか、是等は一々調べごとである。證據を見たいか、之れだ看よ看よと臨濟和尙が言はれると、果して其語に釣られた者がある、一僧が出て來て、其無位の眞人とは什の樣なるものであるかと問ふた。時に和尙は物をも云はず、實如高座から飛び下りて來て、其僧の胸食を擒へて、道へ道へと迫まられたけれども、其僧擬議し、何んとも言へぬ。爰に於てか和尙は其僧を突つ放して置いて無位の眞人ど言つても、糞拭篦も同樣ぢやと云ひ捨て、其儘方丈へスートと歸へられた。先づ我が師臨濟の敎化は此通りであると、定上座が三人の爲めに說いた。これを聞いて流石に巖頭は舌を吐いた。然るに年少の欽山は。

『何んぞ非無位の眞人と言はざる。』

と。拶拶したから、定上座は許さない、卽ち定上座は突如飛び來たつて、欽山の胸食を捉えて。

『無位の眞人と、非無位の眞人と相去ること多少ぞ、何れ程違うかサア言へ、サア言へ。』

と。押しこくつた。然し欽山は何んとも答へることが能きないで、顏色が眞靑、眼を白黑して人心地

も無い。固より臨濟の嶮峻な機鋒其儘であるから然もあらう。爰に於て法兄巖頭出でゝ詑びを入れ、此者は修行未熟でありながら、上座に對して失禮を致した、望むらくは慈悲且く放過せよ。此度だけは許してやつて下さいと賴んだので、定上座は巖頭、雪峰の二人に免じて許した。併し此時。

『這の兩箇の老漢なくんば、這の尿床鬼子を礙殺してやつたものを。』

と罵つた。實に、定上座は斯くの如く臨濟の機を用ゐてゐる活きた臨濟であつたが、其修行時は果して如何であつたらう。『擧す定上座臨濟に問ふ如何なるか是れ佛法の大意。』一日定上座が臨濟の前に出て、佛法ギリ〳〵の極意は何んなもので御座りますと問うた。大意は普通の大略の意味ではなくて、極意卽ち至極の眞意とでも言はうか、ギリ〳〵の所と云ふ風に見たがよいと思ふ。又其佛法と云ふも現今世人より誤られた樣な世法に對した佛法ではない、世間に離れざる出世間で、世法に卽した佛法の極意を問うたのであります。此問ひを提出する迄には定上座も、何れ位修行したか分らぬ。『濟禪床を下つた擒住して一掌を與へて便ち托開す。』此惡辣手段は臨濟の當であるが、忽ち禪床から飛び下つて來てつ引つ擒へ、横面をピシリリ喰はして、突つ放した。昔の武士的教育も斯う云ふ風で子供が惡るいことをすると、突如と鐵拳を喰はして、何故鐵拳を頂戴したかを思はせ然る後に其非なることを說いて聞かせるといふ風であつた。今日の語で言へば硬教育である。然るに現時一般の教育はさうでない軟教育である、尤も近時又稍、硬教育を言ふ者もあるやうである臨濟の弟子に接する又實にこ

の硬教育主義であつた『定佇立す』定上座が突つ放された時、五體がヒヨロヒヨロとして茫然として立ち止つた。『傍僧云く定上座何んぞ禮拜せざる』傍に居た者が注意して呉れた、師匠からそれ程親切にして貰つたのに禮拜せぬとは何んぞ、早くお禮をさつしやい。定上座、此注意に依つて、初めて我れに復へり、今更氣付いたやうに、師匠を禮拜した。『定禮拜するに方つて忽然として大悟す。』處が定上座我れに復へつて禮拜する時、忽然として大悟した。之れが卽ち頓開頓悟であるけれど、定上座が今迄修行に修行を積んで居らなかつたなれば、未だ此處で大悟しなかつたかも知れぬ。然るに今大悟したのは、平素眞劍で修行したからであります白隱は定佇立の所へ。

『ア、見事な日頃禪定力强き故、此の境界が現じた、明日まで立たせて置きたいものぢや。』

と。評した、又傍僧云の所へ。

『ヱ、出過ぎ者默つて居ればよいに。』

と。注意した、然し是等も亦『臨濟錄』の調べと爲つて居るが、恁くて定上座は痛徹した。若し夫れ彼の一無位の眞人を手にして而かも本則を看ば、更に醍醐を味ふの感があるであらう。

斷際全機繼後蹤、持來何必在從容。巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。

（訓讀）斷際の全機後蹤を繼ぐ持し來つて何んぞ必ずしも從容に在らん。巨靈手を擡ぐるに多子無

し、分破す華山の千萬重。

（講說）雪竇は例の如く本則を頌し出しました。今轉結の故事から說いて置かう。巨靈は河神の名で、華山は元は一つで有つたが、今二つと爲つて太華山と華山と爲つて、居て、其中間を河が流れて居ます。初め華山の麓を水が迂廻して流れて居たのが巨靈神が出て、手を以て山の頂きを闢き、下の方は足で踏み割り、水を通して河とした。故に其山の頂上には巨靈神の手の跡が貼つて居て、山の下の方には足の跡が着いて居ると云ふ。之れは『搜神記』と云ふ書物に出て居る話であります。『斷際の全機後蹤を繼ぐ』斷際は臨濟禪師の師匠たる黃檗希運禪師を指すので、黃檗は曾て宣宗皇帝の歸依を受け、斷際禪師と云ふ諡號を賜はつた。黃檗の機鋒嶮峻惡辣なることは、能く知られて居る所で、其機鋒を全然受け得たることは、一器の水を一器に移した如く臨濟禪師の機鋒は又嶮峻惡辣であります先づ此一句を以て臨濟を讃美し、之れより愈々臨濟を卓上するのであります。『持し來つて何んぞ必ずしも從容に在らん』其黃檗の全機を持し來つて何んぞ容易なことで居られやう。忽ち大用現前して、胸ぐらを擒へて道へ道へと迫り、或は物をも言はずビシヤリと見舞ふ。修行に修行を積まねば臨濟の如き越格の手段は、容易に能き得べきことでない。『巨靈手を擡ぐるに多子無し分破す華山の千萬重。』臨濟が一掌を以て定上座を大悟せしめたことを頌出した、餘韻である。臨濟の如き巨靈神が一擧手一投足の勞は大したことは無い。無造作なものぢや。華山を二つに割つて河を通し、兩山相聳ゆること

千萬重たらしめるなど、何んでも無い。菩提の山も、涅槃の山も、佛道も、禪道も、一時に分破して了ふ。卽ち定上座、大悟の端的こそ華山分破の當體であると臨濟を益々讃嘆したが、後二句である。巨靈手を擡るに多手なし、分破す華山の千萬重。

第三十三則　陳操看資福

垂示云、東西不辨、南北不分、從朝至暮、從暮至朝、還道伊瞌睡麼。有時眼似流星、還道伊惺惺麼。有時呼南作北、旦道是有心是無心。是道人、是常人。若向箇裏透得、始知落處、方知古人恁麼不恁麼。旦道是什麼時節。試擧看。

（訓讀）垂示に云く、東西辨ぜず、南北分たず、朝より暮に至り暮より朝に至り、還つて伊れ瞌睡すと道はん麼、有時は眼流星に似たり、還つて伊れ惺々と道はん麼。有時は南を呼んで北と作す、且く道へ、是れ有心か、是れ無心か、是れ道人か、是れ常人か、若し箇裏に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼不恁麼を知らん。且く道へ、是れ什麼の時節ぞ。試みに擧す看よ。

（講說）垂示は毎も本則に對しての垂示で、垂示ばかりを個然として置くのでは無い。此垂示は凡そ四段に分れるので『東西辯ぜず、南北分たず、朝より暮に至り、暮より朝に至り、還つて伊れ瞌睡すと道はん麼』と云ふまでが第一段であります。先づ見性大悟を得た大機の者は、眞實無差別であるから、東西もなく南北もなし、朝から晩まで、晩から朝まで何して居るか、眠つて居るのか、覺めて居るのか、一向に分らぬ。然し老子は、

『大智は愚の如し魯の如し、至人は器ならず』

と云ふ、世間にも智者は多いが、大智は尠い。賢者は多いが愚者は尠い。尤も愚者と云つても、世の馬鹿者の事では無い、大智は愚の如しといふ愚だ、故に馬鹿者の眞似をせよと云ふのでは無い。佛敎に於ても實學實修を盡せば、賢者と爲り、大智と爲り、迷悟の角を取つて了ふ、東西南北とか、日夜寤寐とか、迷悟染淨とか、或は生死涅槃などいふ圭角の有る間は、眞の悟りで無い。故に眞實大悟に入つた者の前には、東西南北もなく、生死涅槃も無い。『有時は眼流星に似たり、還つて伊れ惺々と道はん麼』之れが卽ち第二段で、大用に就いて述べたのであります。大機あれば必ず大用あるが、其眼は流星の如く、チラと見ただけで、之れは何、彼れは何と辨別し、心意自在に轉ずる働きがあるが、斯ういふのを、果して覺惺て居ると言ふのであるか。卽ち他人の心肝五臟をも徹見する底の漢があつたならば、是れを覺惺して居る人と呼ぶが、之れは銘々の意で見るが可い。『有時は南を呼んで北と作す、且く道へ、是れ有心か、是れ無心か、是れ道人か、是れ常人か。』之れまでが第三段で、格外の機用を叙したのでなります。大機大用を具する者には、又格外の事もある南に向つて北斗を見ると言つたやうに南を呼んで北とし、東を指して西と云ふことが能きます。迷ひの凡夫を、光明放つ佛ともす

ることが能きれば、金を轉じて鐵とすることも能きます。鐵を轉じて金とすることは能き易いが、鐵を轉じて金とすることは困難であります。然し格外の者になれば、其大用自在であつて南を呼んで北とすることも能きるし、金を轉じて鐵とすることも能きます。是れは有心であるか、無心であるか、將た大道人の言ふことが、尋常人の言ふことか、何れも本則を睨んで居る。斯う云ふことを言ふと、禪とは倒事を言ひさへすればよいと、早合點する者があるかも知れぬが、禪は決してそんな所には無い『若し箇裏に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼か不恁麼かを知らん。』若しそれ大機大用、格外の作略を會得して、佛祖穩密の田地が分り、宗師家の働き振りが分つたならば、本則に於ける二人の出合上の事も分るであらうが、分つたと言ふなら、先づ言つて見るがよい『。且く道へ、是れ什麼の時節ぞ、試みに擧す看よ。』之れが第四段の續きて分つたとならば、开は明頭來の時か暗頭來の時か、先づ其證據には言うて見るがよいと垂示して、本則を揭ぐる、圜悟禪師の深切であります。

擧、陣操尙書看資福、福見來便畫一圓相。操云、弟子恁麼來、早是不着便、何況更畫一圓相。福便掩却方丈門。雪竇云、陣操只具一隻眼。

（訓讀）擧す、陣操尙書資福に看ゆ、福來るを見て便ち一圓相を畫す。操云く、弟子恁麼に來る、

早く是れ便を着す、何んぞ況んや更に一圓相を畫することを。福便ち方丈の門を掩却す。雪竇云く、陣操只一隻眼を具す。

（講說）本則は陣操尙書が資福に看ゆるの一則であります。陣操は唐の裴休及び李翺と同時代の居士で、其履歷の一端が評唱にも載せてあります。陣操は何んでも雲水僧が來ると、先づ齋を出し、錢三十錢許り布施して、其僧を勘辨する事を例として居ました。陣操が江州に居る時、後に雲門宗の祖師である雲門が雲水姿で、一日陣操の許へ行つた。陣操は普通の雲水坊主と心得て、矢張齋を出した然し雲門は一宗の祖師と爲るだけあつて、齋や布施を有難がつて居る雲水とは違ひます。便ち陣操問ふて云く、

『儒書の中に有ることなどは問はなくとも能く心得て居る。又佛一代の說敎たる三乘十二分敎も、之れは敎相家の方、充分研究して居る者があるから問ふには及ばぬ。今日貴僧に向つて尋ねたことは見れば貴僧も行脚をして御座るが、一體行脚は何んの爲めに爲さるか、作麼生か衲僧家行脚の事』却々威張つた問ひであります」普通の雲水ならば、既に此問ひで面喰つて了ふ所であるが、雲門は練り上げた修行をして居るから、直ぐに反門して、

『尙書足下は從來そんなことを幾人に尋ねて見ましたか』

と言つて、得はれたことに答へやうともしませぬ。最早陣操は後手に爲つて、雲門は先手を打つて、

而かも王手をしたやうな樣子が見えます。古人は之れを評して、陳操は百廿斤の鐵鎚を頭下しに擊ち掛けられたやうぢやと言つて居る。陳操答へて云く、

『卽今上座に問ふ、他の人の事は言うて居らぬ』

と雲門更に陳操の中堅を衝いて云く、

『卽今は且く置く、作麼生か是れ敎意』

と又卽今の問題を跳ね退けて。足下は如何にも三乘十二分敎までも分つたらしいことを言はるゝが、先づ禪意を答へる前に、足下に敎意を尋ねたい、如何なるか是れ敎意と切り込んで行つた。操云く、

『黃卷赤軸』

と、斯んな答へも普通の者には對へられぬが、雲門は許さない。門云く、

『這箇は是れ文字語言、作麼生か是れ敎意、經卷などは紙上の文字、不淨の古紙に均しい、火中に投ずれば燒盡して了ふ、今問ふ所の者はそんなものではない、如何なるか是れ佛一代の眞意である。』

操云く、

『口談ぜんと欲して而かも辭喪し、心緣ぜんと欲して而かも慮亡ず、言はうとしても言葉もなければ慮はうとしても心も起きぬ廣大なもので御座る。』

門云く、

『口談ぜんと欲して辭喪するは有言に對するが爲めなり、心緣ぜんと欲して慮亡ずるは妄想に對するが爲めなり、作麼生か是れ敎意』

と、飽くまで突込んで來る、鋭鋒當るべからずぢや、言はうとして言葉がないなど、そんな不自由な口では駄目だ、畢竟するに、有言に囚はれ、妄想に對して居るからのこと、如何なるか是れ釋迦一代の敎意。操無語、全く窮して了つた。爰に於てか雲門方向を變換して、

『聞く所に依れば、足下は『法華經』を看て御座るさうぢやが、眞個ですか何うです。』

操云く、

『眞實です。』

門云く、

『然らばお尋ねしますが、經中に、一切治生産業、皆與二實相一不二相違背一と說いてありますが、且く道へ非々想天卽今幾人か退位する。』

飽くまで先手で打ち出す『法華經』中の此文は有名なもので、屢々諸人の口にせらるゝ所であります卽ち、鍬を振り廻はしたり、肥桶を擔いだり、其他一切の殖産興業上の事も、佛法と相違せぬと云ふ意であります。今雲門は足下が『法華經』をお讀みになつたといふなら、此文をも御承知のことであらうが、只今天上界非々想天で、天人が何人ばかり位を退きましたかと問ふた。餘り意表外に出たので

爰でも陳操は無語で答へる事が能きなかつた。斯うなると相對の相撲ではない、故に之れからは、雲門の深切な說法と爲ります。門云く、

『足下且く草々なること莫れ』

『餘りザツとしたことはなさるまいぞ。凡そ師家、僧家たる者は『華嚴』『法華』『涅槃』と云ふやうな經典や、『唯識』『智度』『起信』等の論文を拋却して、叢林に入り來つて、十年二十年の長年月、親參實究するも、尙ほ眞實大語には至り兼ねるので御座る、今足下の敎意を會得して御座らぬのも尤もで御座る。是れから少し御修行なさるが宜しからうと存じます。』

陳操、雲門を禮拜して云く、

『全く某が惡るかつた』

と、陳操尙書が眞實佛道に入つて、修行を初めたのも之れから後のことであります。陳操が裴休、李翺などゝ同じく、唐土に於ける有名な居士と爲つたのも、斯ういふ因緣に依るので、陳操の爲めには雲門は全く善智識であります。

『擧す陳操尙書資福に看ゆ』一口此陳操が、資福禪師の許に行つて相見しました。『福來たるを見て便ち一圓相を畫す』圓相は丸を描くことで、能く葬式の引導を渡す時に、斯んなことをするものであるが、(老師高座上に於て、手を以て一圓相を空中に畫す、大衆の視線玆に集る)果して眞意を得ての上、

であらうか、頗る疑問なのもあるやうぢや。开は兎も角、今資福が、陳操を見るなり、グル〳〵グルーとやつた。この圓相は溈仰下の一大事であります。資福寶禪師は溈仰宗の出で、西堂光穆禪師の弟子で、光穆は又仰山の法を嗣いで居る人であります。『操云く、弟子恁麼に來たる、早く是れ便を着ず何んぞ況んや更に一圓相を畫することをや。』私が今此處へ來たばかりで、和尙は未だウンともスンとも仰つしやらぬから、何等の便りも手がゝりも無い。それに一圓相を描くなんて、何んの事か一向に分らぬ。此答へも素人では無いが、未だ徹底して居らぬ。『福便ち方丈の門を掩却す』資福は共儘方丈の戸をピシヤリ閉めて了つた、如何にも見事なことである。『雪竇云く、陳操只一隻眼を具す』一隻眼は普通心眼の意とし、悟りの眼としてゐて、善い方に用ひられて居るが、今は全く世間的の意で、片眼と云ふ方であります。卽ち善いは善いが、片眼では何とも仕樣がない、惜しいことぢや。自分のみを計ることが出來ても、人の爲めにすることが出來ぬ。之れに就いて古人の評もある。

團團珠遶玉珊珊、馬載驢馳上鐵船。分付海山無事客、釣鼇時下一圈攣。雪竇復云、天下衲僧跳不出。

(訓讀)團々珠遶り玉珊々、馬載驢馳鐵船に上す。分付す海山無事の客、鼇を釣る時に一圈攣を來す。雪竇復云く、天下の衲僧跳不出と。

（講說）『團々珠遶り玉珊々、馬載驢馳鐵船は上す。』此起承二句は、圓相に就いて頌出したもので、雪竇は文字に巧みなる故、人動もすれば、誤解を生じ易い。圓相も丸い。之れは佛性を丸々して居ると頌出したものであるなどと解するは邪解も甚かしい。團々は固より圓相の丸々した所を形容したものであるけれど、珠玉其物をいふのでない。珊々は其珠玉の互に磨れ合ふ時に生ずる音の形容で卑俗の語を以て言へば、スル〳〵して居るとでも言はうか。若し眞個此圓相を會得すれば、團々たる珠玉四方に繞り、山河大地頭々上に明かである。珠玉は前に一杯、後ろに一杯、右も左も玉だらけで、柱は竪に、鴨居は横に、目に見る所、團々たる珠玉、耳に聞く所、珊々たる妙音、紫摩黃金の彌陀の淨土も斯くやと思はるゝばかりである。故に天地に充滿したる此團々の玉は、馬にも載せ、驢馬にも乘せ、鐵船に上せても尙ほ餘りある。鐵船といふ熟字は頗る面白い、尤も今日でこそ、軍艦などは、鋼鐵を用ひて居るから珍しくも無いが、雪竇當時の時代に在つては、鐵船海洋に游戈するなど、夢想することさえ能きなかつた。從つて鐵船といふ文字は、甚だ破天荒な文字で、奇拔と稱せられたであらう。其鐵船上にも、珠玉を滿載し、所謂珠玉を積んだ寶船が、輕々と海上に浮かんで居る。是れが卽ち圓相ぢや。『分付す海山無事の客。』事は往々無事より生ずといふ諺があるが、今の無事は只の無事ではない、卽ち事に對せざる無事であります。五千卷の經論、千五百の公案に眼をさらし。大暇と爲つた所の、南を呼んで北と作す底の者、之れを無事の客といふ。馬載驢馳鐵船滿載の寶玉はさて、誰れ

に分かたうか、佛か凡か、將た誰れが。此寶玉を分配するには、先づ海山無事の客を第一としやう。『鼇を釣りて時に一圈攀を下す』鼇は大龜のことで、之れに就いては神話的偶言があります。勃海の東に當つて大海あり、大河悉く此處に注ぐ、海中五山あつて所謂仙境と爲つて居るが、常に水上に浮んで波と共に動いて居る。此五山水波の上に動搖するを案じ煩ひ、仙人相寄つて、之れを天帝に祈願して動搖なからしめんとした。時に天帝其祈願を受け、十五頭の巨鼇をして頭を上げ、此五山を保持せしめたといふことであります。そして其巨鼇を釣るには、攀といふ道具を用ひる。之れは大牛を五十頭許り珠數繫ぎとし、之れを餌として釣り上げるのであります。巨鼇を釣るのであるから、其餌も一通りの物では無い。今資福が一圈相なる一圈攀を投じて釣り上げたのが、卽ち陳操の巨鼇であると頌出したので、陳操も大いに雪竇に讃美された。『雪竇復云く』とは、記者の語で『天下の衲僧跳不出』と、四句の頌の畢つた後へ附加したのであります。凡そ天下の衲僧修行者たる者も、修行に修行を重ね、十年二十年親參實究し、眞實悟道に達した者の外は、一と度此資福の一圓相內に飛び込み來たつては、何んとしても再び跳ね出ることが能きませぬ。陳操果して此一圓相の圈公より跳ね出ることが能きたであらうか。普通の者なら動きも取れぬ。天下の衲僧跳不出と、最後に資福を卓上したのであります。

第三十四則　仰山不遊山

舉、仰山問僧、近離甚處。僧云、廬山。山云、曾遊五老峰麼。僧云、不曾到。山云、闍黎不曾遊山。雲門云、此語皆爲慈悲之故、有落草之談。

（訓讀）舉す、仰山僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。僧云く、廬山。山云く、曾て五老峰に遊ぶ麼。僧云く、曾て到らず、山云く、闍黎曾て遊山せず、雲門云く、此語皆慈悲の爲の故に、落草の談あり。

（講說）本則も垂示を缺いて居ます。毎度いふ通り、『碧巖』は一旦大慧の手に依つて燒かれた爲めに有るべきものが缺けて居たり、或は重複したり、或は前後錯綜して居たりして、隨分混雜して居ます。依つて具眼の者は、能く之れを穿鑿せねばならぬ。扨て本則の仰山に就いても既に述べたことがあつたであらうが、潙仰宗の大成者として知られて居る。潙山と仰山とは父子唱和と言ふて、支那に於て五家七宗の中でも、一風變つた優しい溫味のある宗風を擧揚せられました。之れが卽ち潙仰宗で當時の各宗派には、それ〴〵皆特色があつて臨濟禪師は一喝を以て之を接得し、德山は三十棒を與へ

て宗旨を示すといふやうに、各々異つた所があるが、潙仰宗は實に穩かな優しい裡に宗旨のキビ〳〵した所を表すといふ風でありました。例へば或る時、潙山が仰山に向ひ、

『若し諸方の僧が出て來た時、お前は如何なる手段を用ゐて、それを扱ふか』

と問ふと、仰山答へて云く、

『私には私の扱ひ方があります』

『其扱ひ方とは甚麼安排か、試みに行つて見せよ』

すると仰山が言ふ。

『若し僧が來ましたら、直ぐ恁う拂子を示して其僧に向ひ、其方にも亦是れがあるかと問ひませう。そして其僧が、何んとか挨拶したならば、直ぐ其僧に向つて、それはそれとして置いて、さてこれは何うぢやと問ひませう。』

と。すると師匠の潙山禪師は、

『これは是れ向上の爪牙なり。いやそれは一段と面白い。』

と稱讃されました。恁く父唱へ子和するといふ風に、何事でも諄々として相談するやうな調子で、大法の商量をする所が、潙仰宗の特色でありまして、又面白い所であります。『擧す、仰山僧に問ふ、近離甚れの處ぞ』或る時仰山禪師が、一僧に向ひ、

『お前は近頃何處からやつて來たのだ』

と尋ねられた。これは誰れしも能くやる挨拶だが深意があります。これを、

『人間の生れて來た根本は、何れにありや』

とか、

『天地の初まりは何うだ』

など〻言ふと、如何にも四角張つた哲學上の驗問のやうで面白くないが、それを恁くの如く平々凡々世間普通の挨拶を以て、商量を開始する所が可い。併し未だ親參實究を積まぬところの者だと、此間ひに釣り込まれて、

『はい今日は鎌倉から參りました。禪道會は御盛んで』

など〻言ひ出します。『僧云く、廬山』此僧は果して釣り込まれた形跡があります。廬山は支那で有名な景色の佳い所であります。此山は周の武王の頃、道術を修めて居た七人の兄弟があつて、此山中に廬を結んで居ました。此道士が何れへか行つて了つた後も、尙ほ廬だけ貽つて居たから、廬山と名づけたのであるといふ說があります。彼の有名な白樂天も又此山に廬を結んで住つて居つたともいふが、詩人は詩を題し、文人ば文を作つて、此勝景は天下に嘖々と稱せられて居ます。此廬山の中で、西の方に在るのが香爐峰といふ山で、之れば吾邦でも、彼の才女の譽れ高き淸少納言が、簾を擎げたとい

ふ事に關聯して誰れも其名を知つて居る山であります。又其南の方に當つて聳えて居るのが、五老峰といふ山で、是れは最も絕景の地で廬山に遊んで五老峰を見ねば、未だ廬山に遊んだとは謂はれぬとまで言ひ傳へて居る程であります。丁度我國で云へば日光の如き處で、日光を見ねば結構といふ事を言ふなとか、日光に遊んで中禪寺湖を見ねば未だ日光の勝を語るに足らぬと云ふやうな鹽梅であります。扨て仰山にお前何處から來たかと問はれて、此僧、ハイ廬山から來ましたと正直に答へた。世間普通の挨拶をしてゐるから、定めし世間普通の問答だらうど思ふと、大いに當てが外れた。『山云く、曾て五老峰に遊ぶ麼』廬山から來たといふことならば、定めし彼の絕景の五老峰へも廻はつて來たであらうと仰山が問ひました。これは迂濶に聞いて居るまいぞ。此僧具眼者か、將た無眼者か、仰山の口車に乘せられて、飽くまで正直に答へてゐるが、或は仰山の肚の底まで見透してゐても、態と空とぼけて、仰山を勘檢しやうと云ふのか人々の力に依つて看よ。『山云く曾て到らず』イヤ廬山には居りましたが、未だ五老峰へは行つて見ませぬ。こんな答へをした日には、臨濟なら許しはせぬ、一喝を以て喝し去つて了ひます。又德山なら屹と三十棒を見舞ふ所でありますが、潙仰の宗風は溫情を以て接する。然し何れも慈悲で、慈悲に違ひは無い。『山云く闍黎曾て遊山せず』五老峰へは行かなかつたかア、惜しいことぢや、折角日光見物をしながら、中禪寺まで登らなかつたとは殘念である。廬山に居つたと云ひながら、五老峰を見なければ廬山に遊んだとも言はれぬ。實に蟻の鬚程の隙間もない、手

嚴しい挨拶所だ、之れでは敢て臨濟の喝と選ぶ所は無い。力の足りない者では身動きも能きませぬ。故は古人は之れを評して臨濟の一喝、德山の三十棒よりも尙ほ嚴しいと言つて居ます。若し大衆諸士ならば此僧に代つて何んと挨拶するか。白隱和尙は、

『若し俺ならば、某甲乍入叢林未參堂一　山からポツと出の靑小僧でござる、よろしく御指導を願ひます』

といふであらうと言つて居られます。さあ斯ういふと、又直ぐに其眞似型をする。人の一旦やつた跡型や、言葉を眞似ても決して追ツ付くものでない。『雲門云く、此話皆慈悲の爲の故に、落草の談有り』古人は五老峰の一問を以て、熱喝眞拳よりも手酷しいと評した者もあるが、雲門和尙は、仰山の心に爲り切つて、餘り慈悲が深過ぎて第二義に落ちたと評された。此點が最も大切な所で、達道の人は其心を十分に得て、そして其上の言句を吐いて居る。例へば釋尊が降誕の時に、天上天下唯我獨尊と唱へられた。後ち雲門禪師は其唯我獨尊の佛の心を我物にした上で、

『生れるが否や、唯我獨尊など〻言つたが、俺が若し其時に居合はしたならば、一棒に撲き死し、犬に喰はして了つたものを』

と言つて居られます。是等も其肚を見ずして、唯其言葉だけを見ると飛んでも無い間違を惹き起す。此落草の草と云ふ字は、每々禪錄に用ひられて居る字で、塵土と云ふ程の義ぢや。故に落草とは塵塗

れに爲つて、第二第三に下つたといふ意味であります。

出草入草、誰解尋討。白雲重重、紅日杲杲、左顧無瑕、右盼已老。君不見寒山子、行太早。十年歸不得、忘却來時道。

（訓讀）出草入草、誰か尋討することを解せん。白雲重々、紅日杲々、左顧瑕無く、右盼已に老いたり。君見ずや、寒山子、行くこと太だ早し。十年歸ることを得ざれば、來時の道を忘却す。

（講說）『出草入草誰か尋討を解せん。』此出草とは、雲門禪師の拈弄を基として、雪竇の頌出したもので、所謂自受用的向上の一着、上求菩提の本義であります。又入草といふは、仰山の閒活底を指したので、他受用的向下の分際、卽ち下化衆生灰頭土面の樣子であります。故に此出草入草の二つの働きは、恰も鳥の双翼、車の兩輪の如きもので、何れを缺いても、片輪物になつて了ひます。此向上を離れざる向下、向下を離れざる向上でなければ悟りも眞の悟りで無く、修行も眞の修行でない。故に古人は決して見識らしい事も言はねば我見らしい所も無い。修行が至らねば悟りに囚はれて所謂悟り臭い悟りに爲る。臭味のある閒は眞の悟りではない。されば古人も鐵を變じて金と爲すことは易く、金を變じ鐵と爲すことは難いと言ふた。最う悉皆悟りを離れて、衆生濟度の手を下すので、これが大乘佛敎の本旨であります。眞宗にも往相廻向と還相廻向との二つが立てゝあります。自分が佛の

慈悲に縋つて、往生を遂げさせて貰ふ。そして極樂へ行つて成佛した上は、再び恁不滿の多い、むさい、穢い、娑婆世界へ還來して、一切衆生を濟度する、これが佛の本旨であります。扨て雲門の向上的見識たる出草も、仰山の向下的接得たる入草も、誰れか尋討することを解せんで、此境界は容易に見られまい。『白雲重々紅白杲々』これは出草入草の境界を形容したので、白雲重々東西辨せずと云ふ有樣が入草で、紅日杲々目も眩い旭日東天に出でゝ、十方世界を照す趣が出草であります。此兩境界が分つて見れば、廬山も五峰もお手の物。『左顧瑕無く右盼已に老いたり』眼中の刺が取れて了へば、再び空華を見る憂ひも無い。其瑕其刺とは、即ち煩惱障や所知障の大刺のことであります。老いたりとは老熟したこと、悟り切つた眞個無心無我の境界で、右を向ひても、左を見ても、一寸の申分も無い所ぢや。之れに就いて懶瓚和尚の實例を擧げて見やう。懶瓚が衡山といふ山の中に隱遁して居られると、唐の肅宗皇帝から勅使が立つて和尚を召し出さうといふ事になりました。其處で勅使が和尚の許へ往つて見ると、和尚は牛の糞を燃して芋を燒いて喰つて居る。牛糞の火と云ふと、一寸異樣に感ずるけれども決して穢くは無い。今でも滿洲や或は我が領土になつた彭湖島の如き地へ行けば、洵に燃物が乏しいので、牛馬の糞を乾燥して置いて、之れを燃料とする風は、一般の習はしで、一向不思議でも何んでも無い。勅使も大抵は驚いたであらう。天子の召される人であるから、立派な寺に雲水でも澤山置いて威張つて居る大智識かと思へば、自ら燒芋をして鼻水垂らしながら之れを嚼つて居る

のであります。然し勅使は天子の勅令であるから、

『和尚先づ涕でもかんで、此有難い恩命を拜受したらよからう』

と言ふと、和尚の答へが面白い。

『俺は坐禪工夫の爲めに忙しい。そんな勅使だとか何んだとか云ふ人の爲めに涕をかんで挨拶して居る暇が無い』

と言つて動きさうにもしない。勅使も乃で已むを得ず其事を天子に復奏すると、肅宗皇帝は却つて其道風の高いのを讃嘆されたといふことがあります。悟りも此處まで至れば全く眞の悟りで、左眼に瑕なく、右眼亦老熟したと云ふべきぢや。然し斯う云ふ例を擧げると、直ぐに何か奇拔なことをしたり奇妙な風變りのことを言へば、それでよいかと思ふ者もあるが、そんな形式に囚はれ言句に泥んで居ては未だ實物でない。そんな外見を衒つたりしても、そりや駄目なこと。『君見ずや寒山子、行くに太だ早く、十年歸ること得ざれど、來時の道を忘却す』以下は全く此頌の餘韻で、寒山子を引き合ひに出したのであります。寒山は誰れも知つてゐる寒山拾得と云はれる二人の名物男の一人で、其寒山の遺篇を編して『寒山詩』と云つて居ます。其中に今の句がある。『欲レ得二安身處一寒山可二長保一微風吹二幽松一近聽聲愈好、下有二斑白人一勞々讀二黃老一十年歸不レ得、忘二却來時道一』此の詩の語を借り來たつて寒山を引き合ひにしたので、十年の十は數字上の十でなく、滿位を現はし、法の成就した事を示して

居ます。總て佛法では、此意味に於て十の字を用ひ、十界、十如等といふ。さて修行の道中には眞諦もあれば俗諦もある。迷ひもあれば悟りもある。地獄もあれば極樂もある。然し大法成就の曉には、眞俗一歸、迷悟一如、地獄極樂の隔ても無い。善惡邪正を一掃し、世間も出世間も打失して、自他双泯した境界が、卽ち忘却す來時の道ぢや。寒山子は飄々乎として、今居たかと思ふと早や何處へか行つて了ふ、行くこと太早し。而かも氣に契つた處で、朗々詩を吟じ、歸へるを忘れて居る。然し寒山は普通の變人ではない。其意を解することを得る者は、蓋し少いことであらう。『到得還來無二別事一、廬山煙雨、浙江潮』で、此境界に至れば仰山に對して、廬山五老峰の答へも滿足に能きやう。衲がゴテゴテ言ふより各々自ら眞摯し之れを嚼み、之れを味ふが肝要であります。

第三十五則　垂著見文殊

垂示云、定二龍蛇一分二玉石一、別二緇素一決二猶豫一。若不二是頂門上有一眼、肘臂下有一符、往往當頭蹉過。只如今見聞不昧、聲色純眞。且道是皂是白、是曲是直、到二這裏一作麼生辨。

（訓讀）垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち、猶豫を決す。若し是れ頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、往往當頭に蹉過せん。只如今見聞不昧、聲色純眞、且く道へ是れ皂か是れ白か、是れ曲か是れ直か、這裏に到つて作麼生か辨ぜん。

（講說）第三十五『無著見文殊』の一則でありますが、本則に入るに先だつて、最初に一言して置きたいことがあります。先づ佛教に於ては、過去に千佛、現在に千佛、未來に千佛と云ふやうに、三世に三千の佛を立て、『三千佛名經』に一々其佛名を說いてあります。又其外にも、數多の菩薩方を立てゝ居ます。若し斯ういふ諸佛菩薩に就いても、十分に取り調べて、己れの肚の裡に決して置かないと、失望することがあります。固より教家の方では、斯う云ふ調べもし、研究も盡して居るけれど、

禪家に於ても、等閑にして居つてはならぬ。大體に於て諸佛菩薩方は、心の智慧德相を、それ〴〵表示して居るので、今本則に出て來る文殊菩薩の如きも、然うであります。舊譯『華嚴經』第三十一に

『東北方に菩薩の位所有つて、清涼山と名づく、過去の諸佛此山中に住し、此處に文殊師利菩薩あつて萬の菩薩の眷屬に圍繞され、常に說法をして居られる』

と云ふやうな事が說いてあります。其清涼山とは、卽ち支那の五台山であると云ふが、文殊は此清涼山ばかりに住するのであらうか。抑〻、文殊師利菩薩と云ふ菩薩は、根本の大智を表示して居るので根本の大智ならば、文殊一人之れを私することは能きぬ、卽今此會座に列なる大衆諸士の有する智慧も、亦文殊の智慧であります。從つて文殊菩薩は、唯清涼山中に限られた菩薩でなく、廣く到る所に遍在して御座るのであります。此文殊の根本の大智に相對するのが、差別の智慧を表示する所の普賢菩薩と云ふ方であります。根本智に對して差別智であります。差別智に依つて、此處に大慈悲を生ずるので、總て慈悲は差別より生ずるのであります。卽ち文殊は根本の大智、普賢は根本の大悲より表現したもので、斯う云ふことは埋觀的に見ねば分らぬ。白隱禪師は、法門の捌き方に就いて、法身、機關、言詮、難透、向上、及び理觀と六段に分げて、細密なる調べを爲し、決して麁略なことは爲さらぬ。然うでなければ、到底「無門關」に出て居る女子出定の一則などは分るものではない。昔文殊師利菩薩が諸佛方の集會して居る所へ往きますと、諸佛はズーッと各々其本國へ還つて了つた

然るに一人の女人があつて、釋迦如來の御側で般若三昧卽ち禪定に入つて居ました。爰に於て文殊不審を懷き釋迦如來に尋ねて

『我今諸佛に近づくに、諸佛去つて近づくことが能きぬ。然るに彼れは女人の身でありながら、佛世尊の許に近づくは何う云ふ譯であるか』

根本の大智を表現する文殊菩薩ではあるが、流石に分らぬ。時に釋迦如來は文殊に告げて曰く

『其理由は、汝自ら彼女を三昧より覺し起して、彼の女に就いて之れを尋ねよ。』

乃て文殊は彼の女の周圍を三度程遶り、指を鳴らし、耳を引き、鼻を突き、神力を盡すけれど、遂に覺醒ない。此時釋迦如來は

『假令百千の文殊あつて、神力を盡すも、彼の女を出定せしむることは能きぬであらう。但だ下方十二億恒河沙の世界を過ぎた所に、罔明菩薩が居るが、此の菩薩だけは能く彼の女を出定せしむることが出來る。』

と、告げられました。須臾すると、罔明菩薩は、大池の中からムク〳〵と湧き出て來て、釋迦如來を禮拜たし。釋迦如來は直ぐに彼の女人を出定せしめよと命ぜられ、罔明は指を一度パチツと鳴らしただけで、女人は直ぐに出定した。斯ういふ事が『無門關』に出て居る、尤も之れは『諸佛集要經』に出て居る一故事を取り來たつた、無門禪師が公案とされたので、所謂理觀的公案であります。根本の

大智と云はれる文殊に、却つて女子が佛に接近することが解らぬと云ふも不思議では無いか、又文殊が神通を盡して出定しなかつた女人が、罔明の唯一度指を鳴らしだ丈けで、出定したのも不思議なことでは無いか。斯ういふことは、何れも理觀上の調べて、本則の文殊の境界及び其居所なども、矢張理觀的調べを俟たねば、眞意は分るものでない。尤も前三々、後三々は理觀位では迚も分るものでない。『垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち猶豫を決す』此處までが一段で、凡そ師家たる者か爲人度生の位置に立つて、學者を接得する場合には、龍蛇を見定める眼がなくてはならぬ。此者は悟つて居るか、迷つて居るか、さては多少悟りに近づいて來たかと云ふ位のことは、一見して鑑識しなくてはならぬ。玉石を分ち緇素を別ち猶豫を決すといふも、皆な同樣で、文章の修辭上重ねたに過ぎぬ。玉人が一の鑛石を持ち來つて、此中に磨けば玉になる立派な所があるかないかも分らぬやうでは、玉人とは爲れませぬ。緇素は黑白と同じ、緇は僧侶を意味し、素は俗人を意味して、僧俗と云ふ時に緇素といふ。印度は日本など丶反對で、俗人は却つて白衣で、僧侶は黃衣を纏ふてゐる。黑は黃の古びたのぢや、故に黑白の代名として緇素といひます。卽ち善惡邪正、玉石緇素を分別することの能きぬやうなもので、師家たる資格なきもので、師家たる者は、其機に應じて、閃電光の如く、擊石火の如く、卽時に之れを分別して龍蛇を定め、玉石を分つのであります。猶豫とマゴ〳〵して居るのではない、卽斷して了ふ。天下の英雄百萬の軍に將として出陣する時も、此斷の一字を行ふので

斷を以て人に先きんじ、人を制するのであります。『若し是れ頂門上に眼あり、肘臂下に符有するにあらんずんば、往々當頭に蹉過せん。』然し若し其師家たる者にして、頂門上に一隻の眼が無かつたならば何うであらう。頂門上の眼などいふ時は、文字に拘泥する漢は、異樣な感を起し、愚人は恐怖して逃げ出すであらう。然し龍蛇を定め、緇素を辨ずるのは、此一隻の眼で決するので、白隱和尙の謂はれる黑眼であります。此頃はどうであるか、昔は衲共も子供の時分に、親達から、守袋を腰の邊に下げて貰つたことがある。今でも隨分職人などは、守袋を脇下にかけて居る者もあるやうぢやが、これが俗の御守りである。今其文字を藉りて奪命の神符と云ふた。生死に迷ふて居る命を奪ふて悟りの活力を得させるのであるが、若し此神符を頸にかけて居なかつたなら何うであらう。當然蹉過せんぢや出合ひ頭に龍は逃げて了ふ。師家にして師家の本分を盡されない。『只如今見聞不昧、聲色純眞、且く道へ是れ皂か是れ白か是れ曲か、是れ直か。』此第三段の初めの所も、文章の修辭上隔句錯綜法を用ゐたので、其聲を聞き、其色を見るに、一々不昧にして明らけく、一々純直にして誤り無い。何を見ても、何を聞いても、聞き損ひも無ければ、見誤りもしない、斯うならなくてはならぬが、大衆且く言へど、圜悟禪師が座下の大衆に大注意を與へ『無著見文殊』の一則を擧揚するが、是れ果して皂か、白か、是れ曲か、是れ直か、是れ龍か、之れ蛇か、大衆卽今緇素を別ち猶豫を決すべしと、大獅子吼をされた、洵に深切極まれる垂示であります。皂は黑也と注して、皂白は黑白に同じ。『這裏に到つて

作麼生か辨ぜん。』さあ此一則を何んとしたら可いかと、大衆に突き付けて置いて本則を出すのである此垂示には、例の試みに擧す看よといふ語を缺いて居るけれど、固より無くても分ります。

擧、文殊問無著、近離什麼處。無著云、南方。殊云、南方佛法、如何住持。著云、末法比丘、少奉戒律。殊云、多少衆。著云、或三百或五百。無著問文殊、此間如何住持。殊云、凡聖同居、龍蛇混雜。著云　多少衆、殊云前三々後三々。

（訓讀）擧す、文殊無著に問ふ、近離什麼の處ぞ。無著云く南方。殊云く、南方の佛法如何が住持する。著云く、末法の比丘、少しく戒律を奉ず。殊云く、多少衆ぞ。著云く、或は三百或は五百。無著文殊に問ふ、此の間如何が住持する。殊云く凡聖同居、龍蛇混雜。著云く、多少衆ぞ、殊云く、前三々後三々。

（講說）本則に出て居る無著といふのは、印度に於ける世親菩薩の實兄たる無著ではありませぬ。今のは支那の無著で、姓を蕭氏と云ひ永嘉の人であります。年十二にして本則龍泉寺の猗律師に從つて出家し、大乘經數十萬偈を誦すとあるから、やはり天才であつたと見える。唐の天寶八年に其行ひ

の優秀なるの故を以て得度し、二十一歳の時初めて毘尼、卽ち戒律を習ひ、金陵午頭山の忠禪師に參じた。時に忠禪師

『衆生本來佛と別心無し、譬へば雲翳を除却せば、虛空本より淨きが如し』

と、垂誨されたので、法眼を頓開したといふ。此無著は此位頓機上根の學匠であつたが、本則に出て居る文殊師利菩薩との商量は何うであるか。卽ち無著は、大曆三年夏五月の頃五臺山に詣でた。此五臺山と云ふは、支那でも有名な勝地で、文殊の淨土と言はれて居ます。故に支那の沙門が多く此處に詣でて祈念します。信念の堅き者は文殊菩薩の乘り給ふ獅子を見る、然し其全體を見ることがないなどといふ靈驗噺があります。然し今無著其文殊菩薩と相見するといふ一段であります。扨て無著は五臺山に登らぬ中に、行き暮れて了つた、何れかに宿を求めやうと思つて居ると、向ふに一つの寺院が見える。飾りも無く淋しげな寺であるが、門扉を叩いて案內を請ふと、一人の童子が出て來て門を啓いて吳れた。其處で無著が、童子に寺の名を訊けば、般若寺であると云ふ。無著愴然として此寺こそ文殊菩薩の本院であると悟り、卽ち童子の足下を拜して、一言の敎を求むるに、童子忽然として身を隱し、歌を謠つて曰く

『面上無レ嗔供養具、口裡無レ嗔吐二妙香一、心內無レ嗔是稱寶、心上無二垢染一卽眞常』

と、無著爰に於て五臺山に駐まつて、頻りに文殊菩薩を念じたといふ。又別傳に依れば

『一念淨心是菩提、勝レ造二恒沙七寶塔一、寶塔畢竟化爲レ塵、一念淨心成二正覺一』

と、いふ偈を聞いたとあるが。何れにしても、無著は文殊菩薩に相見したのであります。此時の問答商量が、卽ち本則に揭げてあります。『擧す文殊無著に問ふ、近離什麼の處ぞ、』此問ひの形式は、常に在る所で、世間並通の挨拶上にも用ひるが、今上求菩提の場合には、世間出世間、總て我が向上の一途に持ち來たして修養の資とせねばならぬ。文殊菩薩が今無著に對して、『お前は近頃何處から來たか』と問はれた。固より文殊菩薩は根本の大智より化現し給ふ所の菩薩であることを忘れてはならぬ而かも斯ういふ風に檢問された。『無著云、南方』無著は南地より參りましたと答へた。支那南地に於ては、六祖大師が弘法せられて以來、益々禪宗が繁榮し、後世まで却々盛んでありきした。衲も二十餘年前南淸の一小部分を行脚したが、彼の如淨禪師の出世された天童山の如きは、今向五百人位の雲水が集つで居て修行して居る。近世に爲つても、南地の佛法は殆んど禪の獨占といふ有樣で、雲棲大師の遺風として、初心の者は先づ念佛堂に入つて念佛を行じ、修行稍々熟するに隨つて、禪堂に遷り座禪を修めさせて居ます。尤も此禪淨兼行の風は、我が白隱禪師などは、大いに嫌つて居られます。然し之れは支那地理上より云ふ所の南方であるが、『華嚴經』入法界品に依れば

『善財童子が法を求めて、南方世界に到り、德雲比丘を初めとして、五十三善知識に參じた』

と、云ふことがあつて、南方と云ふ事は、既に印度より言ひ囃されて居ました。今無著が南方と答へ

たは、正直に支那の地理よりして答へたのであるか、將た『華嚴經』に出て居るやうな南方世界であらうか、此位の事は酩々自ら實究すべきであります。『殊云く、南方の佛法如何か住持す。』此反問中にある南方は何れを指すか。住持のことを、今日では寺の住職などゝ云ふてゐる妙な職名もあつたものじや。元來之れは三寶住持と云ふことで、今は佛法がこんな樣子に保たれて居るかと云ふに同じ。無著が南方から來たと云ふ故に、南方佛敎の景況はどんな風であらうかと問はれた。『著云く、末法の比丘少しく戒律を奉ず。』末法時の今日でありますから、[illegible]有を奉持する比丘は、洵に少う御座います。固より末法濁世の有樣は、見性悟道などの沙汰は無くて、只形式ばかりの持戒者が希に在る。『殊云く多少衆ぞ。』其持戒者と云ふのは何人位居るか。『著云く、或は三百、或は五百。』大略四五百人位なもので御座りませう。此戒律は、今日果して何う爲つて居るかといふに、衲が實見した處では、日本よりは支那の方が持戒者が多い。支那よりも暹羅、錫蘭等の所謂南方佛敎に多い。此南方佛敎に於ける戒律は、實に佛在世の時の如く、如何にも殊勝に行はれて居るのであります。日本の僧侶が葬式に行つて、人の泣いて居る席の中で大酒を飲んで、泥醉して千鳥足で歸つて行くなど、往々見る所であるが若し之れを印度僧にでも見せたなら、恐らく彼等は慄然たるであらう。然し之れも破戒は無戒に勝ると云ふから、破戒者でも尙ほ良心に一點の彈發力を有して居るなら、最初より持戒せぬ者よりは、破戒者の方が慥によい所があるに相違ない。故に經中にも『破戒は無戒に勝る』と說いてあります。今

無著は、支那南地の佛法は、持戒の者四五百人はあると云ふが、縱令見性の者はなくとも可いことである。時に『無著文殊に問ふ、此間如何んが住持す』無著は反對に、文殊に問ひました。此方の佛法の樣子は何うでありますか。『殊云く、凡聖同居、龍蛇混雜』龍も居れば蛇も居る。デモも居れば今道心も居ると答へた。見事なものであります。先師洪川老漢は、爰に於て

『和盤托出夜明珠、可謂七佛之師範、妙德薩埵之金言、感戴すべし』

と、讃嘆して居られます。然し之れが無著には分らなかつたのであらう。『著云く多少衆ぞ。』凡そ何人位居りませう、宛るで木に竹を接いだやうぢや。『殊云く前三々後三々、』文殊の答へは益々分らなく爲る。之れは室內の調べで、固より前三々も後三々も、共に數學的の數でありませぬ。古人は目前分明にして限りはないと評したが、手を打つて、尻も又打つ伯勞市と云ふことが分らねば、駄目ぢや。白隱和尙は

『之れは昨日降つた雨粒の數が數へ出せれば、直ぐ分ることぢや』

と、云はれました。斯う云ふ所の眞意になると、辯解は附けられぬ。之れは一々實際的商量を要する所で、實究すれば、少しは徑路だけが分るであらう。尾も白く頭も白し尾長鳥ぢや。

千峰盤屈色如藍、誰謂文殊是對談、堪笑淸涼多少數、前三三與後三三。

（訓讀）千峯盤屈して色藍の如し、誰れか謂ふも文殊是對談と笑ふに堪へたり淸涼多少の衆ぞ。前三々後三々。

（講說）此頌は單に詩として見ても面白い。千峰萬峯、折り重つて聳えて居て、老杉古松、欝々として居る。此處で先づ文殊を拜まねばならぬ。白隱和尙は

『悟りも無いが迷ひも無い、菩提も無ければ煩惱も無い、サツパリしたものやぢ』

と、言はれた。『誰れか謂ふ文殊是れ對談す』と斯る所で、佛と言つても裏身失命すべしと、古人は評せられました。一體文殊に對して、誰れが語つて居るのか、千の文殊が現はれて居ても見えぬ、根本が分らぬから、右も左も翠綠滴るばかり頭上漫々脚下漫々ぢや。『笑ふに堪へたり淸涼多少の衆ぞ』可笑しいでは無いか、山出しの無著が如何にも眞面目顏して、正直に何人程居ますかと尋ねた所が可笑しい。『前三々後三々』それに又文殊菩薩も長崎の事を尋ねられても、奧州の飢饉の話をすると云つた風で、一向要領を得ない。可笑しいと云へば、之れも洵に可笑しいことで椀が棚から落ちて、四つに當つて七つに割れたと云ふやうな答へぢや、可笑しい可笑しいと眞に黃絹幼婦な偈である。

第三十六則　長沙遊山來

舉長沙一日遊山、歸至門首。首座問和尚什麼處去來。沙云、遊山來。首座云、到什麼處來、沙云、始隨芳草去、又逐落花回。座云、大似春意。沙云、也勝秋露滴芙蕖。雪竇著語云、謝答話。

（訓讀）　舉す長沙一日遊山して歸つて門首に至る。首座問ふ、和尚什麼の處にか去來する、沙云く遊山し來る。首座云く什麼の處にか到り來る。沙云く始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回へる。座云く大いに春意に似たり。沙云く也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり。雪竇著語して曰く答話を謝す。

（講說）　長沙和尚の事は前にも出たかと思ふが、南泉の法を嗣ぎ、馬祖の法孫に當つて居る、後に鹿苑寺の開山と爲り、招賢大師と呼ばれた。其機鋒は極めて敏捷であつて、人來つて敎相上の事を問へば、敎相上の事を說き頌を求むれば便ち頌を與へる、作家相見を求むる者あれば、又爲めに作家相見すといふ風であつた。長沙と同時代に同じく馬祖大師の曾孫に當る百丈系の仰山和尚と云ふ高僧が

あつて、機鋒峻峻を以て聞えて居る。或る時長沙、仰山と月見をしたことがあります。其時仰山月を指して。

『人々盡く這箇有り、只是れ用不得。』

と、言つた。古人は觀月の時には、觀月が公案と爲りて、直ちに宗旨を商量する、花見は花見で直ぐ樣公案と爲る、卽ち特別に宗旨を扱はないで、着衣喫飯の上でする。然し後世に爲つては動もすれば輕躁の輩が法を粗末にする恐れがあるので、法を尊敬して然ういふ事を止めた。今仰山は月を見ながら、人々悉く之れを持つて居るが無明煩惱の雲霧に掩はれて、之れを十分使ひ切れないばかりぢやと話しかけた、尤も斯ういふ時に、一切衆生悉有佛性の佛性を有つて居るとか、心があるとか、眞如の月があるとか言はないで、這箇ありと言つた所が面白い。時に長沙。

『恰も是れ便ち儞を倩ふて用ひんや。』

と、答へた。さうぢや這箇人々具足ならば、其方を倩ふて用ひやうか、お主一つ用ひて見よいや〳〵用ひはせまいぞ。仰山云く。

『儞試に用ひよ看ん。』

沙一踏みに踏み倒すとあつて。仰山を踏み倒した、手荒な月見である。仰山起ち來つて云く。

『師叔一に箇の大蟲に似たり。』

と、蓋し大蟲とは虎の事であります、最れより以後、世人は長沙を呼んで、岑大蟲と呼んだ。卽ち虎和尙と云ふ呼稱は其機鋒の如何に嶮峻であるかを思はしめる。此三十六則も垂示を缺いてゐるから、直ぐ本則に入ります。『擧す長沙一日遊山して歸つて門首に至る。』岑大蟲卽ち長沙和尙が、或る日の事何心なく、其處らあたりを遊び回つて、ブラ〳〵と門の處まで歸つて來た。『首座問ふ和尙什麼の處にか去來する』首座は一山の大衆の首席を勤むる所の役で、時には師家に代つて大衆の爲めに、法堂に出て說法する事もあります。丁度長沙の歸り來つた時、門の所で首座に會つた。時に首座、長沙に向つて今日は何處へ往つて來ましたかと尋ねた。『沙云く遊山し來る』ブラ〳〵と近郊あたりを遊んで來たわい。『首座云く什麼の處にか到り來る』普通の者なら、『何處へ行つて來ましたか。』『山へ往つて來ました』といふ、此一問題で終つて了ふ所でありますが。然し一山の首座を勤むる程の者であるから然う聞き流して了はぬ、深切を盡して居る所が有難い。和尙遊山して來たと云はれるが、何處等邊に遊びましたかと、一歩を進めて問ひ詰める。天下の巨鐘と云はるゝ釣鐘でも、撞かねば響かぬ。又撞手の力次第に依つて響き方も違ふものであります。今長沙和尙も、首座の好い撞手を得て響き出さんとしてゐます。『沙云く始は芳草に隨つて去り又落花を逐うて回る。』今や郊外は色麗はしい桃の花が笑みを呈して、野邊は漸く綠萌え出でんとして居るが、之れから野は芳草を布き、山は櫻花に飾られるであらう。菫、蒲英公の花美しく、百花爛漫の春景色で草花に浮かれ出て往き、道々も櫻見る〳〵還つ

て來たわいと答へたが、言々に三昧を得、遊戲又三昧に一致して居る樣子も見える。『座云く大いに春意に似たり。』大層春めきましたな、別に込み入つた宗旨もあるやうに見えないけれど、長沙の心中春の如く、長閑な所ありと見て挨拶しました。『沙云く也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり。』イヤ格別の事もなひわい。芙蕖は蓮の事で、秋に爲ると蓮の葉も枯れて、いとゞ淋しさを增すに、其上冷たさうな朝露がポタリ〳〵落ちて居る。斯んな蕭條たる秋景色には勝してはあるが、と云ふて格別の事もなかつたわい。『雪竇著語して云く答話を謝す』雪竇は長沙の答への餘りに善かつたので、身震して著語し、難有い〳〵と謝意を表し、一は以て首座に代つた積りであらう。知張り答話を謝すと云つて長沙の機用を無上に讃嘆したのであります。

大地絕纖埃。何人眼不開、始隨芳草去、又逐落花回。嬴鶴翹寒木、狂猿嘯古臺、長沙無限意、咄。

（訓讀）大地纖埃を絕す。何人か眼開けざる始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る嬴鶴寒木に翹ち狂猿古臺に嘯く、長沙限り無き意、咄。

（講說）『大地纖埃を絕す何人か限開けざる』爰に於て長沙の奧院を見屆けねばならぬが、此長沙の境界になれば、機關盡き、意識亡じ、山川草木些子の滲漏するものもなく、眼に纖埃を留めず、實に

勝妙の境界であります。圜悟も此處は力を入れて評し、趙州十二時の歌を引合に出して居ます。『鷄鳴丑丑の刻』鷄鳴に夢を破られて『愁見る起き來たつて還つて漏逗することを』起きて我が身の落魄した姿を見れば、さて〳〵『裙子褊衫箇も也た無し』裙子は肌に着ける下ばきの股引の如きもの、褊衫は襦袢の如きもので、之れも親しく肌に着けるもの、起きては見たがさて〳〵襯衣も股引も無い。『裂裟の形相些々有り』唯破れ果てたる裂裟の形ばかりの品があるのみとは。『裩に襠無く袴に口無し。』裩は褌に同じて、長くして膝の邊までかゝるもの、現時女人の用ひる腰卷の如きものか、襠は正に局所の當る所でフンドシは破れ、袴は綻び、何んといふ姿であらう。『頭上青灰三五斗』灰頭、土面と云はうか、顏も頭も綿埃に掩はれて、落魄その極に達す。『本と修行して人を利濟せんが爲にす。』其目的だけは崇高なもので、悟りに悟りを盡して下衆生を利濟せんとしてゐたが。『誰れか知らん翻つて不卿嚕に成らんとは』不卿嚕とは埒明かずと云ふ俗語で、自分では一生懸命で修行しながら、却つて生半的修行者の善い手本ぞ、不卿嚕にならうとは誰れが知らう、此樣では垢の凡夫も同然ぢや。斯く趙州十二時の歌を引き合ひに出して圜悟も評を下してゐるが、之れだけ解いて置けば此頌を見ても分り易からうと思ふ。『大地纖埃を絕す何人か眼開けざる。』茫々として際限もなき大地、武藏野の原には塵埃一本も止めず、佛界も魔界も、一目の中で、障害に爲るものとては、鵝の毛の先程もない。爰に至つては、女子でも子供でも、立地に悟りの眼開け、成佛得道して了はなければならぬ。元來眼は開け

きつて居る故、其上更に開けることは要らないけれど、元來開け切つて居ることを覺知せぬ徒は矢張不開と同般である。かゝる徒輩は、草鞋を穿いて、長沙の肚の中まで尋ね入り、尋ね〳〵て通り拔けた樣なものぢや。却つて開けたる者有り麼。大衆諸士に於ては何うであらう。『初めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回ると始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る。』長沙は首座に尋ねられて、答へた。今其答へのまゝを出して、長沙の遊戲三昧を讃嘆した。春の野原へ出れば宛ながら胡蝶片々として芳草に醉ひ、飛び去り飛び來るが如く夕を忘れて遊び暮らし、散る花と共に浮かるゝが常である。唯遊戲三昧と一致せし者に至つては、其趣味亦一段と高いやうである。然し雪竇我れならば、長沙に代つて斯う首座に答へやうと云ふ意氣で『贏鶴寒木に翹ち狂猿古臺に嘯く。』と次の句を作つたのであります。翠滴る松が枝に群鶴舞ひ遊びて、赫々たる旭日大海原一面に金を溶すと云ふ目出度い景色とは全く反對して居る、贏鶴は痩せ衰へ、疲れ果てたる鶴で而かもそれが枯木に等しい寒木に休みて、バサリ〳〵して居る有樣で如何にも寂しい。猿の啼き聲は元來凄いものであるが、狂猿の啼き聲は又一段であらう。それも場所によりけりで、思ひがけなくも、草に覆はれ軒も傾いて居る樣な古寺の庭などで啼いて居るのを聞いたなら、身の毛も戰慄であらう。或は深山無人の境に於て月影細く山の端に傾いた眞夜中、狂猿の啼き聲を聞いたなら、如何にも物凄いことであらう。長沙の春景色に陽氣溢れた答へに代へて贏鶴寒木に翹ち、狂猿古臺に嘯くと言ふ積りであらう。實に此景色は秋露の

芙蕖に滴るよりも一層寂しい、否な寂しい。言はんよりは、物凄い景色である。『長沙限り無きの意。』と結び來たつて、飽くまで長沙を讃嘆して居ます。長沙の隨一芳草一逐一落花一には無限の意ありて言語を絶して居る、難有い所であります。『咄』は咄破であるが、之れは何んともかとも言はれぬ堪え切れない時は咄破するのであります。雲竇も長沙に代つて言つては見たが長沙の答へに較べて見れば却々及ばぬ長沙には無限の意ありと讃嘆し堪らなくなつて遂に咄破したのであります。處が此頌は律の形をして居るけれど、最後の一句を缺いで咄の一字を置いた之れは定めて後世の知音底を待つのであらう。斯くと見て取つた圜悟は『堀地更深埋』と一句を添へました。雪竇は一咄を下して咄破したが、未だ盡きて居ない。山僧なら、長沙無限の意地を堀つて更に深く埋めんと、結ぶであううと、此頌を全く律の形にした面白い、埋の字は通韻である。雪竇も亦此知音を得て咄破の甲斐もあると滿足するであらう。長沙無限の意。咄。

第三十七則　盤山三界無法

垂示云、掣電之機、徒勞一佇思一。當空霹靂、掩レ耳難レ諧。腦門上播一紅旗一、耳背後輪一雙劍一。若不一是眼辨手親一、爭能構得、有般底、低頭佇思、意根下卜度、殊不レ知髑髏前見鬼無數。且道不レ落一意根一、不レ拘一得失一、忽有一箇恁麼擧覺一、作麼生祇對、試擧看。

（訓讀）垂示に云く、掣電の機、徒に佇思するに勞す。空に當つて霹靂耳を掩ふに諧ひ難し。腦門上に紅旗を播げ、耳背後に雙劍を輪す。若し是れ眼辨じ手親しきにあらずんば、爭でか能く構得せん有般底は、低頭佇思し、意根下に卜度す、殊に知らず髑髏前に鬼を見ること無數なるを。且く道へ意根に落ちず、得失に拘はらず、忽ち箇の恁麼に擧覺する有らば、作麼生か祇對せん、試に擧す看よ。

（講說）『盤山三界無法』の一則に對し、例の如く圜悟禪師の垂示であります。盤山といふは評唱にも揭げてある通り、北の方幽州盤山の寶積和尚のことで、馬祖大師門下の尊宿でありました。寶積和尚の門よりは、彼の普化和尚なる鳥渡變つた人が出て居ます。『垂示に云く、掣電の機徒に佇思するに

勞す』此一段は師家にかけて看るべきであります。師家が先づ學者に接する時は、掣電の機を用ふるので、チラと閃めいた時は、既に形もなく、光りも消えて居る時で、實に神速なものである。イヤ今慥に光つたなどゝ、之れを佇思する暇もない、實に早いものである。師家が說く所の一言半句の敎示は實に掣電の機を用ひて居るから、ウツカリして居れば分らぬ。『空に當る霹靂耳を掩ふに諧ひ難し』此間も時ならぬ雷鳴があつたが、全く師家の垂敎が此通り、空中に轟く霹靂で、學人が耳を掩ふ暇なく、耳を掩ふ頃は、早や疾く、濟んだ後の祭りである。『腦門上に紅旗を播げ耳背後に雙劍を輸す』これより以下は、師家が學者を見る樣子で、其機鋒は腦天上に紅旗を飜して、悟りの頂邊に立てられた旗は、學者には却々認められぬ。何んとか耳門に透徹する樣に言ふて貰へば、多少は分るであらうが耳にも聞えぬ。雙劍を振り廻はされても、盲者の前の蛇に等しい。雙劍は殺人刀と、活人劍の兩刀で師家は常に此兩刀を有つて學者に接する。否な此兩刀は、師家の占有でなく、何人も此兩刀を本來具有して居るけれど、使ふことも知らねば、寶の持ち腐りぢや。尤も無暗に使はれては、却つて危險千萬であるが、世の師家たる者に爲れば、實に殺活自在なものである。『若し是れ眼辨じ手親しきにあらずんば、爭でか構得せん。』眼は擇法眼と云つて、法を選擇し得る眼でなくば役に立たぬ。此の眼を以つて能く邪正を辨別し、而も手之れに應ずるといふ所謂口も八丁、手も八丁と云ふやうな、俊發なものでなくば、到底構得することは能きぬ。構得は至り得るといふことで、此手眼相應の頓機の者でな

ければ、師家の雙劍を聞き分けることは難いのである。『有般底は低頭佇思し、意根下に卜度す』、或る者は頭を垂れて考へ込んで居る。唯意識を以て分別し卜度して居るけれど、幾ら考へても、唯考へたばかりで、分るものでない。我が禪門に於ては、非思量底に思量すると云つて、八識思量を用ひずして思量する、所謂八識田に一刀を下して、眞意を開拓するのであります。故に意識作用を起して、而かも意識に囚はれない、諸佛菩薩に於ては、煩惱妄想も智慧德相と爲つて働く、衆生迷妄の意識も、一刀を下して之れを一度截斷すれば、忽ち五智を得る、之れを轉識成智と云ふ。然れば非思量底に思量せねばならぬ。例へば、白隱禪師が、隻手の聲を聞けと、突然として突き出されても、唯思量底に墮する時は、其聲を聞くことも能きぬが、若し一番非思量底に住すれば、直ちに妙音宇宙に響くを覺えるが如くである。未だ低頭佇思し、意根下に卜度する間は、到底古人の意を明むることは不可能事である。『殊に知らず髑髏前に鬼を見ること無數なることを。』髑髏の前に鬼を見る、鬼とは幽靈のやうなもので、活氣更になし、墓前に幽鬼を見て居るやうでは、とても活氣のありやう筈もないが、低頭佇思の徒を形容すれば、髑髏前に鬼を見ること無數であつて、活潑々地なる大用現前の望みを絕して居る。古則古案の透過など、思ひの外のことで、そんな死妄想の幽靈を抱いて居るやうでは、駄目ぢや。『且く道へ、意根に落ちず、得失に拘らず忽ち箇の恁麼に擧覺するあらば作麼生が祇對せん。』然しながら、爰に意根下に卜度するでなく、非思量底に思量し、煩惱菩薩とか、生死涅槃だとか、或は佛

界魔界と云ふやうな得失に拘らず、當空霹靂の如く。擊電の機を用ひて、宗旨を發揚し警覺するやうな英漢が有つたなら、果して何うするか。斯う云ふ英漢に出會つたなら、其時こそは面白い芝居も演じられるが『試に擧す看よ』と云つて本則を掲げられた。

擧、盤山垂語云、三界無法、何處求心。

（訓讀）擧す、盤山垂語して云く、三界無法、何れの處にか心を求めん。

（講說）盤山の寶積禪師が悟りに入つた因緣は有り難い。總て古人の修行が、實際名聞利養を離れ出離得脫を目標として、夙夜懸命に修行して居るから、洵に平凡なる擊石や鴉鳴に因つて開悟するのである。盤山一日市中に出た所が、一人の客が肉屋の前に立つて猪肉を買つて居る。さうして其客が肉屋の主人に向つて、精底の一斤程割つて呉れと云つた。主人が肉を切りかけたが、客が特に精底と云つたので、庖丁を投下して那箇か是れ精底ならざる、私の處の肉は、皆精底ばかりで、粗惡な物は賣りませぬと答へた。此肉屋店頭の問答を、我れを忘れて聞いて居た盤山禪師は、那箇か是れ精底ならざると獨語し、省悟したのであります。之れが省悟したのも因緣到來とは云へ、平素の修行の如何に眞面目であつたかを想察するに先分であります。さて盤山禪師遷化に臨んで大衆を集めて謂はれるやうには、

『山僧も此度は大寂に入るであらうが、還つて吾が眞を貌得する者有りや』

私の寫眞を取つた者があるかと。其處で大衆は師匠に別れするのだからと悲しみながら、各々其眞影を寫して、師匠の盤山に差上げた。處が善く寫したと褒められるかと思ひの外皆叱り飛ばされた。エイ鈍漢其事で無い。時に普化和尙、其時首座位を勤めて居たか明かでないが、匠師の前へ出て『某甲貌得しました』といふ。然らば何故速に呈せざると催促されると、普化便ち筋斗を打つて出て往つた。之れは何のことぢや、筋斗とは『祖庭事苑』に依れは、筋は斤と云ふ方がよく、木を斫る道具である。其頭の方が重くて、柄の方が輕く、之れを用ひると斗轉るとある。故に筋斗を打つとは此斫木具の斗轉するやうに斗返りを打つたのである。普化和尙が飛んだ眞似をして出て往つたので、盤山禪師示衆に

『這の漢向後風狂の如くにして人に接し去ることあらん』

と評されたが、果して其評の如くであつたと言ふてよい。さて、一日盤山禪師大衆に示して云く、

『三界無法、何處求レ心、四大本空、佛何依住、璿璣不レ動、寂爾無レ痕、覿面相呈、更無二餘事一』

と、雪竇は此中初二句を拈出して本則の公案としました。困より初二句だけが所要であるけれど、本則を說く上に於て無關係ではないから、辯じて置きます。『擧す、盤山垂語して云く、三界無法、何れの處にか心を求めん』本則は前に述べた如く、盤山禪師示衆中の初二句を擧げたのであります。三界

とは佛法の須彌山說を明めねば分らぬが、畢竟大きく區別すれば、欲界、色界、無色界の三世界に分れ、細分しては二十五有となる。其大別した欲、色、無色の三世界を略して三界と云ひ、大乘佛敎では三界火宅と云つて、皆迷ひの世界として取り扱ふ。欲界は五欲世界で財欲、男女間の色欲、食欲、名欲、睡眠欲と云ふ五欲を以て滿されて居るとしてあります。欲其ものは、吾々の本能的のものや、生理的に生ずるものであつて、敢て罪惡とすべきものでは無いが、此五欲を貪る爲めに罪惡を造るのであります。色界とは、色は物質と云ふ位の意味で、形ばかりであつて粗雜な欲を起さぬ。例へば天上界の者は、男女間の色欲を起しても、人間界のやうでなく、上品であつて、一寸手など接觸すればよいと云ふ風であります。無色界になれば物質が無くなつて、肉體と云ふものが無い。全く精神生活であります。精神的作用ばかりと云つても、其中の非々想天などになれば、實に微細な精神が少し起るばかりと云ふやうな處もある。恁く欲、色、無色の三界に分れては居るが、三界は迷界で、大悟の境界でない。今は三界を平たく世界と見てよい。此世界に一切萬法森々羅々と現はれて爲るにも拘はらず、盤山は塵一本の姿もないと絕叫した。此處が盤山の宗旨ぢや。盤山は無法と云へど何うして無法と云ふのか、人々の力で捌くがよい。『四大本空佛何に依てか住せん』四大は地水火風で、此四大は物質の元素であると云ふが、萬法因緣生なる故、四大本來當體卽空である。されば十方三世の諸佛の心も、諸祖の心も、住卽無住で空に當る。霹靂のやうなものであらう。『璿璣動ぜず寂爾として痕無

し』璿璣は星の不動なるを云ふので、北斗七星中斗に當る四星を璿璣と云ひ、柄に當る三星を玉衡と云ふ。此七星は常に其位置不動であるから、天文を觀測する標準とされる。故に漢以來璿璣玉衡を渾天儀と稱して居るが、今は其不動の義を借用し來つたので、璿璣玉衡の如く無始以來動かぬ、動かぬ故に、又更に痕跡を止めない。心など云ふものも動き出すと痕跡を貽す。六祖大師は二人の弟子が、幡の風に飜へるに就いて爭論するを呵して、

『風動くに非ず、幡動くに非ず、仁者心動く』

と言はれた如く、心が動く故外界に痕をつける。『覿面相呈す更に餘事なし』目前互に照し合つて、磨き上げた鏡の如く、彼れ是の如く觀照し、我れまた是の如く觀照し、而かも鏡裏一物を止めざる如く蟻の鬚一本も痕跡を止めない所まで至らねばならぬ。斯く垂語された盤山の精神は、最初の二句に盡きて居る故、雪竇は首の二句だけを取り來たつて本則とされた。三界無法、何れの處にか爰を求めん、心は何れにあるか、之れを認得せんことを要す。恁くて例の如く雪竇頌して云く、

三界無法、何處求心、白雲爲蓋、流泉作琴、一曲兩曲無人會、雨過夜塘秋水深。

（訓讀）三界無法、何れの處にか心を求めん。白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作す。一曲兩曲人の

會する無し、雨過ぎて夜塘秋水深し。

（講說）『三界無法何れの處にか心を求めん。』斯く本則を折り返して頌出し、之れを冒頭に置くのは、雪竇の常手段であつて、又雪竇の力であります。之れより以下は其餘裕で、『白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作す』白隱禪師は、

『此二句は、刼前刼後山河大地、一片の古曲なり、天地は無言の聖人、聖人は有言の天地と云ふ勢ぞ、盤山の體たらく、白雲を冠とし、流水を琴として、無漏の古曲を彈じ出た所を形容したぞ』

と言はれました。此句に至つて、三界無法の有樣が分らなくては、恐らく解る時は有るまい。東坡居士は、

『溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何擧似人』

と頌出した。今と殆んど同意で、流泉は只琴とのみ聞かうか、是れ又一片の長廣舌であります。『一曲兩曲人の會する無し』其一曲を聞き分ける程の者なら、又長廣舌の說法をも聞取し得るが、人の會する無し、耳根未だ開けずぢや。九峰の虔和尙は、

『還識得命麼、流泉是命、湛寂是身、千波競起是文殊家風、一亘晴空是普賢境界』

と言はれた。皆同趣であります。『雨過ぎて夜塘秋水深し』今朝見れば、昨夜の雨はスツカリ霽れて、塘の水も水嵩增したと云ふが、こりや何んぢや、矢張人の會するなしと云ふか。昨夕は時ならぬ春の

雪、櫻は今ぞ盛りに爛漫と咲き亂れて、其上にも降り積つたであらう。雨でも雪でも同じ、屋根でも堤塘でもよい。只雪竇は雨を用ひ、秋を以て結んだのである。恁ういふ偈頌は、ゴテ〳〵言はぬがよい。諷誦して其深意を探ぐる方が趣き深い。白雪を蓋と爲し、流泉を琴と作す、一曲兩曲人の會する無し、雨過ぎて夜塘秋水深し。

第三十八則　風穴鐵牛機

垂示云、若論漸也、返常合道。鬧市裏七縱八横。若論頓也、不留朕迹、千聖亦摸索不着。儻或不立頓漸、又作麼生。快人一言、快馬一鞭、正恁麼時、誰是作者。試擧看。

（訓讀）垂示に云く、若し漸を論ずれば、常に返いて道に合す。鬧市裏に七縱八横。若し頓を論ずれば、朕迹を留めず。千聖も亦模索不着。儻し或は頓漸を立せざれば、又作麼生。快人は一言、快馬は一鞭、正に恁麼の時、誰れか是れ作者。試に擧す看よ。

（講說）本則は風穴鐵牛の機と云つて、白隱門下にては、難透難解の主なるものとされてあります。斯くの如き古則に至りては、一應の提唱だけでは、滿腹の味を嘗め得ることは能きませぬ。提唱は唯參禪工夫たるに止るのみであります。文字上の事は解つたとて、それで徹透したとは云へぬ。文字以上の所に、眞の醍醐味があります。禪の禪たる所は卽ち此處であります。『垂示に云く、若し漸を論ず

れば常に返いて道に合す鬧市裏に七縱八横』此處に頓漸と云ふことが出て來た。頓漸など固と之れ敎相家の言ふことだ。天台などで云へば五時八敎を立てゝ、佛說一代敎を五時に判じ、化儀の四敎化法の四敎など細々論ずるが、攝し來れば唯之れ頓漸二敎に外ならぬ。其機に配當すればこそ大根小根の別、頓機漸機の異があるけれど、一味の眞理に至つては無二亦無三であります。此頓漸のことは『楞伽經』にも出て居るかと思ふが、頓とは何んの事もない、明鏡の前へ我が鬚面をニューと出す、其時早く此時遲しぢや、其鬚面を出した時、既に明鏡中に吾が鬚面を認むるのである。兩手を拍つて聲を發するやうなもので、實に頓極頓速、電光石火ぢや。やツと云ふ間に、廓然徹到して了ふ輩を頓機と云ふ。漸は漸々で、百姓が春種を下し、苗を植ゑ、草を取り、雨露水土の力を被つて、秋漸く實り、之れを庫中に收むる如く、更に一分一時の油斷なく修行して、終に心眼を開いて、理體を見るので、之れを漸機と云ふ。然し此の頓と、漸とは、又永く離れて存するのではない、頓悟の後に漸修を要すで、漸修を用ゐざる頓悟では危險千萬ぢや。垂示に云く漸を論ずれば常に返いて道に合す、返の字は返つてと讀まずに返いてと讀み、逆の字の意で見る方がよい。常は常道常法で、規則通りと云ふことぢや。規則通りに行くのは平時の場合である、普通常人の上のことである。若し夫れ不時の事ある場合に於ては、常道を以て律すべからず。常人以上の巨魁偉人に在つては、規則なとに拘泥して居られない。常道に反いて而かも能く常道に合すぢや。臨機應變常道を破つて而かも常法に適ふ。

恰も觀世音菩薩が、三十三身を應現して、衆生救濟の活動を爲すが如くであります。故に東京の銀座の樣な、熱鬧の市街に於いても、七縱八橫、自由自在の活動を爲す事が能きる。『若し頓を論ずれば、朕迹を留めず、千聖も亦模索不着』漸でさえ鬧市裏に七縱八橫ぢや、若し頓を論じたなら、迷悟の迹方も留めず、山と云へば川と應へ、其間些の朕迹を留めない。斯る輩に爲ると、三世十方の諸佛諸聖も手の出しやうがない。引捉えやうとしても捕えられぬ。且く頓漸を分けて論ずれば此やうであるが『儻し或は頓漸を立せざれば又作麼生、快人の一言、快馬の一鞭、正に恁麼の時、誰れか是れ作者、試に擧す看よ』古人は「正に恁麼の時」の二句を、『作麼生』の次に入れて看よと言ふたが、夫れも可なり。頓だの漸だのと七面倒臭いことを言はなければ何うだ。一隅を擧けて三隅を知ると云ふ徒輩、上根上機の者を指して快人と云ふ。駄馬は鞭打てども走らない。千里の駿馬に爲ると、敢て一鞭を加ふるに及ばぬ、鞭影を見て直ちに千里を馳するのであります。快人は唯一言すれば十句を領す、全く快馬の一鞭ぢや。斯る徒輩のみ能く夫れ活動自在なのである。試に本則を擧げん。

擧、風穴在二郢列衙內一、上堂云、祖師心印、狀似二鐵牛之機一。去即印住、住即印破、只如二不レ去不レ住、印即是、不印即是。時有二盧陂長老一出問、某甲有二鐵牛之機一、請師不レ塔レ印。穴云、慣下釣二鯨鯢一澄上巨浸、却嗟蛙步驟二泥沙一。陂佇思。穴喝云、長老

何不二進語一。陂擬議、穴打一拂子。穴云、還記二得話頭一麼、試擧看。陂擬レ開レ口。穴又打一拂子。牧主云、佛法與二王法一一般。穴云、見二箇什麼道理一。牧主云、當レ斷不レ斷返招二其亂一。穴便下座。

（訓讀）擧す、風穴郢州衙內に在つて上堂して云く、祖師の心印、狀、鐵牛の機に似たり。去れば卽ち印住し、住すれば卽ち印破し、只去らず住せざるが如きは、印するが卽ち是か、印せざるが卽ち是か。時に盧陂長老といふもの有り、出でゝ問ふ、某甲鐵牛の機有り、請ふ師印を搭せざれ、穴云く、鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、却嗟す、蛙步の泥沙に驟することを。陂佇思す。穴喝して云く、長老何んぞ進語せざる。陂擬議す、穴打一拂子。穴云く、還つて話頭を記得する麼、試に擧す看ん。陂口を開かんと擬す。穴又打一拂子。牧主云く佛法と王法と一般。穴云く箇の什麼の道理を見る。牧主云く、斷ずるに當つて斷ぜざれば返つて其亂を招く、穴便ち下座す。

講說）『擧す風穴郢州の衙內に在つて上堂して云く』此風穴和尙は却々の行り手でありました。傳は『傳燈』に就いて調べて見るがよい。衙內は郡主の政廳ぢや。上堂は室に入り堂は上ると云ふことから來て居るので、說法すること。さて風穴和尙一日、衙內にあつて、上堂して云く『祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり』心と云ふことは、吾が禪門に於ては大切なことだ、此頃は心理學だとか云ふも

のが、却々進歩したが、佛敎中でも敎相家の方では、矢張論理的に疾くより此事を研究して居る。『倶舍』の上でも『唯識』の上でも、大いに組織的に論述して居ます。禪門ではこんな敎相的の研究はやらないけれども、併し之れを一應論理的に研究した後にしないと、唯大まかなことに爲つてならぬ。印と云ふことは佛法でも三法印などゝ云つて、他の外道諸敎と區別する印として居る。印は卽ち印で、我れは確に千圓借りたと云ふ證據に印を捺す。印を捺した以上は何んと言つても動かぬ。處が今は祖師の心印ぢや、心を以て印とし、此心印を捺して、一切萬法を間違なく定めるのである。然らば佛々祖々相傳へ來たる所の心印とはどんなものか。風穴和尙は形鐵牛の如しと言ひました。鐵牛とは鍛冶屋の打ち上げた鐵製の牛ではありませぬ。之れはコツトイ牛のことぢや、彼のコツトイ牛のことぢや。

「去れば卽ち印住し、住すれば卽ち印破す」此コツトイ牛の奴は、却々に澁とい奴で、此方へ向けやうと引つぱれば、ウーと彼方へ向く、此奴コツトイ奴めと捨て置けば、モーと哮えて此方へ向く、何んとも御し難いのが此鐵牛だ。祖師の心印は此鐵牛で、去らんとすればベタリと印し、印せんとすればドツコイ動かぬ。『只去らず住せざるが如きは、印するが卽ち是か印せざるが卽ち是か』取り除けもせねば、引き留めもしない、此去住の二途を離れて、扨て此鐵牛をどうしたものだ。印するが是か、印せざるが是か。差別を離れ平等を去り、之れを如何に所理するか。『時に盧陂長老と云ふ者有り、出て問ふ、某甲鐵牛の機有り、請ふ師印を搭せざれと』すると大衆の中から、盧陂と云ふ長老がヌツト

起つて、某甲鐵牛の機ありと言つて峥嶸たる頭角を振り立て出て來た、此痩せ坊主にも鐵牛の機がござる。請ふ師印を搭せざれ、暫く御待ちを願ふと云ふ譯だ。『穴云く鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて却嗟す蛙歩の泥沙に驟ずることを』鯨鯢は大鯨であつて、牛十二頭を以て釣り上げると云ふ。巨浸は大洋の事。風穴和尙は此盧陂長老の起ち上つたのを見て、鯨鯢を釣り上げて、大海の濁りを澄ませるのは尋常ぢやが、やれ〳〵そこらへ土蛙が出て、泥沙の中でマゴ〳〵して居る、呆れたものだと罵つた。然し此痛罵は有り難い、所謂大慈悲の痛罵ぢや。扨て其土蛙は何うしたか『陂佇思す』起ち上つた儘考へ込んだ。之れが善い所で、風穴其機を外づさず『喝して云く、長老何んぞ進語せざる』何んで言はない、道へ道へと促す。促がされたから『陂擬議す』口をモガ〳〵とさせるや否や、霹靂一聲、閃光と共に來たる『穴打一拂子』風穴和尙は持つたる拂子でポカリと一つ打ち込んで『穴云く還つて話頭を記得する麼、試に擧す看ん』言へ言へ、速に言へと肉薄する。『陂口を開かんと擬す。穴又打一拂子』風穴和尙は盧陂に口を開かせない、直ぐに又打ち込んだ。これは全く芝居見たやうだが芝居ではない、眞劍勝負だ、禪法の事は常に眞劍勝負でなくば、此鐵牛を捉えることは能きない。『牧主云く、佛法と王法と一般』今までは傍觀の位置に在つた施主の牧主が、覺えず聲を發しました、佛法と王法と一般と。佛法も王法も同じことぢや。之れは能く出ることであるが、佛法と王法と別として居る間は談ずるに足らぬ。佛法の外に王法なく、王法の外に佛法はない、佛法と王法と一般ぢや。

尤も此王法と云ふのを、一國の國法とか、憲法とか見ても惡るくはないが、モツと廣く世間法と見るのである。『穴云く、箇の什麼の道理を見る』佛法と世間法と一般だと云ふがそれは亦何ういふ譯だ。

『牧主云く、斷ずべきに斷せざれば、返て其亂を招く』世間法でも然うだが、斷ぜねばならぬ時に、斷せざれば、禍必ず起る。斷ずべき時には毀譽褒貶も情實も顧みない。若し夫れ人情を以て事を左右せば、必ず亂を招くの基となるのであります。今和尚が盧陂を接得する、亦之れと一なるを認めたと答へた。此牧主の答へは和尚の臍に契つたと見えて、和尚は何も言はずに、スーと奥へ這入つて了つた。『穴便ち下座』は記者の語ではあるが、能く其場の有樣を表はして居つて、此四字甚だ力があります。此風穴和尚は却々の豪者で、未だ靑坊主の時代に、南院和尚に參じた話があります。卽ち南院の室に參じて、

『端的乞ふ、師分てよ。』

と言ふと、院和尚左手を以て膝を拍つ、穴之れを見て、カーツと一喝しました。すると院和尚今度は右手を以て膝を打ちました。穴又カーツと喝すると、院和尚は左手を揭げて、

『這箇は卽ち闍梨に從す。』

と言ひ、右手を揭げて、

『那箇は又作麼生。』

と言ふた。風穴何んぞ擬議せん、又もや大喝しました。南院遂に拄杖を拈起しました。穴之れを見て云く、

『和尚什麼をか爲す。某甲は其拄杖を奪却して、一本御見舞申さん。併し不意打ではござらぬ、後で叱言は御免蒙る』

と。それで院和尚は持て餘した。子供の駄々にも困るものだ。其處で院和尚は、拄杖を地上に擲つて云く、

『今日は此黃面の靑坊主に莫迦にされたわい』

と。何うして〳〵莫迦にされたのではない。莫迦に爲切つてゐるのであります。風穴も並大抵の坊主でないから、院和尚の言葉には乘せられませぬ。

『和尚は抑も喰はずに居て、腹が空ると申されぬか』

と言ふと、南院和尚は流石に大人であります

『闍梨嘗て衲のところへ來たことがあるか』

と横から出られたので、風穴は間誤ついて、和尚何を言ふぞと呆れてゐました。院和尚は、

『可し可し。今日はマア茶でも飲んで行かツしやれ』

と言ふ〜こんな有樣で、實に風穴は若い時から機鋒當るべからざる勢ひでありました。ところが其次

の日から、南院和尚の鉗鎚を受け、商量を重ねましたから、臨濟的傳の宗師と爲ることが能きました。頌に云く、

擒得盧陂、跨鐵牛、三玄才甲未輕酬、楚王城畔朝宗水、喝下曾令却倒流。

（訓讀）盧陂を擒得して鐵牛に跨る、三玄才甲未だ輕酬せず、楚王城畔朝宗の水、喝下曾て却つて倒流せしむ。

（講說）『盧陂を擒得して鐵牛に跨る』風穴和尚は大衆の中から、盧陂長老を生け擒つて、而かも之れを鐵牛に乘せてやつた。『三玄の才甲未だ輕酬せず』三玄三要は臨濟の武器ぢや。臨濟云く、

『一句語の中に三玄門を具すべし、一玄門に三要を具すべし』

と、頗る仔細のあることぢや、とても陳べ盡し難し。之れは『臨濟錄』に出て居る明眼の師の武器などは振り廻はさない。斯る武器を振り廻はしたら、それこそ危險、盧陂長老などは傍へも寄り付かれない。『楚王執畔朝宗の水、喝下曾て却つて倒流せしめん』楚王は郢州の衙主のこと、楚王城下の流水が海に注ぐを、朝宗の水と云つたのであります。風穴和尚は三玄など危い。武器は振り廻はさぬが、若し一喝を下したならば、楚王城下の河水韃靼として洪波を起すの勢あるも、忽ち却つて逆流する

であらう。鐵牛を驚走せしむる位は何んでもないこと、嘉州の大象をも嚇殺することが能きる。斯んなことを言ふても、未だ〳〵風穴和尚の宗旨を擧揚し盡されない。

第三十九則　雲門花藥欄

垂示云、途中受用底、似虎靠山。世諦流布底、如猿在檻。欲知佛性義、當觀時節因緣。欲煆百鍊精金、須是作家爐鞴。且道大用現前底、將什麼試驗。

（訓讀）　垂示に云く、途中受用底は、虎の山に靠るに似たり。世諦流布底は、猿の檻に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし。百錬の精金を煆えんと欲せば、須らく是れ作家の爐鞴なるべし。且く道へ大用現前底、將に什麼としてか試驗せん。

（講說）　本則は『雲門淸淨法身』の一則で、本則を的に懸けての圜悟禪師の垂示であります。『垂示に云く、途中受用底は虎の山に靠るに似たり、世諦流布底は猿の檻に在るが如し』途中受用と世諦流布とは、其言詮形容相似て居るけれど、其意は大いに異つて居ります。途中と云ふ語は、家舍と云ふ語と對するので、而かも不一不異の關係に立つべきであります。故に臨濟は、常に家舍に在つて途中を離れず、途中に在つて家舍を離れずと云ふ。家舍とは我が禪門の語を以て言はゞ、本分の正位ぢや、

卽ち平等一味を云ふ。此家舍の反對は途中で、所謂差別の方面であります。家舍と途中、平等と差別、永く隔歷して居る間は、眞實活潑々地の活動は能きませぬ。吾が正位を守らず差別界に出で、自由自在の活動を作すのが途中受用で、之れを家舍を離れずして途中に在り、途中を離れずして家舍に在りと云ふのぢや。上は菩提を求め、下は衆生を化すると云ふ佛菩薩の働きも之れぢや。上求菩提下化衆生は、實に佛菩薩の生命であつて、吾々は之れを理想として向上するのであります。吾々が且らく退いて修養する爲めに、或は叢林に入り、或は山に隱れるのも、此途中家舍を自由無碍ならしめんが爲めの因地で、佛菩薩の本領に入らんが爲めであります。毎も坐つてばかり居たのでは、石地藏と何んぞ選ばんやであります。尤も石地藏と云つても、其本地は活地藏であるから、途中受用七花八裂であります。途中受用底の活動振りは、虎の山に靠るが如くで、虎は市町に出でゝは、其力を現はさないで然し山に靠つたならば、彼れは滿腹の力を現はすのであります。世諦流布底は猿の檻に在るが如し、流布と云ふ語は、和辨をつけ難い、墮落といつても當らない、雷同と云つても當らない。マア附いて廻ることだ。世諦は眞諦に對する俗諦と同じく、出世間道に對する世間道であります。卽ち自家の本分を明かにせざれば、自由自在の活動は能きぬ。世諦流布ぢや、束縛を受けて脫することが能きぬ。恰も猿猴の檻の中にあつて、モガキ騷ぐが如くであります。『佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし、百錬の精金を煆えんと欲せば、須らく作家の爐鞴なるべし』佛性の義は法華涅槃に說

く所で、吾々各自に具有する所の德であります。雷だ其隱れたるとは顯はれたるとに依つて、爰に迷悟凡聖の別があります。先づ佛性の大義を知らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし、百姓が春種を下すこと無くば、何んぞ秋の收穫を得んや、之れを練磨すること無くして、何んぞ佛性の德現はれ來らんや。未だ修行もしたことなくば、唯空元氣たるに過ぎませぬ。百錬千煅の精金は、如何なる物に遇ふも、折れるの曲るのと云ふことはない、之れ作家の爐鞴にかけられたからであります。爐鞴はタヽラのことで、フイゴでもあります。粗鑛を精錬して仕上げる機械であります。吾々も大煩悶、大苦惱、大妄想、大妄念の境界中にあつて、精進修行して得た所の大信心も之れであります。斯る信心にして初めて金剛の信心といひ得るのであります。『且く道へ大用現前底、將に什麼としてか試驗せん』大用現前は、卽ち途中受用底の活動振り、百錬の精金ぢや、規則を離れて、自由の身に爲り、迷悟染淨を飛び拔けた所の活動振りはどんなものでありますか。

舉僧問二雲門一、如何是清淨法身。門云、花藥欄。僧云、便恁麼去時如何。門云、金毛獅子。

（訓讀）舉す僧雲門に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。門云く、花藥欄。僧云く、便ち恁麼にして去る時如何。門云く、金毛の獅子。

（講說）雲門は雲門宗を開いた祖師で、雲門宗は所謂五家七宗の隨一であります。雲門宗の特色とする所は、深遠高妙なる理を、巧みに言句文字の上に、些の圭角なく言ひ現はし、宗旨を自由に操る所にあるのであります。『擧す、僧雲門に問ふ、如何なるか是れ清淨法身』法身とは、佛三身中の一で佛敎中に於ては、法身、報身、應身の三身を立てて、佛敎の信條中主なるものとしてあります。卽ち一佛身を體相用の三方面より說いたのが三身でありますが、今は三身の事を辯じて居られぬから、之れは他日に讓るとして、然し此三身は三卽一、一卽三の三身であつて、外處のものではありませぬ。扨て吾が禪門は一の階級も無ければ、亦規則も無いのであります。然し階級も無く、規則も無いと言つても、惡平等ではありませぬ。惡平等は平等に擒へられた者で、之れは佛敎で貶黜する所の邪見であります。故に規則なき禪門に於ても、亦自ら多少の規則があるのであります。卽ち趙州の無字、本來の面目、庭前の柏樹子、白隱の隻手の聲と云ふ如き法身邊際の公案、或は機關、理智、向上等の順序を以て次第に修行するのであります。之れを白隱門下に於ては、法身、機關、言詮、難透、難解と云ふやうに、一則々々別解脫の階級を附けて居るのであります。今法身を明らめんとするに、彼の敎相的面倒なことを言はんよりは、古人が頗る簡單に、法を以て身とす、故に法身と云ふと辯じたのに依るがよろしい。法を以て身となす、實に簡單明瞭で、能く要領を得て居ります。佛法では法と云ふ

ことを物と云ふ位の意味に取つて居るので、吾々の五尺の體軀も、假りに四大五蘊より成り立つて居るのであるから、假和合とも云ひ、又假我とも云ふのであります。若し夫れ法身の眞理を我が物にし得れば、宇宙の一切萬法を以て、吾が身とし、縱横自在の活動を爲し、假我は轉じて大我と爲るのであります。縱令四大五蘊を以てするも、但だ五尺の體軀に止まる間は、束縛を離脱することが能きませぬ。然しながら一と度一切萬法を以て身とする時は、實に大我自在の妙用を現出することが能きます。譬へば爰に明鏡あつて萬象を照すが如しであります。花來たれば花を現じ、柳來れば柳を現じ男は男、女は女、花は紅、柳は綠、男は剛、女は柔、其儘照らして誤ることなく、差別することなく、衆緣に對すれども一視同仁だ。其現前したものを直ぐ樣取つて、一切萬法の眞理を現はすことが能きます。故に本來の面目を出せば、一切之れ本來の面目、無字を出せば總て之れ無字。頭の頂邊より足のドン底まで無字と爲つて了ふ、之れでなくては駄目ぢや。法身を觀ずれば、一切法身となつて初めて其妙所に到達することを得るのであります。今法身觀に就いて活例を擧げますれば、大原の孚禪師が初め敎相家で有つた時、一日揚州光孝寺に於て『涅槃經』を講じて居つた。時に一禪僧あり、雪の爲に降り停められて、孚禪師說法の寺に來たり、大衆と共に其講席に列しました。時恰も『涅槃經』は法身の條下であつて、三因佛性三德法身等の說を、孚禪師縱横無盡に說破しました。然るに此禪僧其講義中に失笑したとありまして、クス〳〵と笑つた。講席を終へて後、孚禪師其僧を室に招き

先づ茶を進め、そして曰く、

『其甲索より志狹劣文に依つて義を述ぶ、望むらくは敎を請ふ。』

却々言ひ難いことであります。僧云く、

『實に笑へり、上座未だ法身を知らざるを以て遂に失笑した。夫れ法身の理は横に十方に亙り、竪に三世を貫き、八極に充塞して居ると說かれるが、失禮ながら上座未だ之れを獲て居らぬから笑ひました。上座の言ふ所は他人の噂をして居るに止まつて、お手の物ではない。』

と答へた。孚禪師曰く、

『請ふ垂敎せられんことを。』

僧曰く、

『旬日法身三昧に入つて之れを得よ。』

爰に於て孚禪師は法身三昧に入り、端然として靜慮し、熱心に法身定に入つたのであります。一夜初更より五更に至るまで法身を究め、全身是れ身に爲り切つた時、角聲を聞き忽然として開悟したと云ふ。其投機の偈に曰く、

『憶ふ昔當年未だ悟らざるの時、一聲の胡角一聲悲し、如今枕上に閑夢無し、大小の梅花吹くに任す。』

と、梅花は歌曲の名で。之れは『五燈會元』に出て居るが、傳へて以て美談としてあります。斯くて孚禪師は禪門に名高いのであります。禪を究めると云うても、啻に推理的ではない、そんな迂遠なことではありませぬ。直覺的と云うても可笑しいが、マア直覺的で、直か附けであります。『僧雲門に問ふ、如何なるか是れ淸淨法身』法身には淨だの穢だのと云ふ事はありませぬ。然るに態と淸淨と云ふのには、腹黑い所があつて言ふ。『門云く花藥欄』花藥欄はマセ垣のことで、不淨隱し卽ち便所隱しの袖垣のことであります。之れだけでは分らぬ、但だ反對を擧げたと皮相ばかりを見てはならぬ。これが所謂大用現前底ぢや、世諦流布底の徒には分らぬ。之れと同じ事があります。僧あり玄沙和尙に問ふ、

『如何なるか是れ淸淨法身。』

和尙曰く、

『膿滴々地。』

と、何でも反對にさへ出れば、善いと思ふと大間違ひ和尙時に瘡を病み、全身腐膿流れて居たので、卽今膿を以て答へて居るが、言句の上で解決を附けやうとしても徒勞だ。今の花藥欄も之れと同じで此僧分つて言つて居るのか知らぬが、駄目を推して居ます。『僧云く、便ち恁麼にして去る時如何』と。花藥欄中法身現前せし時は何うだ。『門云く金毛の獅子』益々幽玄であります。如何なるか淸淨法身

曰く糞袋。糞袋中法身の光明赫々たる時如何、曰く金毛の獅子、カツタイ犬如何にも立派なものぢや。若し夫れ法身三昧に入つて、法身を獲れば、此糞袋を取つて、雲門の前に拋つことが能きやう、然らざる底の者は、先づ退いて法身三昧に入れ。頌に曰く。

花藥欄莫二顢頇一、星在レ秤兮不レ在レ盤。便恁麼太無レ端。金毛獅子大家看。

（訓讀）花藥欄顢頇すること莫れ、星は秤に在りて盤に在らず。便ち恁麼太だ端無し。金毛の獅子大家看よ。

（講說）『花藥欄顢頇すること莫れ。』雪竇和尙が雲門の語を採つて、直ぐ花藥欄と言つて居るが、それは決して鸚鵡返しではありませぬ。雪竇の力を以て陳べたので、語を襲うて居るのでは無い。顢頇とはヌラリとしたこと。夏日炎熱百草を焦す時、大きな糸瓜がヌラリと下つて居る。花藥欄と言ふ語に附き纏ふてヌラリとして了つては駄目であります。是れに就いて先師洪川老漢が言ふて居らるゝ。

『大抵月と云へば直ちに水中の月を見る、然し月は常に靑天に在つて皎々たり。定盤星と云ふことがあるが、星は常に盤上に於て求むべし、若し盤上に之れを求むれば迂にして遠い。然らば淸淨法身は何れに在りや、曰く花藥欄。』